

日本への回帰

第二集



大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編

日本への回帰 (第二集)

青年・学生運動の新しい展開―

—本書は昭和四十一年八月、雲仙において行われた

第十一回「学生・青年合宿教室」における講義を

中心として編集したものである—

は し が き

アジアは今、激しくゆれ動いている。後進地帯への共産主義の衝撃が、到るところで激しい動乱をまき起しているのだ。ベトナム、インドネシア、中共はその三つの焦点である。

北爆開始以来二年、五十万を越える米軍が投入されているが、ベトナム戦線は膠着し、新しい展開への兆は見えない。近代の生み出した「イデオロギー」という神と、性能の卓抜した殺戮兵器と、米ソ、米中、中ソの国家利害が三つ巴にからみ合つて、湿地とジャングルの風土に劫火が荒れ狂っている。「戦争」がその非情な意志を貫徹してゆく現実に対して、「ベトナムに平和を」というスローガンは完全に無力である。しかし、このスローガンが革命勢力結集へ果す有効性は、最大限に利用されている。感傷的人道主義へのアッピールが、左翼の戦略戦術へ容赦なく組みこまれてゆく欺瞞は許せない。「ベトナム問題」は思想戦における革命陣営の鋭い武器である。

九・三〇事件以来、インドネシアは左から右へと大旋回を遂げた。民族、宗教、共産主義を三位一体とするナサコム体制は崩壊した。北京——ジャカルタ枢軸の推進者であり、中共と共にアジアのラディカリズムを代表したスバンドリオ外相は反逆罪に問われた。陸軍の主導権によるスカルノの追い落としは時間の問題といわれる。おびただしい流血の中で、政情不安は極め

て深刻である。

昨年四月、郭沫若の自己批判に始つた中国の整風運動は、半歳の間、紅衛兵運動、文化大革命へと主流派と実権派が血みどろな権力闘争を続けている。猜疑と憎悪によつて生き抜いて来た共産主義者が一たび権力をめぐつて敵対関係に入るとき、いかに残酷非情な闘争を辞さないか、われわれは眼前に展開されつつある悲惨なドラマを凝視すべきである。それは、いかなる詭弁をもつてしても、全く弁護の余地なき非人間性を露呈しているのではないか。しかも、中共は昨年中に連続三回にわたる核実験を重ね、ミサイル核兵器の開発に成功した。今や日本列島は完全にその射程距離に入った。

中ソ関係も極度に緊迫している。中共の内部闘争が辺境に波及するに従い、その長い国境線が緊張の度を加えるのは必然である。しかも中共は意識して対外的緊張を作り出している。両国の亀裂は予測を越えた速度で深まっている。ソ連は二十六個師団の地上兵力を極東地域に配置し、中距離ミサイル部隊を国境線に集結し、ウラジオにはミサイル装備の四十隻をふくむ百二十隻の潜水艦を集結したといわれる。一方中国は、新疆、東北三省に五十万の兵力を展開していると報じられている。世界最大のウラニウム埋蔵量を持つ新疆地区をめぐつて、情勢は全く予想を許さない。数年前には想像も及ばなかつた国際関係の激変である。アジアの情勢はきびしく、かつけわしい。

このように力と力が軋み合い、火花を散らしている国際政治の世界で、日本だけが嘘のように泰平である。他国の意志によつて、いつでも、侵犯できるような脆弱な「平和」が続いている。綱紀はゆるみ、ストライキは慢性化し、頹廢は根づく広がりつつある。政界上層部の一連の不祥事件に対して、「黒い霧」という小説のタイトルが、マスコミの波に乗つてまたたく間に全国津々浦々に拡がった。現在のところ革命勢力の激しい攻撃を保守はかろうじて支えているが、今にして姿勢を正さねば悔を千載に残すであろう。建国記念日の制定は、戦後思想史の一つのエポックではあつたが、祖先の心を偲ぶという体験が公教育の場で全く与えられていない現状は痛恨の極みである。

戦後思想の最大の盲点は、われわれの視野から「国家」と「死」の観念がすつぱりと脱落していたことであつた。国家とはわれわれにとつて、選択の対象ではなく運命であり、「存在」ではなくして「価値」である。遠い祖先と遙かな子孫を包含する「国」は、血脈の集団であり、われわれの生命がそこから来、そこへ帰る母胎である。人間がその生命のうつろいやすきを知り、その依拠を求める時、最も身近にあるものは国のいのちである。われわれにとつて、それは「祖国日本」である。かつて、第一次大戦後、ロイド・ジョージは「生くるに価する国」をもつて、英国再生の原理とした。故河村幹雄博士は、その言葉を引きつつ、われらの国をして

「死するに価する国」にすることを政治家の使命とした。それは半世紀前のことであつたが、その言葉は今もなお新しい。

社会のメカニズムの中で疎外されてゆく青年たちの生命は、今その突破口を模索している。果してそこには性と革命と虚無しかないのか。あるいはまた、精神の牙を抜かれた平凡な日常性への埋没しかないのか。いのちをかけて守るべき価値を持たぬ時代の中で、鬱屈し、低迷する青年の生命は何かを待っている。それはみずみずしい生命の必然の要求である。どのような形であろうと、われわれにはそれに応える義務がある。われわれが年毎に行う合宿教室は、その一つのささやかなみである。日本の伝統と生命を断とうとするイデオロギーの組織に対して、われわれは一人から一人へと生命の組織を拡げてゆく外はない。その願いの一端をこの小冊子からくみとつていただきたい。

いかなる時代においても、教育の原型は一人から一人への経験の伝達である。それは本質的に大量生産ではなく手工業でなければならない。木内、福田両先生は貴重な時間を割いて合宿地雲仙に数日滞在され、ご講義の外、質疑に答え、班別討論を指導し、パネル・ディスカッションに参加された。教育不在の叫ばれている現代において、そのご熱意は深く銘記しなければ

ならない。

終りに臨み、講義要旨に訂正加筆され、その掲載を許して頂いた講師の諸先生方に深甚の感謝を申し上げる次第である。

昭和四十二年四月二十九日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき……………1

一、思想と人生

マルクス主義の超克……………鹿見島大学助教授 川井修治……………11

われわれ人間は自分ひとりで生きていくのではない……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………35

二、合宿教室における講義

「近代化」の意味とその克服……………文芸評論家 福田恆存……………63

私の経済哲学……………世界経済調査会理事長 木内信胤……………101

パネル・ディスカッション…………………………131

三、日本のこころ

聖徳太子のお言葉と古事記のいのち…………… 亜細亜大学教授 夜久正雄…………… 161

自己克服…………… 玉川大学教授 戸川尚…………… 181

明治の精神…………… 修猷館高等学校教諭 小柳陽太郎…………… 201

短歌入門…………… 若松高等学校教諭 山田輝彦…………… 223

年間活動報告

この一年の歩み―城島合宿より雲仙合宿まで―…………… 中央大学 磯貝保博…………… 247

第十一回「合宿教室」のあらまし…………… 京都大学法学部三年 井上慎一…………… 273

歌集―学生・青年の作品より―…………… 299

あとがき…………… 320

■ 思想と人生

マルクス主義の超克

川井修治



合宿教室の由来と目標

憂うべき日本の現状

マルクス主義の衰兆

△共産党宣言の予言とその後の世界史の現実▽

△ソ連・中共・東欧の革命とその後の変容▽

△マルクスの予言不適中の原因▽

新しい胎動

合宿教室の由来と目標

玄関の垂幕にも書いてあるように、私共の合宿教室は、これで十一年目を迎えたわけです。この合宿教室がいかなる動機から、またいかなる事情によつて持たれるに至つたかという問題は、参加者諸君の大きな関心事であると思われるので、先ずそこらの事情をかいつまんでお話ししてみたいと思います。

主催団体の一つである国民文化研究会は、先程挨拶をされた小田村理事長をはじめ大部分の者が、昭和十五、六年以来の古いつき合いの仲間です。丁度支那事変から大東亞戦争にかけて、私共は皆さんと同じ位の年令の学生で、またあたかも皆さんと同じようなこういう合宿教室で、志を結び合うに至つた仲間達なのです。私共はあの悲劇的な戦争に際して、何とかして日本を敗北から救はんものと、和平への努力を続け、さらに当時の統制経済批判の運動を展開したものでしたが、東条政権下の憲兵の弾圧を蒙り、志も果たせぬままに戦線に散つて行かねばなりません。私も東大二年の時に学徒動員に合い、シベリアに抑留されてどうやら生き永らえて来たわけですが、その間多くの、そして優秀な仲間達が各地の戦場で戦死し、不帰の客となつてしまいました。そして終戦——それ以来私共の念頭からは、もしこれらの仲間達が生きておれば……という思いが離れません。もし、これらの優秀な仲間達が生きていたなら

ば、あの人達はうらぶれ果てた祖国を建て直すために、何等かの動きをやったことは疑をいれ
ません。それを思えば、私共が普通の市民生活だけにかまけていたのでは相済まない、それを
一步超出して何か世に役に立つことを実行せねばならぬ、というのが私共の絶えざる念願でし
た。

さてそれでは微力な私共に何が出来るのか、と言えば、やはり嘗て私共が合宿教室で生きる
指針を与えられた体験、そのようなものを今の若い青年学生層にも持たしてあげたい、という
ことにならざるを得ない。勿論、戦前と今日では祖国の置かれてある事態は違っているけれど
も、日本人としての信に目覚めることの必要は、時代を超えて妥当性を持ちます。とまれ若い
人達の魂の結び合いができるような場を何とかしてつくりたい、というので、大変苦しい道程
でしたが、このような合宿教室を開始したのが十一年前のことでした。爾来回を重ねること十
一回、その中に次第に志を同じうする人達も集り、年々の合宿教室を経験したOBとも言うべ
き諸君も輩出し、また、九州を中心とした諸大学に大学教官有志協議会もできてバックアッ
プの体制も整い、今日の盛大さ——いささか自画自讃めきますが——を保ち得るに至った所以で
す。

その間所謂「世代の相異」が、頑強に私共の行手に立ち塞がったものです。例えばこの合宿
では毎朝国旗掲揚をすることになっていきます。近頃ではさ程でもないようですが、一時は国

旗掲揚という右翼のやることだ、という通念があつたものです。諸君の中にも「どうも国旗掲揚など性に合わないな」という感じを持つ人があるかも知れない。たしかに、今の学園の雰囲気からすると、無理ではないという気もします。しかしそこには、唯感じがするというだけで片付けないで、大いに考えてもらいたい問題があります。一体この通念化されている右翼とは、どういう意味なのでしょう。歴史伝統や国家のことを言うと、右翼だとして毛嫌ひするのが流行思潮となつていますが、その流行思潮で言う右翼とは、果して明確な概念内容を持っているのでしょうか。右翼という言葉を正しく概念規定すると、国粹主義と権力主義が二本の柱をなしている、と私は思います。つまり自分の国だけが最も秀れているとして外国を蔑視するシヨビニズムと、少数者が権力を手中にすることによつて多数者を抑えて行くトータリズム、これが右翼の本領であつて、ナチスなどその典型と言えましょう。しかし断つて置きますが、私共はこの右翼の二本の柱をなす考え方は、完全に無縁です。私共は、外国人がそれぞれの自国を愛するように、我々は日本の国を愛し、彼等がそれぞれの国の文化伝統を誇るように、我々は祖国日本の文化伝統に忠実ならんと志すだけのものです。私共は、血気の同志がクーデターなどをやつて権力を握り、その上で全国に号令するといったような意図は、少しも持ち合わせていません。私共は聖徳太子の「和を以て貴しとなす」という御教えに忠実に、今の世に国民同胞感を湧出させることに心を砕いているだけなのです。国旗掲揚をするのも以上のように

な念慮に支えられているからに外なりません。にも拘わらず諸君が、流行思潮に流されて自国の国旗に嫌悪感を抱くのであれば、そのような感じを持つ自分が果して正常なのかどうか、一つ胸に手を当てて反省してもらいたいと思うのです。ともあれ明朝から体験されると思いますが、山峡の木々の緑にはえる日の丸の色、朝の爽やかな風にはためく旗を仰げば、そんないじけ曲った感じは一掃されてしまうことでしょう。

この合宿教室の目ざすものと言えば、第一にそのようないい加減な流行思潮の影響から脱却することです。戦後二十一年の時代は、日本の歴史全体からすれば極めて不正常的時代と言わべきであつて、この民族の自主独立性を喪失した時代に特有の歪められた思想が、巷を覆いつつあります。平和・進歩・社会（共産）主義・民主主義……あらゆる口舌の綾が次々に吐き出され、一種の戦後ムードを形造つていようです。こういうムードに浸つていると、そこに問題があるということにさえ気づかなくなつてしまふ。しかし国防を無視した平和が現実の有効であるのかどうか、歴史伝統の否定の上に果して進歩があり得るのかどうか、マルクス系の社会主義が現在の日本に適合するのかどうか、民主主義と合言葉のように言うが、それは天皇統治といかなるかかわり合いがあるのか……考えてみれば際限のない疑問が湧いて来そうです。戦後二十一年を経た今日にして、従来埋められて来たこの種の根本問題を誠実に厳密にとり上げ、再検討すべき時期が来たと私共は思っています。ですから諸講師の講義はもとより、討論

の時間には恐らくこの種の問題が厳しくつきつめられることになるでしょう。

第二に、この種の問題を取り扱う際に心すべきことは、単に概念的な論議のやりとりではなく、真に心の底から発した思いを口にし、またそのようなものとして友の言葉を受け取る、ということです。理論と情意を分離したことは、或る面では近代社会科学の発達を促したけれども、他面大いなる不幸を生みました。人は単に論理的分析を加えるだけで対象が把握できたと思い込み、自らの心情や意志を打ち出すことを、対象の客観化を阻害するものとして退ける傾向を生みました。その結果人生観と無関係な学問、研究者自身の主体性を没却した論理の辻褃を合わせるだけの学問が世にはびこってしまいました。情操の欠落、意志の退嬰化は今日の学徒の致命的欠陥であると言えるでしょう。この合宿教室では日本人としての情意の回復を目標の一つに掲げ、古典への接触や和歌の創作を通じて、参加者諸君に自己の情意の把握と修練にいそしんでもらいたいと思つています。

第三に、以上のような過程を経た上で大まかに言えることは、今日の日本は深刻な危機的様相を呈している、ということ です。経済的には成程安泰かも知れませんが、しかし我々の周辺を見廻してみても、思想的そして政治的に、今日の日本の国民生活が安固な基盤の上へのせられていると言い切れる人が、果してありませんか。この合宿教室の最終的なねらいは、この危機に瀕する日本の現状に衷心より覚醒し、この現状の打開に若い力を寄せ集めて一歩を踏み出

すことです。しかし危機危機と言つても、具体的な視点を提出しなければ解つてもらえないと思ひますので、以下に西洋史を研究している私の専門領域を踏まえつつ、幾つかの問題を提起してみたいと思ひます。

憂うべき日本の現状

戦後の日本は、幸か不幸か、外からの危機を直接に経験したことはありません。ために国防の問題でも、国民の精神的結集の問題でも、まあ大したことはなからうというわけで、一向に迫真性を持つて来ない。しかし世界の現勢を通視してみると、日本のような状況はまさに例外中の例外と言つてよいでしょう。先年タイム誌にこの二十一年間に発生した戦乱や内乱の統計が発表されましたが、それによれば、その期間中に総計二十七回という数字が挙つています。しかもその中には国共内戦や朝鮮戦争のような大規模で長期の戦乱もあるし、大体平均して年に二、三件の流血の騒ぎが起きている（その中約三分の二は、自由圏対共産圏の代理戦争や革命動乱）ということになる。これが国際社会の現実です。従つて日本が例外的な無風状態の中に安座していると言つても、風の吹き廻しによつては、何時動乱にまき込まれるかも知れない、と見るのが正直でしょう。特に近隣に超攻撃的姿勢をとりつつある毛沢東の中共が控えている以上、その脅威は単なる可能性以上のものがあると言えるでしょう。問題は、こうした潜

在的脅威を受けて立つべき日本国民の姿勢が、余りにも脆弱であるということ。

△大量の無関心層▽

危機の第一は、国家や全体社会の問題に対して無関心な人々が余りにも多いこと、それも所謂大衆層ではなく、知的リーダーたるべき学生インテリ層の中に、大量の無関心層が存在するということです。これらの人々は日常生活の惰性に流され、自己の利害には恐ろしく敏感ですが、この国家の運命に関する問題などには極めて鈍感・傍観的な人達です。我々の学園をみても、学生の恐らく八〇%はそうした人達のようなです。適当にスポーツをやり、適当に趣味を持ち、適当に哲学書や社会科学の書物を嚙り、そして適当に単位をとって……というタイプの学生が殆んどではないでしょうか。だがこれでは相済まない。祖国の将来を支えるのは外ならぬこの人達なのだから……。こういう人達が将来の日本の指導層の大部分を占めてしまつたら、日本の政治は利害の奪い合いの場と化し、文化は享楽本位の低級なものに墮してしまふのは必定です。この若人達の心の中に、情熱を傾け尽すべき目標を樹立すること、ここに総べての力を結集しなければなりません。

△左翼勢力の増大▽

今日何等かの目標に情熱を傾けているグループと言えば、さしよりマルキスト学生というこ

とになるでしょう。確かにマルクス主義には、青年がとらえられ易い魅力があります。第一にそれが、首尾一貫した理論体系を持つていること（その理論が全面的に正しいという訳ではない）、第二にそれが被搾取者の解放という人道的情熱に訴えるものを持つていること（但し、現実の共産国で果して被搾取大衆の解放が実現されたかどうかは疑問）、第三にそれは敵を明確にし一挙革命断行という割り切った戦術を持つていること（但しその階級斗争・階級革命がいかにか惨澹たる犠牲を産むかについては無智）等々は、確かに人生経験に乏しい青年学生層を惹きつける理由になっています。その理論なり戦術なりに重大な誤謬のあることは、また別の箇所で論じたいと思いますが、ともあれこの左翼勢力が現今の日本で次第に増大の勢を示しており、まかり間違うと日本を共産革命に捲き込むおそれのあることは、見逃してはならない点であると思います。

今日共産党の党員は二十万を超えたと言われ、宮本書記長は史上最大の勢力となったと豪語しています。それに共産党員のプールと称せられる民青同が約二十万、党員が重複していると見ても、ざっと三十数万の共産系の活動分子が日夜をわかつた革命工作に従事しているのが、厳然たる事実です。それに左の佐々木派の主導権下にある社会党、党員は五万程度で弱体ですが、その代りに表裏一体の総評四百三十万がある。更に北鮮系の朝鮮総連二十万や部落解放同盟十三万も、見落してはならない革命勢力です。その他ありとあらゆる種類の左翼団体、つま

り日中友好・日朝友好などの国際団体から映画・演劇・音楽・科学、甚しきは日患同盟という病院患者の組織まで、夥しい組織が十重二十重にめぐらされています。その戦術は、嘗ての人民戦線の再版である統一戦線戦術であると言われ、それは精鋭な革命の中核を中心としてその周辺に幅広くシンパの組織を結集しようとするものですから、ペトナム反戦・原潜反対から年々の賃金斗争、それにあらゆる種類の法廷斗争や税金斗争に至るまでの一切を、一つのスクラムの中に組み入れて行くことになる。こう見てくると、今日の日本の目ぼしい社会的な動きは、すべてこの統一戦線戦術に沿ってくり拡げられている——その最終目標は昭和四十五年の安保再改定の時期におかれている——、としても過言ではないでしょう。まことに端倪すべからざるものがあると言えましょう。

マルクス主義の衰兆

日本ではこのように未だ左翼勢力が余力を保っていますが、現代世界史の観点からすれば、マルクス主義は明らかに衰勢を辿りつつある、と私は考えます。この点については、異論もあることでしようから、少しく緻密に論じてみることにします。

△ 共産党宣言の予言とその後の世界史の現実▽

一体、マルクス主義の骨子は、かの共産党宣言（一八四八年）に示されているように、すべ

ての社会の歴史は階級斗争により革命的に発展して行く。資本主義社会もその例外ではなく、その成熟と共に内部的矛盾が激化し、歴史的必然性をもって社会主義革命が到来する、という主張です。宣言はこの歴史的経過を簡潔に述べた後、「大工業の発展とともに、ブルジョア階級の足もとから、かれらがその上で生産し、また生産物を取得する土台そのものが取り去られる。かれらは何よりも、かれの自身の墓掘人を生産する。かれらの没落とプロレタリア階級の勝利とは、ともに不可避である」という有名な文句で第一章をしめくくっています。まことに壮大な予言と言えましょう。

ここで、一つ確認しておかねばならないことは、今のテーゼを逆に言うと、大工業の、従つて資本主義の成熟していない国では、社会主義革命が起る筈はないということになることです。これは経済学批判序文の「唯物史観の公式」と俗称される文章の中でも、マルクス自身が確認していることです。それ故宣言の第四章を詳しく見ると解るように、イギリスやアメリカの労働者に対しては「労働者階級が直面する目的や利益を達成するために闘う」ことをすすめたのに対し、フランスやスイスの労働者には「運動の未来を代表する」ものとして、急進ブルジョア派と結びつくことをすすめ、ポーランドの労働者に至っては先ず農業革命（これによつて資本主義は一段と推進される）を行うことを示唆している訳なのです。マルクスの言う歴史的必然性とは既定の社会発展の階序を正確に踏むところに生ずる概念で、この階序をとばし

たり、旧社会が未成熟のうちに革命をやろうとするが如きは、ブランキ流の空想的一撥主義者として退けられねばならないのです。要するに、マルクスの歴史的必然性に則つて社会主義革命が起るべきは、何を措いても資本主義の充分発達成熟した国、つまり、今日の言葉で言えば先進国に外ならぬ訳です（レーニンが帝国主義論で、国際的資本主義の弱い一環に革命が起るとしたのは、レーニン独特の政治主義的変改であつて、歴史的必然性の正当な解釈とはなし得ない）。

ところでこの共産党宣言が発せられてから今日まで、略々百二十年の歳月が経つています。もしマルクスの予言が真理であるならば、この百二十年の歴史は次の二つの帰結に至る以外にはあり得ぬ筈です。すなわち、先進国のいづれか一国に、既に社会↓共産主義革命が実現された、というのが第一。もしくは、現在までは実現されていなくても、近い将来に実現される可能性がある、というのが第二。この二つの帰結のうちのいづれかでなければ、マルクスの予言は達成されていないということになります。達成されない予言などはナンセンスで、いくら壮大な理論体系を構成しても、実証されなくては科学的に無価値です。マルクス主義は自らを科学的社会主義と誇称していますが、この点は果してどうでしょうか。

先ず、第一の帰結についてですが、残念乍らマルクスの予言を実証した例は一つもありません。今日世界の先進国というと、木内先生によれば自由圏には十七あることになっています。そ

れに現段階ではソ連を加えることができるけれども、革命発生の時期については問題があるので、後で触れます。その十七の国ですがヨーロッパに十二、つまりイギリス・フランス・ドイツ・イタリア・オランダ・ベルギー・ルクセンブルグ・北欧三国にオーストリアとスイスです。それにアメリカ・カナダ・オーストラリアとニュージーランドそして日本が加わりますが、そのいづれにも社会主義革命が起きなかつたことは誰しも知る事実です。ただ起きかけたことはあつたのです。例えば一九一八、一九一九年のドイツですが、第一次大戦に敗北した余波をくつて、例のスパルタクス団などが革命寸前まで追いつめたことはありました。しかし、結局ドイツ国民は社会主義革命を嫌悪し、ワイマール民主共和国への途を選んだことは、諸君も知る史実でしょう。イタリアでも一九二〇年左翼のゼネストが起きて崩壊に瀕したことがありますが、あのムッソリーニが鉄腕でもつて左翼を退けてしまつたし、一九三二、三三年のドイツのヒットラーの場合も同様です。このように言うとき、それは酷い弾圧があつたから革命が起きなかつた、と弁明しようとする左翼学生がありますが、これはいささかおかしな理屈です。いやしくも歴史的必然性に基づいたものであるならば、弾圧が来ようと何が来ようと、革命が到来するといふのではなくてはなりません。

次に第二の帰結、すなわち先に挙げた先進国のうちで、未だ社会主義革命は実現していないけれども、革命の条件は熟していて近い将来に革命が起ころうな可能性のある国があるかど

うかの検討です。革命の条件と言つた場合に考えられるのは、一方において資本主義の矛盾が累積し、大衆は窮乏のどん底におかれ、他方階級意識に目ざめたプロレタリアは政党を組織してさかんに活動している、というような状況です。一つのメルクマールとして共産党の勢力を各国について当つてみましょう。少くとも革命直前と言うのであれば、革命の前衛である共産党がかなりのウエイトを持つているのが常識ですから。

先ずアメリカでは約五千、しかも黨員は高年令層で青年には殆んど魅力がないといわれています。イギリスが二万、これも議席一つ持てないのが現状です。西ドイツは非合法化される前に八万の黨員がいたと言われますが、現在は雲散霧消の状態です。オーストリアは五万程度ですが、この与党の社会党はドイツのSPD同様マルクス主義から完全に脱却しており、共産党は齒が立ちそうにもありません。オランダ・ベルギーが二万前後、北欧三国が一万五千前後、カナダが四千五百、オーストリアが千五百、ニュージーランドの四百、スイスの二百に至つては、まるで可笑い草です。勿論このような公式数字以外に若干の秘密黨員もいるのでしようけれど、以上のような勢力ではとても革命直前にあるなどとは言えそうにもありません。

ただフランスになると少しく状況が違って来ます。フランスでは共産党は一時黨員八十万を擁し、第一党を誇つたことがあります。対独レジスタンスにおける名声が戦後共産党の急激な膨脹に結びついた、と言われます。しかし今では三十万程度に減少しており、特にドゴール

の治世下ではだんだん生彩を失いつつあるのが現状です。イタリアでも一頃百五十万の黨員を数えたようですが、今では半分位に減つたと言われます。元來イタリア共産党は構造改革理論が主流をなしているので、とてもソビエト流の革命をやる意志はないと見られています。近頃はまた中共派が分裂したらしく、弱体化を免れていないようです。このようにフランス・イタリアの兩國についてみても、末広がりならまだしも先細りが実情なので、マルクスを予言したように、プロレタリアが工場——地域——全国へと組織の網を拡げて、革命を断行するといった隆々たる気運は望むべくもないようです。こうして第二の掃蕩についても、マルクスの予言は適中せずとして、略々間違いはなさそうです。

Λソ連・中共・東欧の革命とその後の変容Ⅴ

このように言うと、「それではソ連はどうなのだ。あそこでは立派に社会主義革命ができたではないか」という反論がよく出されます。確かにソ連はレーニンの指導の下に社会主義革命を断行し、曲りなりにも今日までその成果を持ち伝えていきます。けれどもあのロシア十月革命は、マルクスの所謂歴史的必然性に則って行なわれた革命とは、到底言い難いものです。一九一七年当時のロシアは漸く資本主義が緒についたばかりで、とても成熟だなどと言える段ではなかつたのです（詳しいデータは『国民同胞』三三三号の拙稿「マルクス主義の革命理論とロ

シア革命の現実」を参照されたい)。ロシア革命を指導したレーニンのとつた手法はマルクスの革命必然論（むしろメンシェビキがこれに忠実）ではなくて、スラヴ革命思想の伝統に根ざすトカチェフ流の行き方（革命的少数者による政権奪取を主張）で、二月革命以降のロシアの混乱状態、特にケレンスキー政権と軍部の軋轢を巧に利用した戦術の勝利、と言うべきものでしよう。とすれば、資本主義未熟のロシアに社会主義革命が起つたという事実は、マルクスの革命必然論の実証になるどころか、むしろ反対証明の役割を果すもの、とさえ言い得るのです。

東欧衛星国の革命が、赤軍の強い圧力の下で行われたことは、諸君も御存知でしょう。比較的資本主義の発達していたチェコ等では、国民の多くが共産化を望んでいなかったにも拘わらず、時のゴットワルド政権が動員した組織力の暴威のために、無惨に押しつぶされてしまったのが実情です。一度ソ連の圧力が弛むと、かのハンガリア暴動のようなものが勃発するのはこの間の消息を示していると思われます。中共についても、論ずれば長くなりますが、これとてもマルクスの必然論のコースと相隔ることは疑を容れません。キューバにしても北ベトナムにしても、反欧米的民族独立運動が変形して共産化したものです。また後進国は共産化するのが常道というような謳い文句は、共産化しない後進国が圧倒的多数であるという事実（アラブ連合などは共産党を非合法化しているし、モスクワ仕込みの指導者エンクルマが失脚した後のガーナでは、逆転劇が演ぜられている）からして、全くの空語にしか過ぎません。

それどころか、最近のソ連や東欧では大きな変貌がおこりつつあることを、諸君も聞いておられるでしょう。自由化の風は経済の領域にも及び、利潤導入や利益金の一部の自由消費・中央計画局の権限縮少と地方分権化促進・企業自主性の尊重等々、も早試験的実施の域をこえて全面的実行の段階にあると言われます。それどころがソ連共産党の新綱領では、帝国主義戦争不可避論の否定からプロレタリア独裁の揚棄・全人民国家の提唱に至るまで、一連の原理的改変が行われています。東欧、特にルーマニアやチェコ等が西向き姿勢を顕著にしつつあることは、当今は常識になりました。中共だけが頑強に教条主義を固執しつつありますが、それも先頃の文化大革命（「あんなものは文化ではなくて蒙昧だ」とプラウダは非難）によって、あの団結を誇つて来た中共の組織も案外なものだな、ということを外内に暴露してしまいました。この分では冗談ではなく、資本主義崩壊必然論の向うをはって、社会主義崩壊必然論という理論が、生れて来るかも知れぬ現況です。

△マルクスの予言不適中の原因▽

マルクスが鋭利な頭脳の持主で、就中すぐれた総合の才能を持っていたこと、これは認めてもよろしい。しかし、いかなる偉大な思想家と雖も所詮は時代の子であつて、彼の思想は彼の生きた時代の状況に大きく規定されることも、否定すべからざる事実です。産業革命発足当初

の労使の露骨な対立の時代、そして、革命の気運が常に漂っているような時代に生きたマルクスが階級斗争↓階級革命を全歴史を貫く唯一の道程として独断化したのも、彼自身としては当然のことであつたのかも知れません。このマルクスの独断については、例えばダーレンドルフの『産業社会における階級および階級斗争』などを参照してほしいのですが、その一つに次のようなことを言っています。すなわちマルクスはヘーゲルの弁証法を無条件に信奉し、その对立物の抗争↓揚棄の論理形式を社会に適用して、階級間の矛盾は両階級がぎりぎりまで斗争をやり、ついに爆発するという革命の方式でしか解決の途はないと断定してしまつたところに、大いなる独断の一つがあると言うのです。成程、共産党宣言の全構想がこの独断に立脚していることは疑をいれません。そしてマルクスの生きた時代の状況からすれば、そうとしか判断できなかつたのかも知れません。（勿論、オーウェン等のように異つた解決法を主張した人もいます。）しかし我々の生きている時代、つまり百二十年を経た今日、その独断をそのまま踏襲する理由は何もない筈です。何故ならこの百二十年間に時代は大きく変つてきているのですから。

結局マルクスの予言が適中しない根本原因は、マルクスが体験し得なかつた世界、つまりマルクスの死後の世界が、マルクスの予想したものとは大幅に違つたものになつてしまつたという事実に発するものと思われれます。我々は、マルクスより頭脳が貧弱であるかも知れませんが、少なくともマルクスの知らなかつた世界を知つてゐることだけは自負してもいい。この点か

らはマルクスの理論を大いに批判し、場合によってはこれを否定し得る資格があると思うのです。

それではマルクス死後の世界がいかに変り、従つてマルクスの予言といかに適合しなくなつたかについて、ここでは重要と思う三つの点を挙げておきましょう。

(一) 今日の資本主義はマルクスが分析の対象とした古典的資本主義とは異つて、大幅に修正されつつあるという事実です。すなわち資本と経営の分離によつて、所有はも早経済の決定的要因ではなくなり、労働者についても高度の熟練が要求される結果、マルクスの言つた極貧化とは反対に全体的生活レベルは向上し、中産階層化されつつあるのが現状です。このような社会の構造変化に対応して、も早自由放任の原則は適用し得なくなり、国家権力が大幅に経済の領域に介入する傾向が強まっています。労働組合は法的に承認され、少なくとも形式上は対等の立場で利潤分配に参加できるようになり、財政金融公共投資政策による景気変動の抑制、雇傭政策による失業の防止、福祉政策による貧困者の救済、労働政策による労働者保護等々、およそ百年前の資本主義とは面目を一変しているのが実状です。

(二) これに伴つて、先進国の労働者政党の殆んどは、過激な革命主義に貫ぬかれたマルクス理論を脱却し、穏健な社会改革をモットーとする民主社会主義の路線へと赴きつつあります。ドイツの労働運動を見てみても、マルクス流の革命への執念がうけ容れられたのは、運動初期

の陰謀団体的段階においてであり、公然たる大政党に成長してからはベルンシュタイン流の修正主義が主流となつてしまつています。まして今日のSPDのように、民族的課題をかかえた状況においては、階級革命などに訴えて国民を二大陣営に分裂させるなど、思いもよらないといつたところでは、この点はオーストリアの社会党についても言えることであるし、イギリス労働党などは最も早く改革的社会主義の旗幟を標榜したものと言えましょう。

(三) マルクス主義理論の持つ偏曲性、例えば国際主義の立場に立つて国民的立場を無視または蔑視すること、あるいは唯物的立場から精神性を軽視すること、発展段階説的進歩の立場から歴史伝統を否認すること等々が、国民生活の現実的要請の前に次々に敗れ去つてしまつたことです。詳しくは両度の大戦における社会主義者の動向（殆んどが祖国防衛の立場に立ち返つた）等に例をとつて説明しなければなりません、今日その余裕もないので、大体を察して下さい。

ともあれ以上に述べた概略の事由により、マルクスの予言はその後の歴史の到る処で反証され、少くとも現代史の示すところではその衰退の兆が現われ始めたことは確かです。

新しい胎動

今日の先進諸国の動きは、も早ことごとしいイデオロギーの対立を卒業しています。資本主

義と社会主義という二つの対立したイデオロギーの枠内でしかものを考えない、という窮屈な姿勢から脱却して、その国の持つ人間の力と物質の力をいかにうまく結合するか、そして、人材を発掘し社会を開発するのにどうしたらよいかということ、極めて機能的に考える風潮が普遍化しつつあります（アーサー・シュレジンガー二世「中心」等参照）。「イデオロギーの終焉」と言われるのがその傾向です。

わが日本は久しく敗戦の影響によつて思想的混迷の状態が続き、特に左翼的風潮の影響が著しかったのですが、ここ三、四年来、たしかに新しい動きが胎動しつつあると感ぜられます。林房雄氏が「緑の日本列島」という本の中で、大体一ジェネレーション、三十年位の単位で世の中の動向は変わって行く。外来思想の流入で自らを見失うような時代があつても、三十年も経てば民族の原性格とも言ふべきものへの覚醒が始つて来る。日本でも今や混迷のジェネレーションの末期にさしかかりつつあるが、そろそろ次のジェネレーションを導く「民族への回帰」の動きが始まりつつある、と指摘されていますが、たしかにそのように思われます。例えば日本の近代化論争というのがここ数年ジャーナリズムを賑わしています、それには今度講師としてお見えになる福田恆存先生も加わつておられますし、国防論についても次第に地についた論議が行なわれるようになって来ました。私の属する西洋史学の方面でも、一頃のような左翼的公式主義はだんだん影をひそめつつあります。

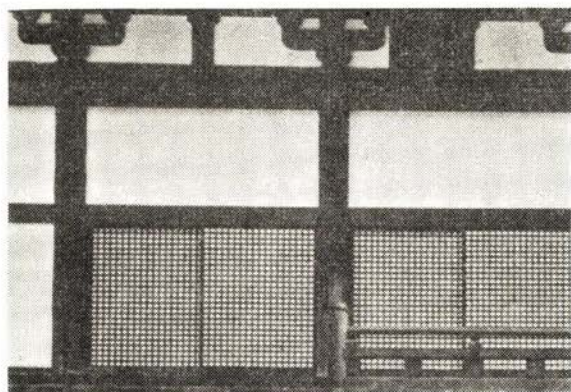
その中心問題は「日本とは何か？」という点に集約されるでしょう。今迄のように、日本を殆んどアプリアオリに悪く言つた風潮、日本の文化伝統を体験もせずして頭から蔑んで来たような時代風潮は、も早過去のものとなつてしまつてあります。次の世代には、必ずや「日本民族の再認識」が、日程に上されることは確かです。その日に備える意味においても、この合宿教室で、あらゆる先入見をとり去つて「日本とは何か？」の問題を真剣に究明してもらいたいと思ひます。

（鹿児島大学助教授・国民文化研究会副理事長）

われわれ人間は自分ひとりで

生きていくのではない

小田村寅二郎



「つきあい」の意味

歴史とのつきあい

母親をみつめる幼児の日

天皇への「つきあい方」

「事実」に取り組む勇氣

「つきあい」の意味

「われわれ人間は自分ひとりで生きているのではない」この言葉は、幼い子供たちでもすぐ判りそうな言葉です。しかし、よく心をとめて自分と他人との「人づきあい」に眼を注いでみますと、私たちはこのことについて意外にも無感覚でいることが多いようです。

人々は、一様に自分はこれまで自分なりに、立派な「人づきあい」をしてきたつもりでいます。言いかえれば、人々は自分なりの「人づきあい」に自信を持っていて、そこに重大な問題があるとは思ってもみないものです。だがはたしてそうでしょうか。いうまでもなく「つきあい」を漢字で書けば「付き合い」となります。「付く」とは、「相手と自分がくつつくほどに相手に近づく」ことであり、「合う」とは、「相手とびつたり一体になる」意味でしょう。従って私たちは日常ごく軽い気持で、「おつきあいをする」などと言い馴れています。よくその文字を考えてみれば、それは決して字義通りの「つきあい」にはなっていないことが多いのです。

たとえば、この合宿で、皆さんはいくつかの班にわかれて生活し、そこでいろいろな討議討論の機会に出合います。そうした際に、人数も少ないことです。ひとりひとりが、どういう考え方を持っているかをお互いに知り合うのは、それほど困難なことではありません。Aは

こういう考え方の人、Bはこういう考え方の人という風にわかってきます。すると諸君は、Aの人と自分とはこの面で合う、Bの人はどうもつき合いにくい、と決めてしまう。そうして無理のなさそうな限度での「つきあい」をはじめたのです。すなわち相手の人の心がどのような振幅をもって動いているか、ということや、その人の喜怒哀楽などは、別に自分には関係のないことだと決めてしまつて、そうした相手の心の動きについては、あまり自分の方の心は使わないままに「つきあい」が開始されるのです。だから時たま、相手がたどたどしい言葉で、その心の中の苦しい思いを吐露していても、その人の心の動きに自分の心を合わせて動かしてみるということをしなさい。むしろ逆に、そんなことにはおかまいなしに自分が持ち合わせている知識だけを並べたてて、班の中での人々の関心を、自分に集中させようとする人が多いのです。もしそんな人がいるとすれば、その人は自分では「人づきあい」が十分できているつもりでいても、客観的にみると、相手の人とまともな意志の疎通ができていないばかりでなく、その「意志の疎通」のもとである「心の交流」がすでにできていないといえるのです。

「相手の心がどういう動きをしているか」ということを知るためには、こちらがいくら「頭」を働かせてもだめで、こちらも、自分の「心」を働かせなければいけません。相手の心の「さゆらぎ」にいたるまで、こちらの心を働かせて、「相手の心の動きにどこまでもつ（付）いていく」ことが要求されるのです。すなわち「心を労さないつきあい」などは「人づきあい」の中

にはいらぬ、というのが、私がかつ第一に強調したい所なのです。

このことは、学問についても同じです。いうまでもなく学問では、読書を絶対条件とします。が、書物は、誰れの著書であろうとも——古人であろうが、外国人であろうが——とにかく、「人」が書いたものです。従つて、読書においては書いた「人」その人との「心のふれあい」「人づきあい」が絶対的に要求されるのです。日本では古くから「読書尚友」という言葉を人生の指針として大切にしてきました。ところが書を読み、友を尚（たつと）ぶというこの二つは、ともに一つの原理「つきあい」を基底にしております。書を読むのは、文字を通じてその著者その人に「つきあう」ことであり、友を尚ぶのは、言葉を通じて相手の人と「つきあう」ことです。その「つきあひ方」がともに、正しくなされるすがたを「読書尚友」という言葉であらわしてきたのです。実にいい言葉だと思います。

さて、このように、諸君の眼と心が開かれてきますと、いまままで、自分が「つきあい」だと思ひこんでいたものが、果してまことのつきあいと言へるかどうか疑問に感ぜられ、自分と他人との関係をいまままでとは違つた別の視点からとらえようとする意志が生まれてくるはずで

す。こうした「つきあい」にわれとわが心を集中していくと、いまままでばらばらであつたものに一本の筋が通つてきて、自分と相手とが急速に接近してくるのです。すなわち従来親密だと思

つていたのが、実は空々しいつきあいに過ぎなかつたと判つてきた時に、改めて新しい自、と他、とが、自分の意識の中に装いを新たにしてくつきりと登場してきます。そうなると、自分と他人との間になにかしら「しみじみと通う」ものが生まれ、さらに、それを「しみじみと感じ」とる『喜び』も生まれてくるのです。友とか友情とかいうのはこのような「つきあい」に名づけられたものをいうのです。

(ここで一寸附言しておきますと、こうした友情のうちで、男女間の友情の極致を人は「恋」と名づけてきたと思われます。この「恋」とか「恋愛」とかいう言葉も、実は、お互いの全霊、いわばお互いのいのちのこもつた「つきあい」に名づけられた言葉なのです。しかし今日の世の中では、この「恋愛」という言葉が、実にいい加減な男女の交際の代名詞に濫用されている。このことは、現代の思想にとつて、重大な問題だと思ひます。)

しかしそうかといつて、自と他のあいだに、ひとたびこのような「まことのつきあい」が交わされたからといつて、その自と他の関係は、それでめでたしめでたしということにはならないのです。このことが第二に大切な問題点になります。というのは、その二人の間柄も、いつてみれば自己の利を追い勝ちな人間同志の間柄ですから、生命的な信頼感をいつまでも持ち続け得るかどうかは、一にかかつて両者の心得次第によることになります。すなわちお互いの心に隙間ができると、お互いの心はつい離ればなれになりがちなのが、人間の一つの習性ですか

ら、その習性が芽生える危機の訪れについて、お互いに心を留めなければならぬのです。そこで又あらためて人々は、「つきあい」の本義に気づき、「心を労しなす」のです。このように同じことが何回となく繰り返されて続いていく。私は、これがいつわらぬ人生の姿だと思ふのです。流転してとどまることのないのが人生だといひ、また、人生とは、生々息（や）むことなく発展するものといわれてきた意味も、このような体験を通してわかつてくるのです。固定的な道徳よりも、一瞬一瞬の生に、人生の悲哀と歓喜を味わう力を常時蓄えて持つてゐることの方が、どれほど人生の道しるべになるかわかりません。道徳は大切なことですが、それを概念化して振りまわせばつまらないことになるのです。「つきあい」についても最初に申しあげたような理想的なあり方を固定化して、それを一つの道徳としてかかげるのではなく、流転していく人生の姿の中に本当の「つきあい」を求めていかなければならないと思ひます。

歴史とのつきあい

私はいま、人と人との「つきあい」について私の考えていることをお話ししながら、「読書」ということに触れ、同時に、それを介して古人との「つきあい」にもちよつと言及しました。諸君はこの合宿で、一昨日は福田恆存先生のお話を、またきのうは、木内信胤先生のお話を聴かれましたが、お二人とも、いま私が申しました「つきあい」という言葉と同じような感覚の

言葉をお使いになっています。

福田先生は、「歴史とつきあえ」とくりかえし言われました。では一体どのようなようにして歴史とつきあつたらいいのか。私は次のように思います。「歴史とつきあい」ができるようになるためには、日常の生活の中で、まずその人の「つきあい」の姿勢が正しくなるよう不断に努力が払われていることが大切である。そうしてこそ「つきあい」の仕方がその人の身についくるので、その身についたものを抛り所にしてはじめて歴史ともつきあえるようになる、と。すなわち、「つきあい」は、すべての人が社会生活で経験している具体的事実なので、その「つきあい」と、その人の「歴史とつきあい」とが別の「仕方」でなされるわけのものではないでしょう。従つて、社会日常の「つきあい」を「本当のつきあい」に高める努力をしていてこそ、そして、その努力の体験に立つてはじめて、福田先生の言われるような「歴史とつきあい」が可能になるのではないのでしょうか。

福田先生がいわれた「歴史とつきあい」ということも、「歴史に対する知識をもつとふやさなければならぬ」というようなことではないはずで、大切なことは知識ではなくて「つきあう姿勢」であるというのを指摘されたのだと思います。従つてその姿勢を深め、それにふさわしく自己の心を整えることが第一に要求されてきます。「歴史とつきあい」の道しるべは、実は自己の外にあるのではなくて、自分が他人とのあいだで「まことのつきあい」を求め

ときの数々の体験を基にして、「歴史とのつきあい」の道、その仕方を知ることにあるので
す。

例えば、皆さんが学校で先生の講義を聴かれる。その時の先生と学生とのつきあいを例にと
つて見ましよう。或る先生は十年一日のように古いノートを読まれ、或る先生は学生の気持を
全く無視して自分の夢をとうとうと論じられる、こういうケースでは、その先生は、学生につ
きあっているとはいえない、ということになる。なぜならば、その先生は、学生の心の動きを
みつめながら教える、ということをやっているからです。また逆に、学生についていえば、先
生の講義しておられることが、理解できようができませんが、一向にかまわずにノートにペンを
走らせて、先生の人生観がどういふものかという大切なことに心を向けずに、単に講義の内容
を知識として吸収しているだけであれば、これも先生という「人そのもの」に「つきあってい
る」ことにはならないでしょう。先生と学生のあいだに、まことの「つきあい」がないよう
なことでは、そこは「教育の場」ということはできないし、そのようなことで高校・大学と進ん
でみても、「歴史とつきあう」つきあい方は、一向に身について来るわけもありません。だか
ら本当に立派な先生を持ちたいと思えば、まず先生の心をつめる姿勢が必要である。こちら
から求めていかなければいけない。私は学生がそのつもりになれば必ず立派な先生にめぐり
会えると思う。そしてもし現実にめぐり会えなければ、その時こそ古の人の中に先生を求めて

いくべきです。その求める姿勢の如何によつて、師にめぐりあうこともできるし、古人の弟子になることも可能となる。そのような「つきあい」のつみ重ねが、現世において師を見出し、友をつくり、また「歴史につきあう」心の姿勢をも、整えてくれることになるのです。

母親をみつめる幼児の目

ここで一つ、赤ん坊が母親のおなかから生まれて、母親と、どういふふうにつきあつていくか、人間の一番はじめの「つきあい方」を考えてみようと思います。皆さん自身の幼ない日の思い出を通してでも結構ですから。

私自身の経験を申上げてみますと、私の幼い時代では、母親はよくその背中に幼児を背負つて家事に立ち働いたものでした。いまの都会では、そういう母親をあまり見かけなくなりましたが、母の背というものは、幼児の思い出に残るものようです。私なども、幼ない時は病氣勝ちであつたせいか、物心のつくころまで母親に背負われていたとみえて、その「ぬくみ」の気持よさを、少年時代になつても、よく思い出したものでした。これが、私の、母に対する印象深い「つきあい」の基本となつていたのかもしれない。

母親と子供との関係は、このように非常に根深く、細やかに、子供の心に残つていくものです。そこで、あるお母さんが乳児に乳を飲ませている情景を想像してみても下さい。赤ちゃんは

目もよくあけないで、夢中になって乳房を吸っています。しかし時々ちよつと飲むのを休みます。そのようなとき、赤ちゃんは何気なくじつと母親の目をみつめていることがあります。その時の、母親の目に見入るその赤ちゃんの目は、実にすばらしい。たじろぎもなく、ゆるぎもなく全身の生命を一心に集中して母親の顔をまじまじと見つめます。人間がよくもあんなに一心になれるものか、と思えるほどです。そんな刹那の、その赤ちゃんのひたむきな心情は、おそらくその赤ちゃんが生育していったその後の人生では、二度とありえないほどの一途なものです。

それは、乳を与えてくれる母親に対する本能的な感謝の心かもしれませぬ。またその子供自身が生まれながら持つている母への思慕の情によるものかもわかりませぬ。しかし、そのほかに、もう一つ大切な誘因があるような気がします。それは、母親の方に、慈愛が先在している、ということ です。母親は、わが子に乳をふくませながら、じつとわが子をみつめている。わが身を割いてこの世に送り出した美しい生きた生命に、どんな深い愛情をそそいでも、注ぎきれぬものではないからでしょうか。そうした「母の眼」「母の眼の輝きの中に光る、いちぢなもの」に、その赤ちゃんが感応を示す。それが、あの赤ちゃんの眼となつて、母の顔にむかつて注がれることになつていくのではないかと思われます。

いってみれば、母が子に対する「つきあい」の純正さが、赤子が母に対する「純真な眼」を

養うことになり、またそれと同時に、もっと重要なことは、「純真な眼を注ぐということ」いかえれば「まごころで生きていくということ」について、その赤子に自然のうちに自信をつけさせていることになる。人間的にみてそういう重要な「つきあい」方が、そこに展開されている、ということです。とにかく、あのじつと見つめる赤ちゃんの目というものは、実にすごいほど純真な強さを示します。私たちでも、たまには見知らない赤ちゃんからじつと見つめられて、すくむような気になることがあるでしょう。私にはあのだけなくて、純真そのものの、神のまなこを感じさせるような赤ちゃんのあの目は、母の目との「つきあい」が生んだものだと思えてならないのです。

次に、赤ちゃんが少しずつ成長していつて、やがて片ことを語り出します。赤ちゃんが言葉を喋り出す頃の様子をよく観察してごらん下さい。赤ちゃんはお母さんの口をじつと見ていますね。赤ちゃんは、お母さんの口をじつと見つめ、お母さんの口の動きを真似て口を動かすのです。そうすると、それが言葉になってくるのです。すなわちその赤ちゃんは、日本語を話す母親の口の振動を自分のものにするから、その赤ちゃんは日本語を話し出すことになります。母と子との「つきあい」の最も初歩的な、そして最も重要な一面を、私たちはそこに発見するのです。人間のつきあいの最も美しい原型がそこに見られるような気がします。

それと同時に、ここでも注目したいことは、教わる、習う、学ぶ、というその赤ちゃんの姿

勢の中に、相手である母に対して、信じ切った姿を見ることです。相手を信用しきっているからこそ、「真似ればいい」ということになるのではないでしょう。こうした人間的素養の中に成長するのが子供ですから、子供は正直そのものに育つわけです。疑うことなしに生きていてこそ、子供の成長の速度は早まるでしょう。この「疑うことなしに生きる」という対人姿勢を、人間は、いつまでたつても忘れてはならないと思います。やがて「疑う心」を持つようになつて、疑いの中に人間の成長が確認される時期になつても、「もとの心」は失せてはいけないと思います。そこに、われわれ青年・大人たちの大きな人生課題があるのではないでしょう。

ここでちよつと話がそれますが、私たちが当り前のことだと思つてゐること、重要なことがあります。それは、日本の子供は日本語を喋り出すということ、日本の子供は英語を喋り出さない。人間は、この世に生まれてしばらくすると、いかにも自然に言葉を話すようになる、という風に見えますが、実は、「人間が言葉を話す」ということは、決して動物的本能によるものではない。人間はほつておいてひとりで言葉を喋り出すのではなく、生まれ出たその民族の言葉を学びとつて（真似て）、それを継承してゐるのです。「言葉とは、文化である」ということも、そのことです。もし言葉というものが、文化でなくて本能だというなら、世界の子どもは同じ言葉を喋り出すはず。なぜ違う言葉を話し出すのか、それは幼児たちが、

「母の口の動きを真似る」から、母と同じ言葉を話し出すのです。動かし方によって日本語ともなり、英語ともなるのです。われわれ人間はその国語を生んだ民族の文化を、母の口の動きを通じて学びとつて、それではじめて人間の仲間入りをしているのです。現代は親と子が対等な人間だという俗説が横行していますが、それがいかに誤まっているかはこの一つを考えてもよくわかるはずです。

さきに私は、言葉は文化だと申しました。では、言葉の体をなさない、音だけの人間の声は何か。これは文化ではありません。声音は、人間が本来生まれながらに持っている動物的本能に近いものでしょう。(勿論声を洗練していくという特殊のケースがありますが、これは別です。)現在ではあの言葉にならない、声そのものがなまの形で爆発してくるようなものが若い人達の心をとらえています。では声音だけのこのようなような音楽は、果たして文化的価値あるものと受けとつてよいかどうか問題になってくる。

声と言葉とは違う。その証拠に言葉の大切なこと——それが「人づきあい」の橋渡しになる唯一の具体的手段なのです——が忘れられ、言葉についての関心が薄らいできますと、言葉で言うべきところを、声を出しただけで済ませてしまうことがあります。たとえば人から呼ばれたとき、「はい」と答えれば、これは言葉です。「うん」と答えれば、これは声に近いものとなります。諸君が諸君の家で、お母さんから呼ばれたとき、もし諸君が「うん」と答えるなら

ば、その時は、お母さんの気持を正しくうけとめて、しつかり判断するという心の姿勢が欠けている時です。或は「うるさいな」というような反抗めいた気持の時も「うん」と声で答えるのです。正しい言葉づかいが、人間のつきあいのありかたにかかわってくるということが、こんなところにもうかがえるのです。言葉の乱れが、文化の後退を意味することもこのようなことから理解していただけたらと思います。

天皇への「つきあい方」

以上のような「つきあい」のあり方をふまえて、次に天皇に対する「つきあい方」についてふれてみたいと思います。私たちの社会では、一般にその構成員は、みな平等の立場を持ってその社会に参画していると解釈するのが常のようです。従って日本人が構成している社会、すなわち日本という社会を考える場合でも、すべての日本人は一樣に平等の資格で、日本という社会の一員をなしていると考えがちです。ところが、日本には「天皇」と名づけられる独特の方がおいでになる。この一般国民と異なつた一人の人格、天皇という方をどう考えればいいのか。諸君が学んできた中学、高校の「社会科」では、「われわれはすべてが平等の立場において社会の一員である」ということを、いつも念頭に入れて物を考えるように馴らされてきますから、諸君にとっては、「天皇」はどうしてもにが手の問題になりがちなのです。

そこで、まず第一に「諸君が天皇についてどう考えようと、それは諸君の自由であるが、少なくとも、次のことだけは無視してはいけぬ」という点、まずそこからお話ししてみます。その点とは何か。

私たちは一つの社会の構成員はお互いに平等でありたいと願う。たしかにその願いは正しいが、その場合、ともすれば、外的な（形式的な、といってもいいが）平等が達成されないと平等ということにならない、と考へがちです。しかし実際の人間生活は、どうしてもこの外的平等を持続することは不可能です。たとえある一瞬に暴力革命、平和革命などによって、それを達成してみたところで、次の瞬間からは、力の差、知能の差などで、すぐにその外的な平等は崩れ去ってしまう。そこで知恵の深い先人たちは、外的形式的な差異については、それをできるだけ平等にもつていくように努力はするが、窮極の価値は、決して外的な平等だけに置くようなことはしないで、そこに内的な（精神的なといつてもいい）平等の世界を樹立しようと努力したのです。すなわち、貧富の差、権力の差にとらわれずに、相手の心を敬しあうという点において、平等の立場に立つて「つきあう」ように努力したのです。とくに、権力の座にあるもの、地位の最上位にある者が、この努力を惜しみなくつづける時には、その社会は実に立派なものになつていく、これが知恵深い人々（世界共通、古今を通じて）の一致した考え方であった。

ところが、これまでの人類の歩みの中で、君主などが行なってきた政治は、必らずしもこのような内的平等の世界を常に具現し続けるというわけにはいかず、自らの権力や地位をかさに着て、統治下の人々の心を、自分らと平等のものとしてそれを敬いつつ、それに応える、ということがなかった。そのあり方を修正する方法として西洋では人権擁護を骨子とするデモクラシーが生まれたわけです。

ところが日本の君主であった「天皇」といわれる方は、二千年もの間、皇位を継承してこられました。全く独自の姿勢を一貫して受け継いで来られたのです。皇位の継承が二千年も続いたということは、裏をかえせば、天皇が国民に対して持たれたお心が、二千年もの間一貫して同じ本質を持つていたことを示します。そしてその本質とは国民の心を敬いつつ、国民に対してこられたということ。日本にデモクラシーが発明されなかったことを責める人がいますが、それは筋がちがうので、実際は、それを発明する必要がなかったのです。さらにいうならば、デモクラシーが窮極の理想とする「人間平等の本義」が、その内的な意味において、すぐれた統治の精神、心の在り方のおかげで、すでに理想に結びつきながら、発揚していたからです。では、何故そのようなことが可能であったのか、よくよく考えていただきたいと思います。

そこでまず第一に諸君に望みたいことは、歴代の天皇のお心の内容がどういうものであった

か、またいまの天皇のお心、その内容がどういうものであるかについて、諸君は諸君自身の心を惜しげもなく使つて、そのお心の中にまで、諸君の心を運び込んでいただきたいということ。すなわち全心的な姿勢を整えて天皇のお心に「つきあつて」いただきたいということ。天皇のお心の内容を見きわめることなしには、天皇についての価値を判断しうる方法はないはず。従つてこうした姿勢を諸君が心の中に整えれば、いままで漠然とした姿勢で天皇論などやつていたことから、一歩抜け出して、諸君は具体的な天皇のお姿と直接に対面することが出来るのです。こうして諸君の天皇論は、抽象から具象に近づき、同時に学問的にも正確な取り組み方に近づくことになるのです。

第二に諸君が心にとめるべき問題点は、諸君は現代ならびに、現代以降における天皇について考えようとしがちですが、一応それとは切り離して、過去における「天皇」だけを先に正確に理解すべきである、ということ。一応、大東亜戦争終了時までを区切りにして考えてみられたらよいと思う。

すなわち、日本の歴史上で「天皇という地位」（これを「くらい」または「たかみくら」高御座」と名づけます）は、なぜ長い間国民の信望のまとでありえたのか、という過去の問題に「つきあう」ことが先なのです。そうすると諸君は、今日ならびに今日以後の天皇について考えなければならぬと気負つていた気持ちから解放されて、気持ちが軽くなる。

こうした立場をふまえると、次のようなことに気づくはずで、すなわち、① 諸君は、いままでの教育によつて、日本人民は長い間、天皇というワンマンに隷属させられてきた、と習つてきたかもしれないが、日本の歴史上で、天皇が政治、軍事の大権を掌握しておられた期間は、日本史上の何分の一しかなかったこと、そしてそのような権力の座に実質的にお立ちになつておられる時もおられない時も、いつも「天皇」として国民から慕われることに変わりがなかった、という不思議な点。② 国民はいつも「天皇」を大切にし、心からお慕い申しあげていたし、幕府のように、政治の全権を握つたものでも、国民のこうした天皇への思慕の心を無視しては、到底政治を行ない得なかつたこと。だからこそ、依然として天皇を形式的にでも敬うほかはなかつたこと。勿論、権力の座を占めた人達の中には、天皇を政争の道具にしたり、天皇を粗末に扱う者もあつたが、それはすぐに一般国民大多数の反撥に出合つて、長続きすることができなかつたこと。③ さらにその原因をたどつてみると、天皇のお心、そのお心の中味が、そうした全国民的な尊敬をうけるに値するものを、常にもつておられたということ。本来、一般国民というものは「誠実」ということに驚くべきほどの敏感さをもつて反応するものであるが、その直観が天皇の「誠実そのもののお心」に常に感応していたこと。④ そのうえ嬉しいことには、歴代の天皇のお心がどういうものであつたかを、いまのわれわれでも知ることができることである。古くからの天皇がお作りになつた和歌が今日まで沢山残されているこ

とは、天皇を学問の対象とする好適の資料といわなければならぬ。和歌の創作に少しでも努力した人は、和歌というものは作者その人の心情をありのままに表白するものであることを知っています。だからその人たちは残されている歴代天皇のお心を知ることができる機縁を持つているわけです。この合宿で試みているような、「いつわりのない和歌を習作すること」の意義は、天皇の本質を理解すべき日本国民の共通の責務からみても、それがどんなに大切なことであるかが判つて来られると思う。⑤ 要するに、それらのことをまとめてみますと、天皇がどのようなお心で国民に「つきあわれたのか、そのつきあわれ方」と、国民が天皇にどのような心で「おつきあい申しあげて来たか」という二つの問題に取り組むことこそ、天皇論の前提でなければならぬということ——そのようなことに、きつとお気付きになると思うのです。

さて、その天皇とのつきあう姿勢、すなわち天皇のお心をお偲び申しあげる心の持ち方、それを、国民一人一人は、お互い同士が平素つきあってきた「つきあい」における心の修練の中で、常時不断に練磨してきたようです。それは、いつてみればつきあう相手の心から、相手のまごころを求めあつてきた、といつてもいいでしょうし、「まごころに感応する心を養つてきた」といつてもよいでしょう。

ただここで考えてみたいことは、天皇も日本国民も、その点では同じ姿勢で相対してきたの

ですが、どちらが先なのか、という問題になると、一概には断定できないということです。というのは、日本人全体が、そういう人間的な「つきあい」の本質を持つていたからこそ、その中から天皇のような人々が生まれた、ということもできるからです。そう考えていきますと、天皇が国民を支配した、という表現よりも、国民が天皇を守り通してきた、といった方が、より正しい言い方になるかも知れません。天皇を肯定し、大切にしたのは、われわれ日本人の祖先たちの自主的な意志と情意にもとづくもの、と評した方が、より一層正確のようにも思われできます。もし、そうでなかったとしたら、権力の座から遠ざかってしまわれた天皇を、なぜ国民（人民）たちは、変わりなくお慕いすることができたのでしょうか。私たち自身の身にふりかえって、そのことを考えてみれば、なにかがなければ無力に等しくさせられている天皇を大切にするわけがないではありませんか。天皇という位（くらい）すら、ずっと以前に消えてなくなってしまうはずだ、と思われてならないのです。

こうみてくると、諸君がいままで聞かされてきたような、天皇とわれわれ祖先との「つきあい」を、搾取と被搾取の関係であったと規定したり、天皇は非近代的なものだなどという論法は、ガタガタにゆれ動いてくるのではないでしょうか。事実立脚し、古人の心を追体験していくこの勉強の仕方は、小さな頭の中で論理をこねまわすこととは比較にもならないほどの広さと体験に結びついてきます。

以上のように、諸君は、学問的にみても当然すぎるほど当然な勉強の仕方をつけたあとで、現代ならびに明日からの日本について、天皇の問題に取り組んでいかれたらよいのです。肇国以来、二千年あるいはそれ以上かもしれない長い長いあいだ、我々の祖先が大切にしてきた天皇のことです。過去のことを少しも勉強しないで、天皇も人間、自分も人間、なんで区別する必要があるか、などという幼稚な議論は、小学生ならいざしらず、大学生たるものが、まともにたたかわす値打ちある議論ではありませんまい。ましてや、国立大学の教官や、学識経験者といわれる人々の中に、その大学生に輪をかけたような、お粗末な形式論理で、堂々と天皇論をくり拡げている人々が少なくないのですから、いまの日本の文化科学ならびに一般文化のレベルのほども知られるというものです。

「事実」に取り組む勇氣

私が、以上お話したことは、「人とのつきあい」にしても、「友情」「恋愛」「母子の情」「天皇」のことにしても、取り立てて、新奇の説をたてているわけではありません。日本文化の基底にある「事実」というものを大切に見方「まごころを抛り所にして生きてきた伝統」を語ってきただけです。しかしいまの世の中では、自分の所論に都合のいいところだけをひろってきて、論理を展開する傾向が多いのですが、私とて日本の欠点に眼をつぶっているわけで

はありません。だが問題は、何が本質的で、何が枝葉末節かの判断です。枝葉末節のことをもつて本質的のことを捨て去るのは、決して、科学的とはいえないし、進歩的でもないと思えます。ところが今日の日本で所謂科学的とか進歩的とかいわれる言論を見ていると、価値の評價に狂いがみられます。科学的というなら、本当に本末を違えることなく、あくまでも過去の事実に着目して科学的にやってみてほしいものです。

繰返すようですが、事実に関心を蔽うことは、現在の問題に限らず、過去の事蹟についても、「間違い」です。人は、誰でもお母さんの乳を吸い、お母さんの胸にいだかれ、兄弟姉妹やその他近隣の人達の暖い庇護のもとで成長し、更に、長じては、先生方のお世話になり、そしてやつと大人になっているのです。これは現実の事実です。この現実から遊離して思考を展開したとて、どうして具体的な解決策を生みだすことができるでしょうか。もしこの事実を無視して、勝手にわれわれの人生というものを考えてみたところで、それは何の意味も持たないだけでなく、そんな論理のもてあそびにばかり熱中して、それで学問だ学問だなどいつているようでは、やがて、われわれの子孫からも馬鹿にされることになるでしょう。人類の幸福に寄与しようとして大見栄を切るならば、先ず人間の本体を見きわめる努力からスタートしてもらいたいものです。

一 民族が世界に貢献する道は、ただ一つ、その自らの民族が積み重ねた文化（心の集積）を

一人一人が、その身と心に吸収しつくして、その上で、外国の人たちに接すること、それしか方法がありません。個性（文化的個性）を持たない国民が、外国の人々から尊敬されない理由は、とりたてて説明するまでもないところです。「天皇」の存在、それはいつてみれば、日本の文化が生んだ特異の価値である以上、その価値の評価ができなくなった日本人は、同時に日本文化の本質を見失ったことになるのかもしれない。

天皇というものは、地球上の全歴史の上でただ一つしか存在しなかったものです。皇帝とか君主とか呼ばれる人は沢山おられます。しかし天皇というものはただ一つしかない。ということとは、天皇という存在を生み、天皇という存在が適応される社会というものは、やはり世界にただひとつ、この日本のほかにはない、ということ。だから天皇について語ろうとし、これを研究し今後の課題にしようとするには、日本の歴史における天皇と国民との「つきあい」の内容を研究する以外に、研究の対象はないではありませんか。

それなのに人々は、ナポレオンとその配下との関係や、ロシアのツァーと国民との関係を調べて、それがあたかも君主制における共通的事実であるかのように判断し、それを基礎にして天皇の問題を説明しようとするのです。そこにすでに抜きさしならない誤った類推がなされているのです。その上、数多くの日本の学生は、そのような無駄な、空まわりの研究に膨大なエネルギーを費しているのです。これが現代の学問の悲しむべき姿でなくてなんでしょうか。

何故そんなことになったのか。それは事実をまともに見ようとする勇氣がないからだ、と私は思います、自分たちの周囲の新聞や雑誌に頼つて、そこに同調していればまずまず安心だという安易な通俗的な人生態度が、一番問題になるのです。うたかたの泡のような、また根なし草のようなものに、自分の尊い青春を捧げて平氣でいる、その惰性の中からの脱出こそ緊急の課題ではないでしょうか。

私はそう難しいことを申ししているつもりはありません。ただ一つのこと——われわれ人間は一人だけで生きているのではない——ただ、それだけのことを具体的に展開してきたつもりです。日本人は祖先の中から生れ、親と兄弟と先生と友達と一緒に生きてきた、そして生きていこうとしているのです。さらにわれわれは子孫のためにより良い社会を残していこうとするのです。そういう事実を無視して、日本という祖国をつまらないものと思つてみても、世界のどこに諸君の身を置くところがあるのでしょうか。

稀には、中共やソ連やアメリカという諸国が、諸君を友だちとして受け入れてくれるかもしれません。しかしたとえそんなことがあつても、そこは、諸君の魂を永遠に安らかにさせてくれる場所にはならないでしょう。何故なら、それらの国には、その国の祖先があり、その国の人達が生む子孫があるのですから。その中にあなた方を加えてくれることはあつても、それ以上のことをもつてあなた方を迎えてくれることはありません。世界の人たちがどんなに博愛

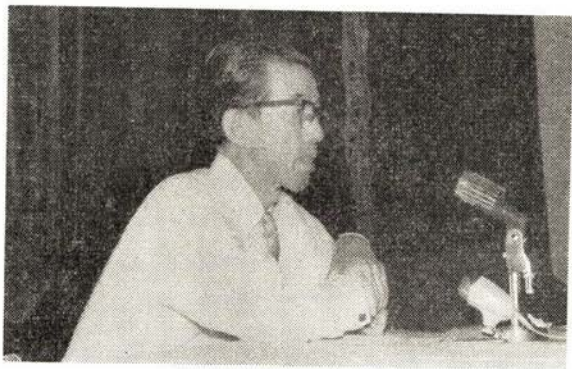
の精神にあふれているにしても、あなた方がいま生活し、同じ日本人が住んでいるこの日本の国土以上に諸君をあたたく迎えてくれる所はなからうと思います。私たちの祖先はここで、心をこめた言葉を生み、文化を生んで今日の日本に至りました。この文化の蓄積の重大さ、それをふまえる以外に私たちが生きていく道は拓かれなれないと思います。

(亜細亜大学講師・国民文化研究会理事長)

■ 合宿教室における講義

「近代化」の意味とその克服

福 田 恆 存



歴史と伝統と文化

「近代化」の意味

- 1 その歴史の必然性
- 2 その精神史的意義

日本における「近代化」と「西洋化」との異同

日本における「近代化」の特質

- 1 言葉の混乱
- 2 未来からの革新
- 3 適応異常と閉鎖性
- 4 「前近代性」への依存
- 5 他者の犠牲による独走
- 6 「不均衡」の問題
- 7 伝統の喪失

その克服への道

序にかえて

本日は、『近代化』の意味とその克服」という題でお話致すことになりましたが、これを本当にお話することになりますと、二時間や三時間ではかたがつかない大問題でございます。そこで講義要旨の中にいくつか立てました柱の意味を説明することによって問題の所在と方向を示すだけにとどめようと思えます。ただその本論に入ります前に序として言葉の問題をつけ加えさせていただきます。

言葉というのは、非常に判り切つたもののようにいて、よく考えてみるとなかなか難しいものであります。国語問題の論争の時にも、言葉は道具であるとか、道具でないとか言われておりました。表音派の人達が、言葉は人間相互の意思伝達の道具だ。あるいは道具に過ぎないという風に使っているのに対して、表音主義を否定する立場の人は言葉は単なる道具ではないという言い方でお互の間に応酬が行われる。しかし、この論争には根本的な間違いがあります。というのは、表音派の人達が、言葉は道具に過ぎないという時に、道具を軽視、乃至は軽蔑しているところに、問題があるのです。従つて、それに反対する人は、道具などとはとんでもない。言葉は魂そのものであるという言い方になるのです。しかし、道具というものを軽視し軽蔑している点では、彼等もまた表音派の人達と同じだと言えましょう。

だが、道具というものを魂や精神と対立した低劣なものとして軽視するいわれはどこにもありません。私は言葉は道具であつて結構だと思ひます。結構だというより、道具であればこそ大事だという考え方を持っております。そこが表音派の人達とも、表意派の人達ともちよつと違います。ところでこれこそ言葉というものがなかなか難しいものだということの端的な一つの例であつて、同じ道具という言葉を使いながら、ある人は軽蔑の意味で使い、私は尊重する意味で使つてゐるといふことになる。道具という言葉に限らず、あらゆる言葉は人々によつて違つた意味合いで使われてゐます。なるほど五官をもつて認知し得るものを表わす言葉はお互いの意思伝達の上でさしたる差がありません。例えば「戸を開けてくれ」といふような言葉に誤解はめつたに生じないのです。相互の理解に共通の要素が大きいのです。

どんな言葉も、人々にとつてさういふ共通な面と、その人独自の面とを持つてゐると言つて差し支えないかと思ひます。一部分重なり合つた二つの円を想像して下さい。二人の間が一つの言葉を喋つてゐると、重なる部分が必ずあります。ただその重なる部分に大小があるといふことが問題であつて、五官に感知し得る言葉、例えばいまの戸だとか、タオルだとか、盆だとかいふものに関する限り、この重なる部分が大きであります。それが全く一致するとは申しませんが、さう言つていくらい、共通部分が多い。ところが、抽象的な言葉になりますと、その抽象度の強さに応じて、重なり合う部分が次第に小さくなつて来る。しかし、それが小さく

なつたという自覚がないところに大きな問題が生じてくるわけです。で、なにより大事なことは言葉には伝達可能な領域と、孤独な、相互に連絡のない部分があるのだという自覚だということになりましょう。

戦後、殆んど流行語のようになっていて、民主主義、平和、自由、平等などの言葉になりますと、多くの人達が同じ意味だと思つて使つていても、そこに、大きな差があるように思われます。こういう抽象語に何故差が出て来るかという点、五官で認知できないからであります。それ故にこそ、その言葉にそれを使う人々の異つた価値判断が加わるからであります。平和ということは戦争をしないことだらけの共通要素は誰にもあるかも知れません。しかし、それをあらゆる人間行為の最高の価値と見なすか、戦争より平和の方がいいのだがという程度で考えるかによつて、非常な差が出て来ます。その差を意識しないで、話し合つておりますから、言葉がいたずらに混乱して空を飛びかつていこう状態になります。今日の思想の混乱、あるいは道徳の混乱というような根本的な問題は、因をただせば、すべて言葉の混乱から生じて来たと言えましょう。もつとも逆に言えば、道徳の混乱、思想の混乱が起つたからこそ、言葉が混乱して来たとも言えます。

第一次大戦後もそうでしたが、最近また言語哲学というものがふりかえられて来たのは、やはり既成の価値意識、あるいは一つの価値を中心に組み立てられていた文化共同体意識が崩壊

に瀕しているからです。こういう時代には必ず言葉とは一体何か、果して言語による人間相互の心の伝達が可能であるか、という問題が起きてくるのは当然です。もともと日本では今日、そういうことを問題にする意識さえ生じないほど言葉が混乱しきっておりますが、言語に対する哲学的思索はどうしても必要です。

序の結論として申し上げますと、言葉というものは、それぞれの人が勝手に自分の思いを託して使っているものであるということなのです。もう少し本質的に申しますと、人間と人間との間に本当の意味の伝達があり得るかということになりました。「愛」という言葉がございませぬが、私達は人間の心と心がそのように完全に一致することがありうるか。あり得ないのではないかという一つの絶望感。伝達不能・愛の不可能という一つの絶望から出発しなければならぬと思います。もし愛というものが、伝達というものがありうるとしても、その場合も一応その絶望から出発しなければならぬ。それを越えれば、初めて何かの道があるであろう、というより、その絶望を越えたもののみが、本当によく愛しうるし、自分の意思を人に伝達し、人の言葉をよく理解しうるようになるのだということになるかと思えます。

歴史と伝統と文化

歴史という言葉について先ず考えて見たいと思えます。今日歴史というものが人々の意識の

上からうすれて来たのは、戦後の教育の大きな責任であります。現代の多くの歴史学者達の考えている歴史と、本来の意味の歴史というものは、私は違うと思っております。歴史学の立場からすると、歴史は社会科学なのかどうかという考え方があります。社会科学という立場に立てば、それが科学である以上、対象を客観化、あるいは客体化しなければならぬ。従って、客体化しうるものだけしか対象にしないということになりがちです。しかし、歴史のように人間の行動を対象にした時、人間の心を抜きにして考えることができるだろうか。自然科学、物理学のように、人間の心を全部抜き去って考えていくことができるかというと、実際にはそうはいきません。歴史学は最もそれができない学問と言ってもいい。だから科学にはなり得ない学問といてよろしいわけです。

私が冒頭に歴史という問題を掲げたのはそれだけの理由があるのです。一体この世の中に、個人の存在に先だつて存在するものは何かと考えますとそれは三つあります。歴史と自然と言葉であります。例えば日本語は私達の存在よりもずっと前から生きつづけてきたものです。神がかつて、言霊だの魂だのと言わなくても、日本語というものの生命は、私などのように、ついこのあいだちよつとまかり出た人間とは比べものにならない長い歴史を持っております。再び国語問題にふれますけれども、国語や国字を改革しようとする人達は、なにか自分が自由にそれを変えられるものだ。自分の方が日本語の主人公だという風に思っているのです。しかし

われわれは自由に自分の発想に従って、個性的に言葉を使って来たわけではなく、日本語の仕組みに従って、これにつき合いながら、つまり仕えながら生きてきたのです。そのおかげで、今日どうやら日本語が使いこなせ、時には個性的な表現もできるといふ風になつてゐるのではないでしょうか。

歴史というものもそうなのです。歴史は既に存在してしまつたものです。われわれが、歴史に対してこういう風であつてももらいたい、こういう風に直したいと思つても、もうとり返しがつかない。ところが、日本の歴史は既に存在しているといふことを、今の歴史家たちはどうやら忘れてゐる。つまり歴史は親みたいなもので、私達は日本の歴史の子供なのであります。その子供の立場から過去の歴史を裁いていこうというものの考え方が既にまちがつてゐる。歴史をして私達に仕えしめてはならない。私達が歴史に仕えなければならぬのです。ところが、今の歴史学者はすべて歴史を私達に、すなわち現代に都合のいいように仕えさせるといふようなことをやつてゐるわけです。

今日の歴史学者の多くは唯物史観を信じてゐる人達です。また唯物史観を信じないまでも、一つの価値判断を持つていて、人間は永遠にユートピアを目指して進歩するといふ考えを持っています。その場合、進歩という言葉の意味がまた問題になるのですが、それは後でふれることにして、とにかくある観点から一つの目的地を描き、その目的に都合のいいように歴史が動

くと考えるわけです。つまり、あらゆる時代は、常にその次の時代に至るまでの「はしご」だと考え、その時代自身の自立性というものを否定してしまふわけです。例えば、大化の改新によつて、日本の古代国家ははじめて中央集権の体制に入った。ところがそれが貴族の手で行われたことが、左翼の歴史家には気に入らない。それが民衆の手によつて行われたことを望むわけですが、西暦紀元六四五年頃に、目ざめたる民衆が日本国家の統一を意思するなど期待するのははじめから馬鹿な話です。大化の改新は大兄皇子と中臣鎌足が中心でしたが、皇室や貴族のような当時のエリートであり、知識階級であつた人がそれをやつたというのは、当然のことです。フランス革命でも、ロシア革命でも、中共の革命でも、すべてリーダーの手によつて行われたので、大部分の大衆は、何が何だかわけが分らないうちに世の中が變つたというのが本場で、左翼の人達のいうように、本当に民衆が目ざめて立ち上つたなどという馬鹿なことは今までに一度も行われたためしがない。民衆というものはよかれあしかれそういうもので、時代の先覚者、指導者によつて歴史は動いていく。ところが、戦後は指導者によつて歴史が動くことを全部否定して、大衆が歴史を動かしたという風に無理に解釈しようとした。従つて一時言われたように、人間不在の歴史、英雄を全部抹殺した歴史が教えられました。

そういう大きな間違いは、すべて今日の目で歴史を見ていて、歴史の、ある時代の中で生きていた人間の気持を全然無視することから起るのです。例えば最近「乃木大将」という映画を

作るといふので、その台本について相談をうけましたが、やはり今日の目で見ている面が随分強いのです。乃木大将の時代は、大東亜戦争とか、民主主義とか、自由とか平和とか、原水爆とか、そういうものは思つても見なかつた時代であります。そういう中で、その時代の人達は精一杯生きていた。つまり、あらゆる時代にとつて一寸先は闇であつた。このように人々が一寸先は闇という中で生きていたということを今の歴史家は忘れてゐるのです。大東亜戦争もそのいい例ですが、もし遠眼鏡で見ると、ミズリー艦上の調印が見えていたら、誰も戦争は始めなかつたに違ひない。自分だけには見えていたというインテリがおりますけれども、そんなはずはない。また、敗戦後の今日のよな経済的繁栄も、当時の人達には見えていなかったでしょう。負けて、もう日本民族というものは滅亡するのではないかと悲観絶望している人たちもいたわけです。つまり歴史というものは、その当時の人たちの中に入つて見なければ分らない。要するにわれわれは自分を歴史の方につき合わせなければならぬのです。歴史をわれわれにつき合わせてはならないということを、最初に申し上げて「近代化」の問題にはいつて行きたいと思ひます。

「近代化」——その歴史的必然性

「近代化」といふ言葉は非常に曖昧な言葉であります。曖昧だけれども皆何となく使つてい

る。例えば明治時代には文明開化という言葉がございましたが、それと今日近代化と言っているのは大した差がないのではないかと思います。戦後いわゆる第二次産業革命とか、技術革新とかいうことが言われるようになりましたが、近代化という言葉は、イギリスの産業革命以来の技術の進歩に伴う現象を指している言葉だと解釈していいのではないかと思います。技術というものは、自然や物に対する開発を意味し、それを人間の社会生活にも適用して、社会制度その他の近代化という考え方が当然出て来るわけで、例えば交通機関一つを例にとつてみても、ナポレオン時代までは馬より速いものはなかった。古代文明の時代からナポレオンの時代までの数千年間と、それから以後の百年の間には、技術革新がもたらした決定的な違いがあります。それ故、技術革新というと産業革命以来というように、一応考えられるわけです。しかし、それはあくまで狭義にいう場合で、実はこの考え方のものは昔からあったのです。

アリストテレスに「自然学」という本があります。フィジックスは今では物理学を意味しますが、ギリシャ語でフィジックスというのは、フィソスの学問、すなわち自然を対象とする学問という意味で、「自然学」と訳するのが一番適切でありましょう。その中で彼は技術について論じております。彼は人間が手を加えないで人間より先にあったもの、つまり自然と、われわれが自分の技術、人工によって作り出したもの、その両者は本質的に違いがないと申しております。彼の引いている例によりますと、われわれは樹木というものを人工的なものではなく、自

然だと考えている。ところが、もし自然にこの樹木というものがなかつたらどうか、自然の発
展段階において、人間というものがもつと早く出て来たとは仮定したらどうなるか。恐らく人間
は自然がやったと同じように、樹木を人工的に作り出したであろうと言っております。逆に、
例えば、今日われわれが人工的と称している建築物のようなものを、人間の知恵がそこに行く
前、あるいは人間というものが発生する前にもしも自然が作ってしまったのなら、それは恐
らく、今の人工の建築物と同じようなものになっていたろうし、われわれはそれを自然と称し
ているであろうということになるわけです。これは、植物学、あるいは物理学の上で証明出来
るかどうかは別問題として、一つの比喩として考えると、非常に卓抜な考え方であると思いま
す。というのは、アリストテレスの根本には、自然は技術家であるという考え方がある。人間
は技術を使うけれども、それは技術家である自然を模倣しているだけで、自然の中にはもとも
と技術開発の能力が具わっていて、人間はそれに手を貸して、自然の意志を充足させるのであ
るといふ考え方があります。よく考えてみると、今言つたようなアリストテレスの比喩はそれ
程突飛なことではない。何故なら、人間もまた自然物であります。従つて、自然が生んだ第二
の自然である人間が生んだもの、それは、第三の自然と呼んでも一向差し支えないわけです。
そういう意味から言いますと、技術革新とか何とか言つても、人間は思い上つてはならないの
であります。人工的技術と自然とをそれほど根本的に分けてしまつてはならないと思ひます。

近代化という時に、一方に血道をあげている人がいるかと思うと、逆にそれに白い眼を向ける人もいるわけです。近代化ということに何かバラ色の夢を抱く人と、それに嫌悪感を抱いてやみくもに反対する人と二つに分れております。これも近代化という言葉の意味の受け取り方が違っているからです。

私は、近代化というのは単なる歴史的必然だと思ふのです。進歩という場合も同じことで、これはいいも悪いもない、その中に価値は絶対に含まれないと思います。「犬が西向きや尾は東」というようなごく当り前のことで、放つておいても人間は進歩し、放つておいてもあらゆる国は近代化の過程を辿るにきまっています。それは価値ではなく歴史的な一つの必然性に過ぎないと思います。それに対して過大な夢を抱くことが大きな誤りであると同時に、それを目の敵にするというのも大きな誤りであります。

私は近代化という言葉には価値が含まれないと申しましたが、それは軽蔑して言うのではありません。価値とは関係のない単なる事実であると言うのです。進歩という言葉についても同じことが言えます。人間は進歩します。歴史も進歩します。しかし、進歩するということは価値とは関係がありません。封建時代とそれより進歩した現代の民主主義の世の中と比べてどちらの方が上だとか下だとかいうことは出来ないのです。ここに文化という問題が当然出てまいります。封建時代と今日を比べてもよろしいし、後進国と先進国を比べてもよろしいのですが、

それぞれの時代、それぞれの国に文化があります。文化というものは質の差であつて、決して量で優劣をはかることは出来ないものです。後進国、先進国というような分け方は、あくまで近代化というものを基準にした量による分類法です。ですから、私は日本は後進国だとおめず臆せず言うわけなので、後進国で一向差し支えないのです。後進国であるから文化的に劣っている、先進国であるから文化的に進んでいるというのは間違ひです。ただ西洋の文化が今の近代化という一つの歴史的必然性を生み出しているのです。日本あるいは東洋の文化から近代化というものは出て来なかつた。従つて、われわれは後進国になつたわけで、これも歴史的必然性にすぎないと思ふのです。それで、文化の点では、私たちは一向後進国とは思わないし、そういう後進国、先進国という言葉で文化の面で適用することはできないのです。文化というのは、それぞれの民族なり時代なりがもつた生き方の様式であります。それには優劣は全くないのであります。もつと美学的な問題であり、あるいは哲学的、宗教的な問題であつて、広い意味での技術に係わる近代化の問題とはおのずから別箇のものであります。

近代化——その精神史的意義

近代化に伴つて混乱が起るのは、それに余りに大きい価値を与えるからで、後進国の場合は特にそれがひどいわけです。よく「明治はよかつた」ということが言われますが、その明治を

作つたのは封建時代の人間であることを忘れては、大きな過ちを犯すことになります。日本の近代化は明治から始まったわけですが、その明治の時代は江戸時代の武士階級が指導者となつて作つたのです。この点を間違えないでいただきたいのです。

日本は明治以来近代化というものを非常に大きな価値にまつり上げるといふ過ちを犯し続けて来ました。これも私たち後進国の歴史的必然性であり、宿命的なことであると思いません。先進、後進だけでものを考えることが殆んど日本人の価値観になつてしまつたと思われるくらいです。それが明治から始まつているのです。戦後はそれが極端になり、殊に唯物史観に彩られたわけですが、近代主義的なものの考え方が人間の生き方として大きな価値であり、国家や民族の迫るべき道であるという風に思い込んだのです。私が、もし明治時代に生きていたら、それが歴史的必然性であり、何としても先進国に追いつかねばならないと考えたでしょう。当時の人々にとつて、それは仕方のないことでしたけれども、今日はそのようにして進んで来たために起きた大きな過ちを改めていくべき時代に來ているわけです。後進国に於ては、どうしてもそういう過ちが起らざるを得なかつたのです。長い鎖国が続き、狭い地域に閉じ込められているところで、日本人は始めて近代化の上昇線を辿っている西洋というものにぶつかるとして、今までのあらゆる歴史や伝統をすっかり捨て去つてしまふ。懸命になつて先進国に追いつこうとする。これが後進国の近代化の宿命だと思ひます。

しかし、近代化に伴う新しい事態は西洋でもある程度は起つています。アメリカは勿論ですが、先進国であるヨーロッパも、近代化、技術革新の波に巻き込まれて行きつつあることは否定できません。後進国ほどではないにしても、世界中が近代化、あるいは進歩というものを一つの価値にまでまつり上げつつあるという時代はきびしく反省されねばなりません。既にそういう時期に来ているのではないかということをご申し上げて置きたいのです。

前項で近代化というのは単なる歴史的必然性に過ぎないということをご申しました。それから精神的に考えましても、後進国に於ては近代化ということが価値になりやすいということ、最近では先進国でもこれが一種の価値観になって来ていると申しました。その原因として、宗教がぐらつき始めたこと、あるいは宗教までが近代化の影響を受けつつあるということが考えられます。ヨーロッパで一番頑固な宗教であるカトリック教徒までが、だんだんそういう傾向になりつつあります。元来、近代化とか進歩とかいう概念は、ひとつの遠心運動（リセントラリゼーション）に過ぎません。これに対して、宗教というものは求心運動（セントラリゼーション）であります。中心に向おうとする動き、人間の内部に向おうとする動きです。神というのは、歴史のあらゆる時代、あるいはあらゆる民族から等距離に存在するものであります。つまり一つの円を頭に描くと、その中心に神というものが存在する。円周が時間的な歴史というものを形成すると考えてもよいし、あるいは横にあらゆる民族の所在点を結びつけたものが円周

をなすと考えてもいい。それらはすべて神と等距離にある。遠心運動が激しくなると、円周が次第に大きくなり、中心と円周の線上を廻る錘との間の糸が、いつ切れるか分らぬという状態にもなりかねない。今や近代化というものはそういう危険な状態に直面しているのです。そういうことをよく考えていただきたいのです。

日本における「近代化」と「西洋化」との異同

文明開化の時代には、和魂洋才というような言葉が使われました。才は西洋に借りるが魂は大和魂という考え方です。しかし実際はほとんど西洋化して行つた。今日われわれの周囲には歴史と自然と言語の三つを除いて、日本固有のものは殆んどなく、あらゆるものが西洋化してしまつたといえます。明治以来文明開化というのは西洋化を意味して来ました。今日でもそうです。ところが、多くのアメリカの日本学者は、近代化と西洋化とは違ふと言つています。近代化はアメリカ化でもヨーロッパ化でもないということです。しかし、日本の場合、或いはアジア、アフリカの後進国の場合、簡単に違ふといつて済ませないものがある。抽象概念としてはたしかに両者は別個のもですが、現実においては違わない形をとらざるをえないのであります。例えばインドやベトナムについて考えて見ましよう。ベトナムの仏教徒の動きなど見えますと、日本の仏教、あるいは、本来の仏教と非常に違つた独特のもののように見えます。

い、悪いは別として、やはりベトナムの近代化にとつて仏教徒の存在はかなり邪魔になっていると思ひます。インドの場合はヒンズー教というものが近代化を妨げています。いわゆる、前近代のといわれているようなものは、アジア、アフリカのどの国へ行つても色濃く残っています。ところが、日本では前近代の要素というものが殆んど見られない。心のうちは別として、外側は全部近代のなもので固められております。あるいは先進国よりも、もつと近代的面面すからあります。皮肉な言い方ですが、西洋よりも西洋的なのというような状態にまでなつてしまつた。つまり日本は西洋化という道を徹底的に辿つたために先進国に追いついた、近代化に成功したというように言えるのです。これに反してその民族の伝統が捨て切れないアジア、アフリカの諸国は近代化がなかなか出来ないという情勢にあるのです。日本人は勤勉で、インド人は怠け者であるというようなことはむしろ二義的であると思ひます。よく言えば勤勉、悪く言えばあわて者かも知れませんが、日本は完全に西洋化の道を辿つて、アジア、アフリカという後進国グループの中で先頭を切つた、あるいはすでに先進国グループであつたものを追い越して、先進国中のかかなり上位に立つようになったということができると思ひます。

私はプリンストン大学のソ連経済の専門家であるブラックという学者に、後進国にとつては近代化と西洋化とは同じ意味だ、どうしてもこれを切り離して考えることは出来ないといったことがあります。しかし、彼は「それはやはり違ふ」といつて頑として譲らず、「それでは、

イギリス人が産業革命で近代化したのは、あれは西洋化か」というのです。こうなると売り言葉に買い言葉で「そうだ、西洋化だ」と言つて周囲の人を笑わせたことがありますけれども、これは勿論西洋化とは言えません。しかし、これ以上になると水掛け論になると思つたからやめてしまったのですが、その辺のことはアメリカ人やヨーロッパ人にはどうしても分らないところではないかと思ひます。近代化は今やたしかに歴史的必然性であります、それに徹底するにせよ抵抗するにせよ、後進国がその波を受けて苦惱する気持は、おそらく西洋人には理解できないのではないかと思つたのです。

私はやはり日本の場合、あるいは後進国の場合、西洋化という手段を取らなければ、なかなか近代化を達成し得ないと思ひますので、本質的には近代化と西洋化とは明らかに違ひますが、現実の問題としては同じことであると思ひます。そこから起きて来るいろいろな大きな問題を、次の、日本における「近代化」の特質の項で述べようと思ひます。

日本における近代化の特質

△言葉の混乱▽

もう一度言葉について考えて見ましよう。現在私達が使つてゐる大ていの言葉は、「てにをは」は別として、殆んど明治の翻訳語から出来た言葉であります。「近代化」にしろ、「民主

義」にしろ、「歴史的必然性」「精神的意義」等すべて明治以降に出来た言葉です。「自由」とか「文化」とかいう言葉は元からありましたが、今とは意味が全く違う。たとえば、「文化」というのは「文にして化する」という意味で、今日われわれが言っている「文化」とは異った意味で使われていました。そこで翻訳語からわれわれの言葉が成り立っているということが、われわれの大きな課題となつて来るのであります。例えば「文化」という言葉は「カルチュア」という言葉を訳する時に流用されたわけであります。ところが「カルチュア」は「栽培する」「培う」という言葉から出て来たもので、みなさんも受験英語で覚えたように「文化」と「教養」という二つの意味を持っています。西洋では「カルチュア」という一語の中に二つの意味が統一されております。「カルチュア」というものに対する西洋人の生活全体が、そういう言葉を生み出して来ているわけです。文化とは一つの時代、一つの民族の生き方の様式であると言えると思います。すなわち常識的な意味で文化というものを定義すれば、それは私たちの生活が無意識のうちに目ざし、また無意識のうちに、それによつて支えられている一つの秩序、あるいは様式をいうものであります。例えば、鎌倉時代の刀というものは古代の服装には似合わないし、麻上下をつけて古代の剣をさしたら格好がつかないでしょう。やはりその当時の武器と着物とは一貫した美意識、あるいは文化感覚によつて統一されているわけです。やはり一つの時代は大道具、小道具に至るまで、その時代独特の全体的秩序というものの中にそれ

それぞれの道を得ているわけです。人々の歩き方や座り方まで、その民族や時代の様式というものが現われているわけで、それが文化というものであります。そこで、ある個人が、その時代なり、民族なりの様式や感覚を十分身につけた場合にそれを教養と称するわけです。従って、この二つのもの間には必然的な関係がある筈です。ところが、日本では、町や村のような文化共同体で身につけたカルチュアが、学校教育によって崩される傾向があり、学校へ行くほど教養がなくなるといふ奇妙な現象になっております。

「平和」といふ言葉も、それは単に戦争をしていないといふだけのことです。それが日本では、戦争をしていなければ非常にいいことだ、あるいは戦争をしないことがわれわれの生き甲斐であるかのように思い始める。これは一つの錯覚であります。

こういう現象はすべて、われわれの使う言葉が、西洋の翻訳語で、伝統が一つもないからです。長い間磨きがかけられた言葉ではありません。明治で断絶している上、敗戦でもう一度断絶していて、言葉が固定しておりません。言葉を山にたとえますと、裾野が広いほどいいわけです。裾野が広いことによつて隣の山にもつながることがあり得るわけですが、われわれの使っている言葉はまるで裾野のない棒のように切り立つた山ばかりで、山というよりむしろ杭のようなもので、相互の間に全くつながりがなく使われています。

近代化が急激であつたから言葉が混乱したのか、言葉の混乱のために自由な近代化ができな

いのか、それは鶏と卵の関係のようなものでしょうが、ともかくわれわれは言葉の使い方を厳密にし、慎んで使わねばならないと思います。

△未来からの革新▽

日本の近代化の目標となった先進国は、時代によって変わっております。かつてはそれらは主として英、米、仏、独のような自由主義諸国でありました。ところが、ロシア革命の成功によって、また一つ共産主義者にとつての先進国が出来たわけです。だから、日本が今日保守と革新に分れて戦っていると言つても二種の先進国の手先になつて喧嘩しているような状態です。明治以来、われわれは常に「日本はあそこへ行くのだ」という到達点があつて歴史を進めて来た。私は明治の人間の中では乃木大将が一番好きですが、その理由の一半は將軍があゝの当時の歴史の尖端に立たされていた人なのに指導者として日本を将来こういう方向に持つて行こうというよゝな意識がなかつたからです。歴史の尖端を歩くというのはお先まつ暗ということでありまゝ。日本はどうなるか分らない、お先まつ暗なところを、何も分らず歩いていたところに魅力があるのです。

西洋でも最近では近代化が一つの価値観になつていてと申しましたが、始めのうちはそのうではなかつたのです。ただ、人間の盲目的な衝動、アリストテレスの言葉を用いて言えば「自然

自身の中にある技術開発の能力」、その線に沿って人間が技術を働かせていた。それから先どうなるかなどということは分らない状態で近代化が進められて来たわけであります。しかし、日本の場合には既にお手本が次々に現われて来ています。イギリスやアメリカのような昔からの先進国、ロシア、中共のような第二の先進国、その他個人でいえば、ネールや毛沢東やナセルなどが、次々に現われています。日本より、明らかに後進国であるインドネシアや中共などまで、日本のインテリは自分よりも先に進んでいると思うわけで、これは一種の劣等感であります。

「未来からの革新」というのは歴史に対する断罪であります。歴史につき合ってゆくことをしないで、いつでも未来から歴史を切り捨てていくことです。このように未来はこうなるであろうというので、過去を否定していくという行き方を、近代化の過程で日本はずっと取り続けて来たわけです。どんな政治経済体制もいつかは変わるであろうことは確かなことです。しかし私はマルクスが言ったような共産主義社会が来るとは、論理的にも感覺的にも信じてはおりませんが、一方では、絶対にそれが来ると信じ、日本をその方へ持って行こう、持って行こうと努力する人がいる。そういう姿勢を私は未来からの革新というのです。しかし、私たちは未来については何も分らないのです。勿論ある程度の予測はできますが、百年後、二百年後の未来がどうなるかは断言できない。それなのに、過去の必然性から帰納的に話を進めていくのでは

なしに、未来像という一つの観念の方へ歴史を近付けようとする。そうなれば歴史が邪魔になり、錘になって手枷、足枷になって来ます。それをどんどん切り捨てる、これは実におかしいことです。人間は放つておいても進歩するものです。だから、むしろ歴史につき従ってゆくことを前提として、そこに革新ということが起るのです。

△適応異常の閉鎖性▽

「近代化」の意味を説明しました時に、それに絶大の期待をする人とそれに反撥する人がいると申しました。私はこれは両方とも近代化という一つの歴史的必然性に対する適応異常であろうと思います。近代化は歴史的事実であつて価値ではない。それを非常な価値と思ひ込む。又、そのペースに巻き込まれて、反対にそれを斥けようとあがく。いずれも私は適応異常だと思ひます。

ここで日本の旧軍隊を一つの例として挙げてみたいと思ひます。講義要旨の、「前近代性への依存」「他者の犠牲による独走」「不均衡の問題」等の項目と関連させて述べていくつもりです。日本の軍隊ばかりでなく、近代化の過程においていろいろの分野が独立に近代化を行つた。あるいは孤立してバラバラにそれが行われたと言つてもいいのです。そこで、ある分野は非常に顕著に近代化が進んだが、ある分野は立ち遅れたというふうに、フィールドによつて違

う近代化の道をふんでいくわけです。明治は文明開化と同時に富国強兵の国策を立てました。これは先進国に追いつく前に先進国にやられまいとする当然のことであつたと思います。その意味で軍の近代化というものが一番進んだわけであります。軍は戦争をすることを目的としてゐるわけですから、もし間違つたことを教えたらとんでもないことになってしまう。敗北によつて間違いが次々に証明されてしまう。従つて軍は近代化について、日本のどの分野よりも最も真剣であつたと思います。その次が恐らく官であり、大学であつたと思います。とにかく軍が一番近代化のトップを切つたということだけは間違いない。世界最強の陸軍、世界最強の海軍を作つたわけです。ところが、その場合も、海軍はイギリスを範とし、陸軍はフランス・ドイツ・ロシアと、時に目標が変りましたが、ともかく陸軍と海軍では目標とする先進国が違つていたのです。

別の分野で申しますと、政治思想は、フランス・イギリス、法律、医学はドイツ、絵はフランス、音楽はドイツ、演劇はロシア・ドイツ、文学はフランス・ロシアというように、それぞれの手本とする先進国を定めて近代化のスタートが切られたのです。そこに二つの問題が生じます。その一つはそれぞれにバラバラの目標を抱いたということ、もう一つは各分野に非常な不均衡が生じたということです。すなわち国防ということが重大だから、国家は軍に力を注いだ

それから、先ほどの文化という問題とも関連があるのですが、イギリスは海軍は強いが陸軍はそれ程強くない。あるいは絵はかなりいいが音楽はよくないというようなことがあるわけです。しかし、それがその国の文化の特質であり、あらゆるものに優れるということとはできません。つまり個人にせよ民族や国家にせよ、その短所は同時に長所でもあります。政治や軍事に長けている国では、芸術はあまり発達しない。芸術ですぐれた物を残す時代は軍事的には駄目であるということもありうるのです。時代、民族、国家は弱点と長所を一つにしながら、一つの文化というものを形作っているのです。それをあの美人は鼻がいいから鼻だけ持つて来て、あの美人は目がいいから目だけ持つて来るといふようにして、モンタージュ写真のようなミス・ワールドを作ったところで、生きた顔は出来っこないのです。明治の日本は、未来の完成した先進国というようなものを手本にして、それに追いつこうということ、日本をミス・ワールドに仕立てあげようとした。だから、絵画と音楽との間に一つの統一した文化を形成していかないし、政治と文学との間にも一つの統一した、文化秩序というものを持つていないということが起ったのです。そういう不均衡がいたるところにあります。世界一の陸軍、海軍を持ちながら、何故戦争に負けたかという、やはり軍だけで戦争はできないということ、日本の経済力、政治力、資源、工業力というものが、そしてそれらを統一する精神そのものが近代化をなし遂げねば駄目なのだと思います。

よく日本の軍隊を非難して、人を人とも思わぬ人権蹂躪が行われたといわれます。しかし、戦争中に私も簡閲点呼を受けて始めて分つたのですが、「右向け右」というと必ず左へ向く人がいるのです。それは勿論緊張していたことにも原因があります。私は東京の下町に育つた人間ですが、大部分の人は小学校を出ただけで下駄屋の丁稚になったりする。つまり組織生活というものを全くしていない。これは農村に行けばもつと顕著でしょう。さきほどから、近代化というのは技術ばかりでなく、社会制度そのものの改革をふくむと申しましたが、近代的な組織の中で生活するということを全くやっていない人たちを集めて、軍隊という組織を持ち、作戦行動を共にするという場合、その訓練は大変なことだと思えます。訓練する方もされる方も共に、適応異常を起すのは当然で、その結果が近代戦に甚だ不似合いな前近代的棍棒となり、竹槍となったと言えましょう。つまり訓練の方法としては非常に前近代的なものに依存することによって、近代化をなし遂げたと言うことも言えるのです。もし当時の軍隊に入つて来る人たちが、非常に近代意識に目ざめていて、今の人のように人権蹂躪だとすぐいきり立つたならば、日本の軍隊は日露戦争には勿論勝てなかつたし、日清戦争にも勝てなかつた。とうの昔に清国やロシアの属国になつていたに違ひないのであります。すなわち前近代的な人たちによつて近代化が成り立つたとも言えるわけです。

もう一度「不均衡」の問題に戻りますが、社会がいろいろな分野に分裂して近代化が行われ

ますと、相互の間にどうしても阻隔が生じて来ます。そうになると、最も生きやすい方法は、文学なら文壇という一つの閉鎖的世界を作ることです。温室の中に閉じこもることによつて、自分たちだけが肌を暖め合つてすごすということになります。軍とか官とかいうところの近代化についてゆけない落伍者が、閉鎖的な世界にとじこもるような現象が生じて来たのだと思ひます。これも分断された近代化のもたらした一つの必然であります。

その克服への道

時間がなくなりましたので急ぎますが、「伝統の喪失」ということは、近代化によつて世界の先進国の仲間入りをした代償として不可避な事柄だったのでしようが、といつて、その克服の道もこうすればいいという妙法があるわけではありません。あるとすれば、それは今私が言つたような問題を全部自覚するということです。現在自分たちがどこに立っているのかということとを徹底的に考へる。過去を顧みて現在の位置を確かめるといふことが一番大事なことであると思ひます。それから先に、どうしたらよいかといふことが出て来るわけで、私は今ここであつちへ行けとは言えない。それを言えるのはヒットラーだけです。ですから「克服への道」と書きましたけれども、私は初めから、時間があるうとなかろうと申し上げるつもりはなかつたのです。近代化というものに徒らに夢を抱かないで現実を十分に直視する、そこから克服への道

というものを考える手立てが出て来ると思います。すべて精神的な問題の場合は、混乱なら混乱の現状を自覚することにしか、その克服の道はありません。克服などという安易な道はありません。悟らざるをえないほどの絶望的な混乱を痛感することから出直さねばなりません。従って、別に社会制度をこうしたらよいというような安直な解決法は、さらに混乱を重ねるばかりであります。近代化の過程におけるわれわれの立地点を十分に自覚すること、それが克服への道であり、解決への道であることを申し上げて終りたいと思います。

質 疑 応 答

△言葉について▽

最初私は「言葉は道具である」「言葉は道具に過ぎない」というような言い方から話を始めました。戦後は国語教育を道具教科と名づけた時代もあった。言語は伝達の手段であるから、社会科とか理科とかの、有意義な学問をする為の道具という意味で、この場合あくまで目的に対する手段の意味で使っています。軽蔑ではなくても、従属的な、二義的なものとして考えています。ところが、私は道具というものはもつと大事なもので、私流の言い方をすれば、道具とは心と心が出合う場所だと考えます。それは道具ばかりでなく物でも同じことです。しかし近

代化の進行につれて、だんだんそうではなくなつて来ました。昔は母親が自分の子供のために織物を織つてそれを縫つたのですから、その着物は単なる物質ではなく、子供と母親の愛情の出会いの場所であり、心と心の通路であります。着物は暑さ寒さを防ぐ道具であると共に、心の通路でもあつたのです。言葉も全く同じことです。言葉は道具だという時、それはまた心と心が出会う通路なのです。だから心をこめて使わねばならない。用を通じさえすればいいのだという考え方が、実は用を通じなくさせているのです。

《絶望について》

その人の性格にもよるでしょうが、私は絶望というものがあらゆるものの出発点だと思うのです。人間というのは絶対孤独であつて、人と人との間に最終的には架ける橋はないというのが私の人間観です。人間はエゴイスティックなもので、本当は自分のことだけしか考えていないのだということを、一度痛切に見つめることが大切です。そうすると、人間というものは非常に悪いもののように思われますが、私はそのエゴイズムというものが、生きる力、生命のエネルギーだと思えます。ベトナム戦争で弾に当たっている人を想像しただけで、自分がその痛みを感じていたら、われわれは一日として生きられないでしょう。今原爆反対を叫んでいる進歩派の学者たちは、広島に原爆が落ちた時、これで戦争が終り、自分達は生きのびられたと欣喜雀

躍したことを忘れているのです。その時の自分の姿がよく分つておれば、今日のような騒々しい平和運動は起りえないでしょう。人間の中に潜むエゴイズムをもう一度見直した方がよいのです。もし私たちが先に原爆を發明していたら遠慮会釈なくアメリカに落したであろう。そういうことをもう一度考え直してみれば、日本人は世界で唯一の原水爆を浴びた国だといって、手足を失つたいざりが物乞いでもするように——物乞いと心得ているならいいのですが、誇りにするとしようなやり方で——外国に対して世界唯一の平和愛好民族であるかのような偽善的な言動はなしえないはずで、人間の中に潜んでいる利己心をじつとみつめる目がないオプティミズムが、すべての偽善の源になると思うのです。プラトンが「意識してやる偽善よりも意識しないでやる偽善の方が悪い。意識してつく嘘より意識しないでつく嘘の方が悪い」といったのは本当だと思います。現代は非常にオプティミスティクな世の中ですから少し言葉を激しくして言うのですが、私は人間と人間の間架ける橋はないと考えます。それで諦めて駄目になる人間は、駄目になつたらよろしい。人間は皆愛情を持っている。日本は世界中に愛されている——日本国憲法の前文にはそう書いてある——こういつて育てて行つたら人間は駄目になる。なぜならそれは嘘だからです。極限状況に追い込まれた時、人間はどんなことを仕出かすか分らないのだというところから出発して、始めて自己と戦うという工夫が出て来るわけですから。本当の意味で人を愛しようという気持も出て来る。言葉による伝達は不可能だと痛感する

時、始めて言葉に心をこめるような真剣な努力が出て来るのだと思います。私が絶望と言う時にはこれで終わりだというのではなく、これから何かやり甲斐のある仕事をはじめるという出発点を意味しているのです。

《歴史について》

歴史の問題に関して、過去の歴史のみから判断の根拠を得ようとするのは、判断を固定化する傾向がありはしないかという質問がありました。私は「過去の歴史につき合え」と言ったのです。又「過去の歴史に仕えよ」ともいいました。日本語では上から下を「使ふ」のも、下から上に「仕ふ」のも、ともに「つかふ」であり、もとは「つき合ふ」という言葉から出ています。人間関係のつき合いというものはつきり私たちに教えてくれるのは、歴史につき合うのが一番いいと思います。なぜなら相手は絶対に動かないし、ものを言わない。われわれが勝手に解釈しても、歴史の方から弁解はしない。ですから、われわれは、それを粘土細工のように勝手に扱おうとする。しかし、もし本当に歴史につき合い出したら、そこには挺子でも動かないものが見えてくるはずで、私は古代史をテレビ・ドラマにするために、幾つかの参考書を読んでみましたが大抵のものは、事件は何でも起るべくして起った、そういう必然性が順序正しく書いてあって、読んで少しも面白くない。ところが「日本書紀」を読むと断絶がありま

す。蘇我馬子や物部守屋の気持も簡単に説明がつかない。そこで、何回もよんで自分流の一つの解釈を下しました。それは私の一つの解釈にすぎない。私の解釈に過ぎないという以上、私の解釈を超えたものがそこにあることを信じないわけには行かない。私の解釈など、ごさかしい解釈にすぎないときびしく自戒しております。ところが、それは歴史ばかりではないのです。友人関係でも、夫婦でも、親子でもそうです。日本がほかの国とくらべていいとか悪いとか言わないで、われわれは、日本人だから、日本の国家につき合うことをやったらどうかと思いません。よく愛は理解から始まると言いますが、とんでもないことで、理解したら終りであります。理解というものは昆虫をアルコール漬けにするのと同じで、動物をアルコール漬けにするように、生きものときき合つてはいけません。相手を自分の器ではかつてしまつてはいけません。相手を自分流に解釈するというのは、結局、自分を自分流に解釈してしまふことなのです。ところが自分で自分を理解していると考えるのは傲慢です。他人を理解し切つたというのと同じ傲慢であります。だから、自分に対しても、他人に対しても歴史に対すごとく謙虚につき合えというのです。そうすれば判断が固定化するどころか、ますます融通無碍に流動化してくるわけです。逆に歴史を自分流に判断していくと対象の歴史はもとより自分も固定してしまふ。歴史という巨大なもの、他人という自分でないもの、そういうものに謙虚につき合うことによつて、自分の器は大きくなり、伸縮自在になるのです。しかし、己れの制約、己れの器

から脱して歴史をみることは非常に難しいことです。だから無理であり難しいということは何々承知の上で、その努力をしなければならぬと申し上げたのです。

同じような問題ですが、歴史に対する場合、それを単なる事実として認めるだけならば、歴史に対する自己の意志が薄れることはないかという質問が出されています。しかしこの人も自己の意志というような言葉に捉われているのではないのでしょうか。歴史に謙虚につき合い、己れを空しくするというのは、最高の意志力を必要とします。他人なり歴史なりを自分流に解釈するのは非常に楽ですが、身をかがめて歴史につき合うことは非常に強い意志が必要です。私が歴史的必然性といったのは、技術が次第に進歩してゆくのは、価値の問題ではなく必然的な動きだという意味です。従って、明治の指導者たちが、先進国に追いつこうとした意志的な努力の偉大さを否定するわけではありません。私は明治の文明開化というものを、ある程度否定的に検討いたしました。しかし大きな目でみれば、後進国が先進国に追いつこうとする動き、歴史の流れを変えようとする意志的な動きもまた、後になって見れば歴史的必然性なのです。ただ必然性というのは必ず前には見えないもので、そこに歴史が科学になり得ない理由があるのです。普通社会科学といわれているものは、自然科学の影響下に出来たものです。自然科学の対象は実験が可能でなければならぬ。一つのものを拵え上げたら、同じ操作をもって、もう一度同じものが作れるというのでなければならぬ。一回だけ起きるといふものは、厳密な意味の

科学の対象にはならないわけです。だから、大化の改新と明治維新の共通性というものを取り上げたところで、自然科学の実験と同じように今後そのくり返しの原理が適用できると思つたら間違いで、そう簡単に歴史は動かない。そういう意味で歴史は科学の対象にはならないのです。しかし、社会科学としては成り立たなくても、学問としては成り立つのです。単なる事実を記述しただけでは学問とは言えないだろうとおっしゃるかも知れないが、そうなれば学問とはなにかと反問したくなります。また、事実とはなにかと反問したくなります。己れを空しくして歴史的事実に仕えるというその仕え方のうちのみ、事實は自らその姿を現わす。それが学問というものではありませんか。そういう点では歴史は学問でもあり、また文学でもある。シーザーの「ガリア戦記」もそうだし、日本の「神皇正統記」もそうです。大体日本で文学という軟文学だけを指すような習慣があつて、「梅暦」は文学で、「日本書紀」は歴史だという考え方がありますが、とんでもない間違いで、「日本書紀」の方がずっと優れた文学であります。

△△ 価値について △△

近代化は価値ではないということに関連して「価値」とは何かという質問がありました。価値とは常識的には何が善か何が悪かという判断の基準であります。あるいは理想といつてもよろしい。近代化というものは、そういう善悪という価値の問題ではないと申し上げたのです。

その価値というものは必ず体系を持っていて、善のうちの最高善というのが必ずあります。よく道徳は時代と共に変るといわれますが、枝葉末節の点では変りますし、一番末端の礼儀作法というようなものも変ると思います。又、それに伴う風俗も変ると思います。しかし道徳の基本は絶対に変らない。なぜなら、最高善というものは洋の東西を問わず、自己犠牲、自己放棄というところにあるからです。自己を他人のため、あるいは自己よりも大いなるもののため、小は家庭から、大は国家、世界、人類等のために捨てることです。ここまでは、道徳の段階ですが、宗教的にはもつと高い次元である神というような抽象的なものに対する信仰があるわけです。近代化というものは、そういう次元とは全く異つた世界のものであるという意味です。

それから、「期待される人間像」などをどう考えるかという質問もありましたが、私は左翼の人たちのように反対はいたしません。しかし、もつとよい道徳教育というものがあると思うのです。それは私が先ほど言った歴史とつき合うということです。歴史は変えようと思つても頑として変えられない。この不動の巖みたいなものに己れを屈して仕えるというくらい道徳教育として最高のものはないと思います。さらに、同じ理由で国語教育をもつて道徳教育に代えるべきであると思います。

最後に簡単に宗教の問題にふれますが、西洋でも近代化に伴つて、宗教が持つていた力、本當の価値観というものに対して人間を目ざめさせる力が、次第に失われつつあります。近代化

は西洋の内部から生じたものですから、自分の生んだ子供で制御しやすいはずなのに、本当の価値観を見失いがちになっています。宗教は進歩というものを否定するものではありませんが、そういうものに対して精神の高さを維持する役割を果す。そして道徳的には自己犠牲という最高善を果すものです。近代化というのは一種の人間のエゴイズムの発現ですが、宗教がその行きすぎを食い止める力を失いつつあるという事実を指摘しておきたいと思います。

（文芸評論家）

私の
経済
哲学

木
内
信
胤



はじめに

意味論と通意論

認識論と实在論

一葉落ちて天下の秋を知る

経済学の位置づけ

鍛錬された常識

認識論についての二三の敷衍

△質疑応答▽

はじめに

私はこの合宿教室に講師として六回連続して参加しています。その都度合宿記録が出版されていますので、その積み上げの上に次の話をするということが続けて来ました。昨年は「私の構想する世界の新秩序」(「日本への回帰」第一集所収)という話をしたのですが、これはかなり深く突っこんだ話で、これまでの話の一つの集約でもあり、一つの上がりに来たという感じ
です。

そこで今年は「私の経済哲学」という題をかかげましたが、これは私のいまの仕事が経済評論なので一度その基礎を論じておこうと思つたからです。私の評論は決して経済だけに限つたものではなく、随分多方面にわたつていますが、それらはすべて同じものの考え方、同じ思想の上に立つていたわけです。その根底になるものをお話しようと思ひます。学問にも極意というものがあるのでしようが、それは仲々言葉にはならないものです。言葉できちんと説明されたものが、何かを伝えるとは限りません。何でもなくしゃべつてゐることのなかに極意があるかも知れない。それをキャッチするのは聞く人の力量次第だというわけです。

何故私がかつたら経済哲学を問題にするかといへば、私はこれから経済の分野で、私と違つた学説を持つた人達と本格的な論戦をやらうと思つてゐます。その際、自分の立つてゐる哲学

的基礎をあらかじめ示しておけば、末節の言葉の争いにならずに済むからです。

それから、時間が許せばもう一つ触れたいことがあります。それは、私のものの考え方の根底には仏教哲理ともいふべきものがあります。私が、こういう考え方に至ったのは、高等学校から大学にかけての頃です。その頃私に影響を与えた二つの大きなものがありました。一つは大学で法理学というものを教えて頂いた筧克彦先生です。「仏教哲理」という大著を書かれた方です。もう一つは私は数え年で二十七才のとき父をなくしましたが、その御供養のため法華経を読んだことです。この点には触れるべきかどうかまだ迷っています。私のこれからのお話について、皆さんの理解度を考えてみて、質問の時間になつてからそれをきめたいと思つていきます。

セマンティクス コミュニケーション 意味論と通意論

セマンティクスというのは「意味論」という新しい学問です。戦前からあつた学問ではありませんが、戦後特にアメリカで盛んになりました。例えば「自由」とか「民主主義」とかいう言葉をとつてみれば、それは明らかに人により、時代により、国によつて、いろいろ違った意味で使われている。そのことに気がついて、言葉の意味を厳密に探ることになつたのがこの学問です。お互いに使つている言葉の意味は、非常に近似していて殆んど重なり合つている場合

もあるし、反対に殆んどかみ合っていない場合もある。そういう現実に気がつくだけでも人間がよほど内省的になります。意味がかみ合わないままでは、議論しても無駄でしょう。ともかくそういう学問が盛んになったことは歓迎すべきで、いやしくも哲学を考える場合の出发点だと思えます。

そこに気がつくとは自然に、コミュニケーションということとは果して、本当に出来るのかどうか。自分の思想、意志、感情、知識等を本当に人に伝えることができるのかどうかということが問題になる。もしそれが出来るとすれば、その程度如何ということが問題になるでしょう。そういうことの研究をやっているのが「通意論」という学問です。この学問はもともとアメリカでは「パブリック・スピーキング」と呼ばれた、いわば雄弁術の研究のようなものから始つたのですが、そこまで来るともう哲学の領域にまで深められたものといえると思います。この通意論という言葉は、台湾の学者の創り出した言葉だそうですが、いい言葉だと思います。現在アメリカでは「コミュニケーション」と呼ばれています。名前が変つたことは、それだけ深いものになったということの意味するのでしょうか。

ところで、私は、意味論についても通意論についても、専門書一冊読んだこともないのですが、それらの学問が志向しているものは、はっきり分ります。昨日福田先生が同じように言葉の問題に触れて話されましたが、全く偶然の一致であり、人生の面白味や不思議さを改めて感

じさせられました。これこそ哲学的思想の一つの大きな流れだというふうにも考えられる。しかしそれはそれとして、われわれは、他人との間に本当の意思の相互交換はできるのかどうかをつきつめて考えますと怖ろしい孤独感に襲われます。しかし人間はそういう孤独感の中で、じつと自分をみつめるといふ生活経験をした上でなければ、哲学の世界に入ることとはできないのだと思います。この孤独感ということは、昨日の福田先生のお話では、もつと激しい言葉、絶望感という言葉で表現されてきました。私自身は、当時絶望感というところまでは行かなかつたが、それに近いところまではいった。こういうことは人それぞれの掘り下げの問題ですから一概には言えませんが、同じ問題に限って見れば、深く掘り下げた方が哲学的には偉いということでしょう。だから、本当に絶望して、俺はもう死のうと思つたりするところまで落ちなければ、本物は出て来ないと言つていいかも知れません。

認識論と実在論

さて次に、認識論と実在論のどちらを先にとりあつかうべきか、今のところ、私には分りません。認識論というのは、人はどうして認識ができるのかということを考えていく学問でしょう。実在論というのは、一体、物が本当に実在するのかと考へてみることです。いづれにしても、およそ実在とは何であるか、どうしてそれを認識することが出来るのかという問題につい

て、若干頭を使つてみるのでなければ、到底、哲学——それが単に経済哲学であつても——の領域に入ることはできないのです。この哲学という言葉の意味ですが、人生とは何だ、俺は本当に実在しているのかといったところへ入つていくのは、哲学らしい哲学だといえますが、経済哲学というような場合は、経済を論じる基礎とか立場とかを吟味することといつていいでしょう。

私の一高時代、もしくは東大にいた頃は、カント哲学全盛時代ともいべき時代で、認識論がすべてであるかの如き言い方がはやつた時代でした。その後の学界がそうでなくなつたのは勿論、いまでは「数理哲学」といつた局部的哲学が非常に巾をきかしてみたり、いろいろ現代ならではの現象が起つています。私の知り合いの娘さんで、イギリスのリードという所で哲学の先生をしている人がありました。その人が数理哲学なので、あなたはどんなことを考えているのだときいてみたら、ドーナツが二つあつて絡まつている、どうやったら抜けるかというようなことを考えている。これが数理哲学だというので私は全くびっくりしました。しかしそういう学界の実際というものは、乱暴な表現をすれば、私にとつてはどうであつても余り変りはないのです。ただ必要なことは、素朴な意味でいいから、實在論、認識論についてある程度苦しみ、頭を使い、めいめい自分なりの認識論、實在論を、及ばずながら或る程度固めることです。そういう基礎を持たなければ、経済哲学も論じられないのです。だからといって現

代哲学の最高峰としての認識論や實在論に余りに多く神経を使う必要はない。ものは深く入るの必要ですが、自分の当面の目的に必要なところで止る、その限度を知るといふことも大切です。いづれにしてもこれらの問題に対する私の立場を一言で言えば、「仏教哲理による解明」といふべき行き方の一端に、私も連らなつてゐるといふことになります。

しかし、仏教哲学的な實在論、認識論で、これこそ本当だといふようなことは、私は言いたくない。私がこのように非常に回りくどい言い方をしてゐるのは、何ごともこうだと断定するのは、その方が間違いだと思ふからです。そして、この行き方に身を置くと、前述した自殺もしかねないような孤独感やどうにもならぬ行き詰りはみな同時に解消してしまふのです。それはつまるどころ、實在と自分の関係が主客顛倒して、自分が主になつて考えていたのが逆になつて、久遠にわたる一体的な大きな實在の、小さいながら不可欠の一部分としての自分が意識されてくるからであらうと思われまふ。自分が中心で世の中に物があるとかないとか生意気なことを言つていたのが逆になつて、向こうの一部分としての自分が意識されてくるといふような心の転向が生じるのです。

ここでは、それらのことに深入りするわけに行きませんが、經濟を論ずるためにも一つだけ言つておかねばならぬことは、およそ社会科学に属する事柄の理解については、「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ東洋の古語を、現実に実践する以外には、よるべき方法はないといふ

考え方に到達するということです。これが私の實在論的、認識論的思索の帰結です。具眼の士には、「一葉」で事は足りるのです。資料は余りいらぬ。なぜか。それを解くのが實在論、認識論の課題なのですが、要するに實在とはそのようなもの、認識とはそのようなもの、常にその一部によつて意識もされ代表もされているものだからです。例えば或る人が田舎から出て来て、東京を見たという。その人が見たのは、勿論のこと東京の一部のまた一部でしかあり得ない。しかも、その人は確かに「東京」を見ています。このことを悟らなければ自分というものが貧弱で貧弱でたまらなくなるのです。別の例でいえば、遠くから地球をみたら、それは球形の存在、いかにも地球の名に値するようなものでしょうが、近くによつてみれば、海と陸とがあるに過ぎず、もつと近くよれば、陸には山と川と市街と畑があるに過ぎないということになります。どこに地球があるか、というわけです。

そんな次第で、たまたま時あつて、その或る人の眼に映つた東京なるもの的一部、或は地球の一部に過ぎない畑のまた一部である麦畑なら麦畑が、すなわち「東京」であり、すなわち、「地球」であるわけです。その「たまたま時あつて」とは、どういう時かを、よくよく噛み分け、分析自覚してみますと、「一葉」で十分秋は分る。事実それ以外に、秋のわかりようはないのです。勿論春にも葉の落ちることはありますが、それをみて秋と思つたとすれば、その場合その人は「たまたま時あつて」という条件にのらなかつた人、つまり「具眼者」ならざる

ものであつたといふことになるのです。これが経済哲学を展開するに必要な方法論の基礎になる实在論、認識論です。

一葉落ちて天下の秋を知る

仏教哲理的諸認識の中で、なぜ私はこの「一葉の問題」だけを取り出して重くいうか。それはいま申したように、この一点に私が是とする社会科学の方法論がかかつているからです。そして今の経済学は、一般に社会科学がそうであるように、自然科学のメトードに押されているが、それではいけないのだ、と考えている私の経済哲学上の根本主張が、この一点によつて解明されることになるからです。そして、そういう考え方が帰着するところは、資料集めも必要ではあるが、それよりも自分の眼を養え、といった主張になるのです。眼のない人によつて集められた資料は、むしろ邪魔にこそなる、といった考え方も、そこから出て来る。経済学者はファクトとか統計とか言つて騒いでいるけれども、私から見ると、それを見る目がないから分らない。分らないからこそ騒いでいるのだと思います。目が本当に養われたら、どんな小さな現象もみな一葉として価値を持つ、こちらのものを見る態度が本物でないと、どんな対象もひねつて解釈するようになるから、つまらないところに結論を持つていくことになる。

だから、どんな小さな現象から感じとつたことでも、それが全体の中へピタツとおさまつて

間違いないようになるには、自分というものを正さなければならぬ。狹生徂徠とか、新井白石とかいう人はどんな人であつたか知りませんが、江戸時代だつたら、誰か、学者が「こうしたら世の中がよくなる」といつたようなとき、人はまずその学者の人物を見て、彼はいい人間だと思わなければ、決して信用しなかつただらうと思います。というのは、人物がよくなければ、その解釈も曲がるからです。だから全然こだわりのない、宇宙そのもののような心境の人が解釈すれば、ものごとに大抵正しい結論が出て来る。だから何よりもまず自身自身を正しくすることが大切です。自分の社会に処する姿勢というものを厳正にしないと、正しい評論は出来ないと思ひます。昔の学者の態度は皆そうだつたと思ひます。

目を養ふということですが、昔流に言うところが「極意」というものでしょう。それは統計などで証明するわけに行かないことなのです。統計的資料などというものは、自分の考えの確かめに使う材料の一種にすぎない。私は、私のやつている世界經濟調査会の若い人達に言つたことがあります。この先へ行つたら海があるかどうか知りたければ、一寸した丘へ登ればよい、丘へ登らないで、地面の上を走り回つていたら、せつかく海の際まで行つたのに、見えなからそのまま帰つて来るかも知れない。丘へ登つてみればすぐわかるのだが、その丘へ上るといふ芸当がむずかしい。また、次のように言つたこともありませう。世の中を見れば水面から首を出したらどうだ。水の中にもぐつて顔を出さないから、星が輝いたり、日の光がふり

「そそいでいるこの世の中が分らないのだ、と。」

これで、哲学については大体言うべきことはいってしまつたようです。そういう哲学に乗つて、どういふ経済哲学を展開して行くかが、次の問題です。

経済学の位置づけ

これから経済哲学の本論に入るわけですが、経済現象はすべて人間の行為、行動の結果ですが、その人間は「心」を持ち、心によつて行動しているのだから、人間心理の作用を抜きにして経済を考えることは出来ない。だからこそまた経済現象は、それに政治と社会と思想とを加えた人間社会の全体的な理解によつて理解されねばならず、経済だけを取り出して考えては駄目なのです。もしも何らかの目的から、経済だけを取り出して考えるとすれば、そのときはそれは、単なる「仮定上」の理解という「低い位」から上に出ることはできない。本来なら人間社会を全体として考えるのが本当だけれども、特に経済だけを取り出して考える時はいくつかの仮定に立つているのだから、もしその仮定が違つていたら、全体がひっくり返つてしまうというのを充分自覚していなければなりません。こういう議論はすべて学問の位置付けに関することですが、非常に重要なことです。

経済現象には、人間の心が常に関与しますから、それはすべて「歴史的現象」だともいえます。

す。なぜなら同じことはただ一回しか起り得ない。人間の心には、単に一回の経験であつても、必ずそれ相応の変化が起りますから、仮りに同じことが二度起つたとしても、人間の反応は必ず前とは違つてくるはずだからです。こういう基礎認識がいくつか続いて、それが体系的に組織されれば、それが私の經濟哲学になつていくのです。

さて次に、昔アリストテレスという学者は、すべての學問の位置づけをやつたそうです。その体系でフィジックスの上にメタフィジックスというのが来て、その形而上學、哲學というものによつて彼の体系は總括されているということです。私は今の世にそういう仕事をしてくれる人が出ることを熱望しています。今の世の中の學問はその多様化は驚くべきものですが、それを統括すべき任務を持つ哲學はなほだ貧困です。末節的議論にばかり走つて、哲學そのものは行方不明かとさえ感じられます。そういう状況であるからこそ、世界中どこをみても思想の混迷がはなはだしいのですが、その結果として実にまづいことが起つています。というのは末節的技術的に専門化した學問は、本當のところ、それを使いこなすべき綜合的統括的學問に隸属すべきものであるに拘らず、専門家好みという時代の風潮に乗じて専門的學問はその専門性によつて、実にしばしば、他者の上位に君臨しています。つまりこれは從卒が大將みたいに振舞つているということですが、またそれ故にこそ実につまらぬことが世間に頻々と起つていきます。ではそれを直すには、どうしたらいいか。經濟でいえばまづ學問の全体系の中における

経済学の位置づけをやり、次に経済学の中において、各種専門的分野に属する経済学の位置づけを行って、すべてに「そのところを得しめる」ことが必要です。そういうことをやれば、それで「私の経済哲学」は一応完結する次第です。

鍛錬された常識

以上のような経済哲学の構成に加えて私は「余論」という一章をおきたいと思えます。すでに体系を提示した上ですから、この部分で私は言いたいことを一番自由に言える。読んでも一番面白い部分になる筈ですが、一例を挙げると、ミルトン・フリードマンという有名なアメリカの経済学者は「経済学において、予言は可能であるばかりでなく、予言させてみて、始めて学説の当否がわかる」と言っているようですが、それを私は条件付で信じるのですが、そういうことが軽く説明できる筈です。昨日福田さんが「未来というものは、一寸先は闇だ」という実にいい言葉をお使いになりました。分らないところが人生の妙味なのですが、その中において若干の仮定を設ければ、予言も可能なのです。その予言の出来ぬような学問はまだ駄目だと思います。

また、なぜ私は数字を余り使わないか、他の学者の説というものを、殆んど全く引用しないかということも簡単に説明できます。私は生意気だから引用しないのではありません。他の学

者の説というのは本当にはわからないからです。アダム・スミスならアダム・スミスを知るには、彼の人物と著書のみならずその時代も背景も十分に知らねばならない。しかしそれは本当は不可能なことです。結局は自分の観点、自分の角度から見たものになってしまふ。歴史の論述が繰り返えし、繰り返えし、新しいものになるのは、こちらの観点が變つてくるからです。意味論・通意論、認識論等で頭を鍛えた人間には、そういうことがすらすらとわかる。昨日福田先生は歴史に「仕える」という言葉を使われましたが、われわれは自覚すると否にかかわらず、過去の人々の築いたものの上に乗つかつていっているのですから、過去は、実に尊いものです。その過去を自分達は、自覚に乗せて十分にわかるとはいえない。私が過去の学者の名前を挙げて言わないのは、本当は彼らはわからないという謙虚な立場に立っているからです。明治以降の日本の学問はかなり偏向していましたが、外国のことさえ習つて来ればそれで偉い人だったのです。向うの人の名前を挙げる一つのモード、流行であつた。片仮名の名前さえ挙げていれば、大学の先生はそれで間に合つていた。しかし、最近では文化的交流が一般化したから、そんなことでは間に合わなくなりました。学者達も大部困つているでしょう。彼らは逆に、一層閉鎖性を強めるかも知れませんが。

凡そ学問とは、特に社会科学に属する学問とは、「鍛錬された常識」だというのが私の学問の本質論です。自然科学の領域では、この限りではありません。しかし社会科学では、鍛錬さ

れた常識を学識と考えるべきものです。特殊な専門的な知識ではない。その学識が十分に鍛錬されていくかどうかを知るには、ある同じことを、五時間なら五時間でも、五分なら五分でも、私はこう思っていると言えるようであれば、本物ではありません。また体系的に把握され、どこを引く張つても、全体系がぶら下つてくるようなものでなければいけないのです。後進国の話でも、日本のインフレの話でも、ドイツの話でも、どこから話を始めてもそれにその人の世界経済観が、全部ぶら下つて来るようなものを生きた体系と言うのです。勿論いつも全部話すわけにいかないから、途中でちよん切るわけですが、それは丁度絵というものは額縁に入れねば絵にならないのと同じことです。額縁に入れるということは、視界を限ることであり、同時に対象を限ることであるわけです。だから、本当に鍛錬され、本当に身についた知識となれば、自由に額縁にも入るわけです。今日はこの部分だけを話して、あとは知らん顔をしていられる。しかしもしそれを引く張れば、大きなものがつながつていっているといったものがないのです。

すべて知識というものは、どつちにしても本当のことはわからず、わかったとて本当に、それを人に伝えることは出来ないのですから、そこに沈潜して考えて行けば、その事実がしみじみとした悲しい認識として心の全面を覆うことになります。しかし、その認識に徹した次の瞬間は、驚くべき心の解放が行われるのであって、そこでは、言ったり考えたり、およそ言葉に

関することは、実はどうあつても同じことだということになる。そうと知つた途端に、思考も筆も弁舌も、はなはだしく自由なものになります。そのような解放の喜びを味わい続けている学問を、私は本当の学問だと思つてゐるのです。

認識論についての二三の敷衍

すべて事物は独自には存在せず、自他の関係によつてのみ存在すると考えるのが正しい認識であろうと思ひます。序に申しますと、物と事とはあまり區別をしない方がよいのです。事の方が実在しているかも知れないからです。そこで例えば、日本は世界あつての日本でしょう。世界の中に浮かべてみて、初めて日本がわかるという発想を、私は度々使つて来ましたが、この平凡な言葉には、実は深い哲学的な意味があるのです。日本というものは孤立してあるのではなくて、他との関係において始めてあるのです。だから日本という存在は、他の一部と言つてもよいし、全体の一部といつてもいいのですが、ここが、悟りのキツカケというべきところ
です。

言葉というものは厄介なもので、すべての事物は渾然としてそこに存在しているのに、それを、言葉で表現する時は、例えばピアノを弾いているようなもので、一時には一音しか出ないのです。禅宗で言えばイエスとノーは同時に存在しているのでしょう。しかし、言葉ではこの

二つを同時には言えない、だから、言葉でわかるということには、実に大きな限界があるので。そんなことも、改めて深く考えてみる方がいいと思います。

凡ての事物は、他との関係において始めて存在すると申しましたが、その事物はそれぞれ特有の意味を持っています。意味を持つことによつて初めて事物たりうるのだとも言えます。近ごろ流行している実存哲学では、馬は人間が乗るといふ意味があつて初めて馬だといふそうですが、事物すなわち、実在には、常にそのような意味がつきまといつています。しかし馬には勿論人間が乗る以外にいろいろな意味があるでしょう。人間の知らない意味もあるでしょう。ですから馬といふ存在は、一つのようでは決して一つではない。すべて存在とは同時に幾重にも重なり合つたものといふ認識が生れて来て、存在といふ觀念は複雑怪奇、つかみどころのないものになつて来る。このように、見ようによつては幾通りにもなるのが、眞の実在なのでしょうが、それを人間は勝手にあれだこれだときめてかかる。しかしその決めたものだけが実在と考へたら、それは真相を離れるものだと思ふべきです。こういうことをいうのが仏教哲学です。自分で勝手に決めてかかつて、それに執着するからいけないのです。もつとも、そんなことを言つたら、学問は到底成り立たないと言われる方もあるでしょう。たしかにその通りです。

だから、学問には仮定を設けたり、定義を決めたりすることが必要です。つまり、すべての学問は、いくつかの前提を立てて、それが正しいとして進んでいるわけです。但し、忘れてい

けないのは、そうして成り立つた学問は、その前提が真実であった時にだけ妥当するということとです。すべての思考なり判断なりは、数え切れないほど多くの前提の上に立っているわけですが、常にその前提に疑問を持ち根本に遡って再吟味にかける。これが哲学的精神というものです。

ところが、あまり哲学ばかりやって、始終自分の前提を再吟味にかけていたら、自分がちごこまって、動きがとれなくなる。それを打破するには、ゲーテの言葉に「人生をして行動、また行動たらしめよ」(Sei das Leben Tat um Tat!)というのがありますが、哲学をやるには一面猛烈な実行にとびこまなければ、哲学も成り立たない。つまり理屈は実践の裏付けを俟って、始めて生きた理屈となるわけですが、ごく卑近なところに例を求めれば、最近の長期経済計画の破綻にもかかわらず、計画の前提の吟味ということをやらないで、見積りの数字を直せばそれで済むかのように思っている。そういう気分を私は哲学の貧困と考えるのですが、その場合、必要な哲学は、前提の吟味をやるという実践によって、始めて生れて来る、というわけです。

敷衍というものは、やればいくらでもあるわけですが、時間の都合もありますから、一応ここで打切ることにしてしましよう。

質疑応答

問 〆学問としての経済哲学が何故支配的になつていないのですか〰

答 〆これからの私の著書で、それを説明して行きたいと思つていますが、まず君自身それを説明してみたらどうか、というのが私の答えになるのです。いくら質問をしてみても、それがわかる問柄にお互がなつていない時には通じない。ことばが、絶対に通じないわけではない。場合によつては非常によく通じる。だからありがたいのだけれども、その相互の關係が出来てくるまでは駄目ですね。勉強して、苦勞して仕事をしていないと、そういう境地にはなかなか立てないですね。今の学生諸君は、ともすれば誰にもわかる権利があるように思つて、教師に向つてしつかり教えるというような顔をしている。知りたいことは図書館をさがせば、何でも本の中にあるように思つている人もある。しかし實際をいえば、ものを習うには昔のように、自分を全く捨てて、それで本当に教えを受けるといふようにならなければ、本当のことはいくら言葉にしてみても通じるものではないのです〰

問 〆一葉落ちて天下の秋を知るといふことは、昨年言われた総合的直観と同意だと思ひますが、自然科学を学ぶ学生として、いかなる態度で日々を過したらいいのでしょうか〰

答 《さつきもちよつと触れたように、深くものを考えるのはいいけれども、本当は、日々の生活は行動また行動です。自分で自分を鍛えるのもいい。家族の為に尽くすのもいい。自分の生徒を教えるのもいい。いろんな行動がありますね。ともかく実際の行為においては、自分のごく小さな一部を担当することになるのですが、それをやり抜く心構えとして、いろんなことを言つたわけです。その心構え、つまり哲学的理解の方も、本当は実践してみなければわからないのです。自然科学を学ぶ人が私の哲学を聞いたからといって、格別慰めにもわずらいにもなるはずはないでしょう。しかし、何をやるにしても、深く考えるということを知っていれば、それだけのことはあるでしょう。心に煩悶が起るなら、突っこんでいけば必ず解明があるということ、私のしゃべっていることの中に出ていると思いますが、どうですか》

問 《先生の経済学は超マクロ的経済学と思えますが、どうでしょうか》

答 《超マクロ的といつてもいいでしょう。マクロ、ミクロということ、みんなわかつたようなことを言うけれども、何がマクロで、何がミクロだか、分っている人は仲々いない。だからこういうことばにとらわれて考えない方がいいですね》

問 《部分と全体、自と他ということについてももう少しお話して下さい》

答 へこれは、もつと話してあげたいけれど、果してしゃべってわかる基盤に諸君が立っているかどうか疑問です。自分で考えなければ絶対に駄目ですからね。或る人の言った言葉で、すこぶる下品なことばですが「自分の糞は自分でりきめ」というのがあります。わかりますか。これはどうにも人にたのむわけにはいかないのです。私は教える立場でここに立っているけれども、本当はあなたの方が自分で考える外はないのです。この下品な言葉は、一度きいたら絶対忘れないだろうと思って、お伝えしたわけです へ

問 へ自分を小さいながら不可欠のものと感じるのは、先生の仏教的思索に基くものでしょうか。また孤独感が解消してしまふという境地には、どうしたら到達できるでしょうか へ

答 へ講義の中で、実在と自分が主客顛倒すると申しましたのは、自分が小さくなることじやないのです。対立してみているから自分が小さいのです。自分を向うに投入した時、自分が逆に大きく見えるのです。実に小さなものの中に、大きなものが入る。例えば、自分の目玉を考えてごらん下さい。自分の目玉一つに、森羅万象が入るのですからね。自分の目玉ではよく分らないなら、人の目玉を見ればよい。星を見ている人の目には、何億光年前の光が入っているということ、よく考えながら観察してみることです。そうすると、自分は非常に小さいと同時に、いくらでも大きなものとも思えるのですね へ

問　　△先生は岡へ登るとか、水面から顔を出せとか言われました。そういう立場から経済的行動を見つめておられるのだと思いますが、具体的に言つて、それからの行為はどうすることなのですか。またそれが仏教で言う悟りの境地に達することを意味するのでしょうか▽

答　　△悟りは悟り、行為は行為ですね。悟った心持で行為をするのです。具体的にやるとどういう行為になるかという、いま、私は日本経済の動きを見て、それが正しいかどうか考へて、間違つた方向に行かないように、全力を尽しています。それは私の全活動を見て下さればわかるので、同じことを悟つた人でも、その人の持ち味、おかれた場所、その人の人生によつて違うことをおやりになるでしょう。それで一向差し支えないのだと思います▽

問　　△先生のお話を聞いてみると、先生自身が一個の大きな目玉のように見えて来ました。このような大きな目玉を作るにはどういう生活経験があつたのでしょうか▽

答　　△私は本当の自分の精神生活の経験を人にしゃべるのはいやですね。わかつてもらえないからです。自分だけが持っている悲しみもあれば苦しみもあるわけです。人間は本当に悩むとしゃべれなくなるものです。例えば戦後シベリヤから帰つた人などは、シベリヤ生活については殆んど無口ですね。あまりにも辛かつたし、己れを失つたような奇妙な精神状態だつたのですね。そのつらさというものは、人には話しても分らないということが、あの一種の静かな

無口な彼らを作ったのだと思います。ニーチェの言葉に “Das tiefe Leiden macht vornehm
Es trennt.” というのがあります。 “深い悩みは人間を高貴にする。それは人を切り離す” と
いうことですが、本当に悩んだ人というものは、どこか犯し難いものがでてくる。深い悩みは
人と人との間をセパレートしてしまふのです。他との交流を一層困難にするのです。そういう悩
みは滅多に言う気がしないので、何年でも黙っている。そして平常はなるべく気楽な顔をして
いるわけです。

問 《すべての学問の根底となる哲学自体に種々の学派が存在することは、どう考えたら
いいますか》

答 《どう考えたらいいかと言つたつて、それは当り前と考えたらいいのです。私の思つて
いることは、人と共通する場合も実に多いけれど、何学派に属しているわけでもなく、自分自
身のものです、自分自身そう考えざるを得ないから考えているだけの話です。ですから、人間の
数だけ学派がある、といつてもいい》

問 《学問としての哲学の限界と宗教との関係をどうお考えですか》

答 《これも、一言では考えられません。宗教という言葉を吟味なさることをおすすしめしま

す。既成宗教はいろいろあつて、宗教というものがいろいろの言葉でとらえられるから、ごたごたしているのです。宗教という言葉で自分は一体何を考えているのかというふうに考えてゆくと説明されてくると思います。》

問 《何故資料を集める必要はないのですか。読書をする必要はないのですか。事象分析をする必要はないのですか。もう少し説明をして下さい。》

答 《私は資料を集める必要がないと言つたわけではない。資料がなくても済む場合が多いと言つたのです。また資料を集めたら、それでもものが出てくるというのは、明らかに誤りだといつたので、資料は必要なのです。あれば結構なのです。それにとらわれなければ。しかし資料集めだけで力を使い切らない方がいいですね。私もいい資料があれば、勿論使います。しかし、先程も言つたように、資料というものは、何か直観的判断で出たものを確かめるために使うので、それが学問というものは鍛えられた常識だと言つた根拠なのです。漠たる観念で、ボウツと分つて来る場合が多い。確かにこうだとは思ふけれども、本当にどうかは自信が持てない。そんな時に資料があつたら使う。別の資料が出て来たら、それでも確かめてみる。外国の例があつたら比較しても見る。昔の例があつたらそれとも比較して見る。各方面から吟味にかける。しかし資料もいいが、資料にとらわれると言つてゐるわけです。》

問 《先生の見方は結局仏教の空観だと思いますが、どうでしょうか》

答 《諸法無我という言葉が仏教にあります、この「法」というのは「事物」という言葉に近いと考えていいでしょう。あらゆる事物に我はないのだということになります。「ある人が真理とするものは狭い基準の中だけであつて、その脆弱な基準を壊して見ると、絶対的真理などはない。ただあるものは真如だけである」といったようなことがいわれるのも、同じことでしょう。質問に空観とありますが、それは絶望感みたいな、どん底に落ちて、そこから直すというようなことと、脈絡があるので、一切は「空」だというようなことを感じ得なかつたら、「実」もわからぬのだと言う逆説も成り立つでしょう。しかし仏教の言葉を使うのもいいが、それにとらわれるのはよくないと思います》

問 《どうやって「具眼の土」になるのですか。どうやって「岡に登る」のですか》

答 《それはめいめいの工夫ですね。私はいろいろやらざるを得ないから、止むを得ずやっているうちに、登つちやつたような感じですよ。登つてしまえば、人のように手数がかからないし、いろんな事もやれば、ちゃんとやれるし、予想を立てれば大体当るし、これで結構だと思つています。しかし、うっかりこれでいいと思いつたら、それは仏教という奈落の底へ落つこちることです。ちよつとでも、慢心を生じたら、どん底に落ちるので、油断もすきもありま

せん。私が自慢話みたいなことを平気で言うのは、そんなことはどうでもいいつまらぬことだと思つてゐるからで、私の自慢は本当の自慢じゃないのです。普通の人は実利をおさめるために謙遜という衣を着ているのですね。それが嫌だから、私は随分乱暴に自慢話などもしやべるのです。》

問 《ご講義の後の方で「どつちにしても本当のことはわからず、わかつたとして本当にそれを人に伝えることは出来ないのだということが、しみじみと悲しい認識として心の全面を覆うことになります。しかし次の瞬間は」とおっしゃいましたが、「次の瞬間」とは具体的にどういう時なのですか。》

答 《これは大変結構な質問なのですが、そういうのがわかるのが悟りなのですから、それは言葉で言わない方がいいでしょうね。言えもしない。言葉で言ったら、実体が霞んで消えてしまいます。そういう実感をつかむほかはないのです。「次の瞬間」のことを考えるより、まづもつて本当の淋しさを味わうところまでくることをお勧めします。》

問 《一葉でものがわかるのは結構ですが、それは具眼の士にだけあてはまるので、ぼく達には無理なのですが、どうすればいいでしょうか。》

答 〆それは我慢するよりほかに仕方がありません。あなた方がまだ駄目なのに、偉くなつたら出来るであろうことを、こうしたら出来ますよと言って、簡便法を教える義務は私にはないのですから。こういうことには簡便法はないのです。いわゆる簡便法ほどつまらぬものはない。具眼の士にどうしたらなれるか。それは苦勞することです。また具眼の士になつたら、予言も出来るし、ものもよく分りましょう。しかし、そういう利益が目的になつてはいけません。そうなるプロセスが尊いのですから。そのプロセスが自分を作つていくのです。だから、もし次の世があるなら、そこへ持つていけるようなものを、心に蓄えることをおやりになればいいのです。財産を集めたり、権力を獲得したりしても、墓場の向うに持つていけないでしょう。具眼の士になつて、大いに予言したり、評論家で偉くなつたり、そんなことはどうでもいいので、そうなるプロセスの間に得るものが大切なのです。

問 〆一葉落ちて天下の秋を知るといふことで、これからの天下の動きを予想して下さい。

答 〆結構な御質問ですが、それを私は方々でしゃべつてゐるし、昨年 of 合宿記録「日本の回帰」にもかなり書いています。私が予想しているような世界秩序というものを、人類は作らざるを得なくなつて作るだろうというのが私の観察、予想です。私がそう思うのは、いくつかの「一葉」によつてそう思うのです。しかし必ずそうなるかどうかは、私にもわかりません。

いよいよ秋が来たな、くらいは私にもわかるが、世界がこれからどうなるかがわかる境地にまで私が達していないとすれば、この予想は当たらないのですが、こんなことは、屁理屈を言つて言葉のやりとりで決めようとしても駄目だと思います▽

（世界経済調査会理事長）

付 記

木内先生はご講義の中で、自分の哲学の根底には「仏教的哲学」があることに言及された。「実在と自分との関係が、主客顛倒して、久遠に亘る一体的な大きな実在の、小さいながら不可欠の一部分としての自分が意識されて来る」という点に関連して、そういう思想が形成されて来た先生のご体験を尋ねた質問があつた。その質問に答えて、先生は凡そ四百字詰め原稿用紙にして八十枚に及ぶ長さの解答をお話されたが、これこそ先生の学問の極意の解明であつた。先生の比類のない総合的直観、不羈奔放な発想、多方面にわたるエネルギーなご活動等の根底に、一体何があるのだろうか。先生のエネルギーを支えているものは何なのだろうかという、多年の疑問に答えて下さつたものであつた。我々は約二時間に近い時間をいわば先生の体験告白を聞いたわけであつた。そして、われわれは、そのご思想の基底に、法華経のあることを初めて知つたのである。

先生は一年志願兵時代、肋膜炎にかかられ、その療養中に父君が亡くなられた。その供養のため法華経を読み始められ、これまでに十二回通読された由である。先生のお話は、法華経の思想やその戯曲的構想について淡々と論じられたが、随所に珠玉のような言葉が混つて、聞くものに強い印象を刻みこんだ。先生の専攻される「経済学」という学問と、宗教とのつながりもうかがえて、何とかして記録にとどめたいと思つたが、こういう体裁の書物としては不可能なので、残念ながらこの部分は割愛せざるを得なかつた。ここに謹んで先生におわび申し上げる次第である。(編者識)

パネル・ディスカッション

木内・福田両先生を中心に



学生生活はどうあるべきか

国語問題のその後

両講師の講義内容にふれつつ

大学のあり方について

教育の理念について

まとめ

合宿第三日の午後七時から、合宿教室恒例のパネル・ディスカッションが開かれた。このディスカッションは、木内先生が第八回雲仙合宿で最初に先鞭をつけられてから、今年で四回目を迎えた。この方法はディスカッションに登場した講師の意見が、あたかもパネル（鏡板）に映るように判るので、生き生きとした講師の見解が読みとれて、過去三回、参加者に深い感銘を与えてきたのである。

定刻前から参加者は期待を抱いて講堂に集った。七時になると、講堂のステージは木内信胤先生、福田恆存先生を中心に、大学教官有志協議会の上田通夫先生（鹿児島大学教授）、夜久正雄先生（亜細亜大学教授）、国民文化研究会の川井修治（鹿児島大学助教授）、加藤敏治（八代市教育長）、小田村寅二郎（国文研理事長、司会）の三氏、あわせて七人の講師が並ばれた。まず司会の小田村理事長が立った。

国語問題のその後

司会（小田村） これからパネル・ディスカッションを始めるわけですが、それに先だって昨年のパネルで、木内信胤先生、岡潔先生、花見達二先生から、国語問題について相当突っ込んだ意見が述べられました。参加者全員がそれに共鳴し、何とか日本の国語問題をよい方向に持ってゆかねばならないという意見が次々に出されました。

昨年秋東京で国民文化研究会十周年記念の祝賀会を催しましたが、その折に五つの項目をたてて、本会の志向目標を明らかにしました。その五項目の一つに、国語問題に関する私どもの統一見解を示しました。短い文章ですから最初にご紹介いたします。「混乱する国語問題の解決を」という題で、その文は、

「表音主義による国語の破壊を阻止するために、我らは、戦後の漢字制限、新仮名遣いの誤りを断乎として指摘する。簡素化による便利を求めて、漢字を制限し新仮名遣いを採用した結果、戦後の教育を受けた青年男女は古典は固より、戦前の書物すら読めなくなっている。日本の情緒は、正しい文法を知り、正しい言葉遣いが出来て、初めて学び取ることが出来るのであるが、今日その道は、国語問題の混乱の故に閉ざされている。我らは同憂の士と共に、この重大な問題に取組み、全国民の納得し得る解決に向って、全力を傾ける」と記してあります。

そこでこの国語問題に関して、木内先生から先にお話を承ることにしたいと思います。

木内 ここにお越しの福田先生をはじめ、小汀利得さんらが、今から七年前、昭和三十四年に「国語問題協議会」を作られました。この会は、文部大臣の諮問機関である「国語審議会」の間違いを勇敢に正してこられた。議論でも勝ってきて、日本の国語問題は、これ以上悪い方向には進まない所までできているけれど、まだまだ充分とは言えない。それをもっと進めよ

うと思つていたところ、私は今度第八期審議会の委員に任命された。二年の任期である。私はこの委員としてどういう作戦をたてているか。これを今夜は福田先生にも聞いて貰おうと思つたのです。

この審議会について私が心配しているのは、問題の末節に引きずり込まれてしまふのではないかということです。例えば一八五〇字の制限漢字では足りないからもつとふやせ、憲法に使つてある字が落ちてゐる、佐藤総理の「藤」という字がないではないか、今年は丙午ですが甲乙はあつても丙がない、馬があつても鹿がないというような話になつて、「何字加えたらよい」という議論になりはしないかと警戒している。

私が望むのは今までのやり方を全面検討することです。今までのやり方はどういふ意図により、どういう目的を持つて、どういふフィロソフィに立つてなされてきたから、こういう結果になつた、というように持つて行きたいのです。

そこで作戦としては、部会に移すことをなるべくやめて、「総会を何度もやること」「討論の内容を国民の前に示せるように記録すること」などを強調してきました。

それで第二回るときに「国語問題は何を問題点と考えるか、銘々これを持ち寄りましょう。次の会議の前に、文書として提出しましょう」と言ひだしたのです。自分が言ひだしたのだから私も書かねばなりません。私の書くものはまず何が世の中につつたかといふこと、即ち一

種の社会的混乱が起つてゐることを衝きたい。一八五〇字は守られないで、新聞には「佐藤総理」とチャンと「藤」の字を使つてゐる。新聞は一八五〇字よりも遙かに多い。朝日新聞は四〇〇〇字の活字を用意してゐる。だからちつとも制限されてゐない。それに地名の問題があります。また植物学者にとつて杉とか松という字がない。気象学などでも、昔使ひなれていた雲の名前も、ひらがなで書かねばならないので通じない。医学界でも困つてゐる。一般にも学力が低下して、夏目漱石も読めない人間ばかり出てくる。ありとあらゆる問題が起つてゐる。どうにもならないような事態が起つてゐることを問題点として列挙したいと思つてゐる。

みんなも書いて出すでしょうから、それと共に全面検討の方に持ち込んでゆけばいいのではないかと思ひます。

我々の運動が、なぜこんなに進んだかと言うと、世の中に目に見えない応援があるからです。あなたたちもその一翼を担う訳で、国民文化研究会が運動目標の一つに入れて下さつたことなども大きな力です。

小田村(司会) 福田先生どうぞ。

福田 いま木内先生がお話になつたように好転しつつあると思つてゐるのです。八期の委員には木内先生がおはいいりになつたのですが、私も自薦しました。しかし私は札つきだものですから(笑い)だめになつた。それは結構なので、私としては自薦をしても委員にはしてくれないだろ

うと計算してやった訳です。私は本来狙撃兵の役柄でありますから（笑い）どんどんこれからも狙撃しようと思つています。本隊は木内先生を先頭にしてまっしぐらに驍進する。私は本隊が撃ち洩らしたものをどんどん撃つという役割です。本隊とゲリラの両方相俟つてこれからやりたいと思いますので、よろしく願ひします。（笑い、拍手）

ここで国語問題について補足させて頂きます。文部省、それから旧審議会あたりが「戦後の当用漢字、つまり漢字制限、それから仮名遣いの変更、こういうものは国字を変えたのであつて、国語を変えたのではない」と力説するのですが、これにひつかからないよう願ひしたいのです。

例えば一つの例をあげますと、「明瞭」という字があります。「瞭」という字は漢字制限でなくなつています。従つて「明瞭」という言葉は使えないのです。教えられない訳です。文字を制限したり変えたりすれば、国語そのものを変えることになる。文字だけでは済まないのです。

また仮名の場合でも、よく「漢字漢語は同音異義語が多い」と言いますが、これは漢字漢語だけではない。大和言葉も非常に多い。あまりに多過ぎるくらいに多いのです。例えば「きり」と書いても、それはアクセント次第で靄霧の「霧」にもなり、大工道具の「錐」にもなり、ピンからキリまでの「きり」にもなりますし、いくらでもあります。これを仮名だけにして

しまうと、非常に判りにくくなる。こんな例はあらゆる大和言葉にあります。みなさんが一つ言葉をおあげになれば、たちまち同音異義の単語を幾つか並べてご覧にいれる。これは、手品でも何でもないことです。「はる」と書けば、春夏秋冬の「春」、天氣の「晴る」、糊ではるの「貼る」、腫れものの「腫る」、引つ張るの「張る」、いくらでもできてきます。

このようにやはり国字問題は即ち国語問題であることを、充分に心得ておいて頂きたいと思えます。

両講師の講義内容にふれつつ

小田村(司会) それでは本題に入る前に、せっかく両先生がご同席頂きましたので、昨日から今日にかけて行われた両先生のご講義の中に出て来た一見共通と思われる部門と、そうでなかつた部分との比較について、双方からお話頂ければ、私ども一層理解を深められると思うのですが。仮に私の方からテーマを「言葉の機能と認識の方法」とでも名付けさせて頂いたらよろしいでしょうか。先に福田先生の方から……

福田 木内先生は私の言葉に触れながらお話になったこともありますし、また私が話したことと全く同じことを仰言った面もあります。ですから今度は木内先生の言葉を私がなぞつて、申しあげてみたいと思えます。

その一つとして、私が最近日本の古代史を材料にテレビドラマを書いたのですが、その中で論語の「生きてこれを知るは上なり、学んでこれを知るは次なり」という言葉を使いました。大化改新の藤原鎌足が「生きてこれを知る人間」、鎌足や中大兄皇子に殺される入鹿、これもやはり当時の大秀才だったので、これは「学んでこれを知るもの」として芝居の中で書いてみました。

さきほどから、木内先生が「自分の糞は自分でりきめ」と言われましたが、全くその通りで、私の言葉をもつてすれば「生きてこれを知る」ことなのです。この事はあとの大学の問題、学習の問題にも繋がってくるのですが、現在は皆学習するのは学校の中だけで終わってしまうのです。そうではなくて、あらゆるものを一生を通じて吸収してゆくのです。これはいということはないのです。学校を出てからの方が多くのことを学んでゆくのです。だから生きて知る以外に方法はない。さつき認識論のことを言われましたが、やはり行動して認識するよりほかないのです。

もう一つ木内先生の言われたことと関連するのですが、言葉というものは一瞬間では言えないものです。何か言おうとすると時間がかかります。ところが我々が実際にものを認識し把握するときは一瞬間で成りたつのです。哲学の龐大な体系であろうと何であろうと、実は書く前に一瞬にして頭にできあがっていることなんです。書くうちにポーンとしていたもの

がだんだん明確になつてゆくことはあります。しかしもともと一瞬間で掴んでいることを、何百ページに亘つて書いてゆく訳なのです。言いたいことはただほんの一つの言葉があればいい訳なんです。

例えば名詞というものがありません。これはいくつかの主語、動詞などの積み重ねによつて一つの名詞になる。バラならバラということも、これを分析すればいろいろ定義づけが行われます。それと同じように最高の哲理はたった一言で言い現わせる。それを昔の人は「道」とか「愛」とか「慈悲」とかの言葉をもつて言つたのです。それを言葉で分析してゆくと限りがない。きりがなから、わかる奴は判れ、わからない奴は判るなという、今朝の木内先生のご講義で、暴言ともとれる発言となつてくる。

ですから禅宗などではそれを「馬の糞」と言えばそれでいいんだ。「馬の糞」だつて何だつて構わないというような考え方が出てくる。もつともそれが度を過すと野狐禪になつて、なんにも分析もしないし判りもしない癖に、何か一言言つて鬼面人を驚かしてそれで済ませるといふ悪い傾向も出ないではありません。

それから最後に一つ、私が講義の中で「絶望」という言葉を使いましたが、その言葉が、シヨッキングだったと見えて、あとでいろいろ問題が出たのですが、やはり木内先生は私より一〇才ばかり年長であるだけに「孤独感」という非常にやさしいお言葉を、お使いになつ

た。私はやはり狙撃兵ですから(笑い)「絶望」というような、人をグサリと刺す言葉を使つた訳なんです。「絶望」と言うのは望みを絶つことですが、昔から不死鳥という伝説もある位で、自ら火の中に身を投じて生れ変るといふことがあるのですから、「絶望」でも決して悪くないと思うのです。

小田村(司会)　ただ今の福田先生のお話について、木内先生何か：

木内　結構に拝聴しました。一言付け加えれば、まず何としても皆さんがファイトを燃やしてほしいですね。自分相手でもいいし、周囲を相手でもいい、そうしないと本物は出てこないですからね。もちろん静かな生き方も、激しい生き方もあるでしょうが。とにかく自分を、ディベロップして何かやらなければだめです。

大学のあり方について

小田村(司会)　それでは先に進ませて頂きます。「学生生活はどうあるべきか」という課題の中で、一番ビビッドな問題は、いま木内先生が言われたように、自己を開発して実行するということにあります。この主題に入る前に、日本の大学教育そのものについて、各先生方はいろいろご所見をお持ちだと思いますので、大学がどうあるべきかという構想についてご発表願いたいと思います。まず木内先生どうぞ。

木内　いま大学はあんまりひどく狂っちゃって、これをどうしたらよいかちよつと判らないのです。それに大学は全教育制度の上にてきているのですから、本当を言うと教育全部が狂っていると言える。私も早稲田の大学院ですこし教えているんですが、学生は二〇人以下ですから、これはチャンとやれます。しかし日本大学にいる私の同僚は五〇〇人の答案を見るんです。「それは嘘だ」と私は言うのです。見れるはずはないのだから。こんなマンモス大学など嘘の塊りみたいなものです。その嘘のなかで大事な青春が失われて行くのですからみんな自分では気がつかないような妙な気分になる。だからちよつと火をつければ、早稲田のよいうな事件にもなるのでしよう。これをどう直したらよいか。

今日も話したように基盤を揃えなければ具体策など言えません。それを司会者の方から敢て言えと言われるなら、まず目的が混乱している点から指摘せざるを得ない。人間を作るのか、知識を与えるのか。それどころか大学の経営者達は赤字を出さないようにという事しか考えない。まったく目的意識の混乱というよりはかない。

明治の時代は外国に負けなために、彼らに追いついて、彼らと対等になることが目的でした。だからそれに必要な人間を作り出すという国家目的が明瞭にあつたので大学もしつかりしていた。だからこそ国家が金を出す理由もあつた。ところが今はそれが無い。銘々が勉強して、それがよい生活を保障するなら、それもいいですが、そういうものに対してまで国

家が金を出さねばならないものか。そこをはつきり整理しなければなりません。

小田村（司会） どのように整理したらいいか。その実行案について……

木内 実行案を考えろと言われれば別に構想をたてますが、観念的に考えた案を言いますと、大学はやめてしまった方がいいと思うのです。（笑い）肉体の鍛錬を兼ねて普通の常識を与えるものを、今の大学よりもすこし低い所で教える。勉強は、一応そこで打ち切ってしまう。あとは比較的少数の、特にそれを望む人に、文科的な人と、自然科学的な人を截然と區別してそれぞれ専門的な勉強をさせる。この最後のステージを大学と呼んでもいいが、呼ばない方がいいと思つています。大学という言葉は、それだけでバカに偉いような顔をするから嫌いです。

小田村（司会） 福田先生もそういう事についてご意見を発表しておられますので。

福田 私は「潮」にいろいろの建白書を連載していましたが、六月号に「学校制度改革案」を書きました。学校制度の改革案は、本質論から考えたらきりが無い。そこで私は現状の施設その他を認めておいての現実的な改革案を考えたのです。

明治五年太政官布告によつて「学制」が定められました。これは大学区の中に中学校はいくつ、中学区の中に小学校はいくつというように大、中、小と分けたものです。一種の単線教育の考え方です。この方法によれば小より中の方がいいし、中より大の方がいいというこ

とになります。

ところが私はさつき講義の中で「先進国、後進国にとらわれるな、文化はそれぞれ国によつて個性を持つているのだから、それを伸ばすことを考えるべきだ。先進国、後進国はただ近代化の程度によつて分けているだけのことだ」と申しあげましたが、それと同じように、学校の方も小学校だけで終つていい職業もあるし、中学だけで終つていい職業もあります。大学を出なければならぬという職業はごく僅かです。従つて小、中、大という順位による分け方をやめて、国民学校、教養学校、専門学校と三通り作ればよろしい。

国民学校は今より一年早く満五才から、しかし個人差により六才からでも七才でも八才からでも構わないとして八年間位、教養学校は満十三から四年か五年、専門学校は十七才から四年か五年という程度にする。

それから昔の文検制度、専検制度を復活させて、国民学校へ全然行かなくても、国家試験にパスすれば、すぐ上の学校に入れるようにしてゆく。そして専門的に学問をする者は、昔の昌平黌のように学問所を設けて、本当の学者だけがやればよろしい。

それから大学教授のことがりましたが、これも国民学校から専門学校に至るまで齊しく教授ということで、待遇も同じくし、交流も自由にしたらよろしい。

それからこれは「潮」には書きませんでした、教養学校のあとに徴兵制度というものが

あれば、そこで徴兵をやつて、みんな一度肉体的或は組織的訓練を受ける。或は一度実社会に出て企業体で働いて、それから専門教育を受ける方法もよろしい。

木内 私はその案大賛成です。しかし聞きながらたちまち改良案を思いついたので言わして下さい。福田先生の案によれば、今の国民学校で終る人も大分あるわけですね。しかしだんだん、世の中が進歩するにつれて、教養学校に全部入ることになるべきではないかと思うのです。その教養学校が十八才で終るとしても、それを更に延長してもいいと思うんです。十八才が二十才になるとしますね、それに教え方がうまくなり、漢字も沢山おぼえ頭は非常によくなつているので、外国語でも英語ばかりでなく、スペイン語やイタリア語をやつてもよろしい。

それから国民学校や教養学校の先生の待遇に甲、乙がない、そして地方的にもグレード的にも入れ替るといふのも、非常にいいと思います。そこで私は更にこの教養学校に、地域的な入れ替をやつたらいいと思うのです。つまり鹿児島の人是一年間は北海道の教養学校に行つてくるといふように。そうすると日本は非常によくなると思えますね。

その上の専門学校というのは数も少ないし、いろいろなものがあつてよろしい。日立や東芝が持つているようなもの、早稲田のようなもの、というように。その上社会に出てからでもいくらかも専門教育は受けられるチャンスがあるという社会にしたいですね。アメリカなど

はかなりそうになっている。本当の専門知識などというものは、学校で教えられるものではなく、社会へ出てから勉強し直して得るのだということになると、学校を出ることがどうしてもよくなるのですね。

福田 私も賛成します。

教育の理念について

両講師から制度の問題が出し尽された所で司会者は、教育の理念について、他のパネルの講師たちに発言を求めた。

夜久（亜細亜大学） かつての大学令によりますと、大学は「国家に枢要な人物を養成する」ということになっています。これは大学のみならず、高校、中学も将来国家を背負って立つべき人材を養成することが、一番主要な目的であったと思うのです。そのためには国民同士お互いに心から協力してゆくといい気持を、教育の場に於て充分達成しなければならぬと考えます。

その基礎になるのは、やはり自分の学校に誇りを感じ、大学に対する精神的な信頼感を持たせるようにできないだろうかと考える訳です。しかし、それが現実的にはなかなかできない。学生の数が膨大になっていて、真の意味の教師と学生の心の交流が行われない。学生同

士の心の交流も行われぬ。大学内で気持の通じある生活が生れてこないのです。

それをただすためには、ある程度学生数を制限しなければならぬのですが私立大学ではそれができない——こういう悪循環に陥ってしまったって、私たちは一種の罪悪感みたいなものを心に抱きながら、やらざるを得ないというのが現状なのです。

上田（鹿児島大学） 私は今の学生諸君を見ていて、不満なところが二つ三つあるのです。これを参考までに申しあげますと、一つは情操が非常に枯渇しているということです。私は建築屋ですから製図させます。見られた図を書く奴はいやしません。（笑い）製図というのは上手、下手の問題ではないですよ。建築製図というのは工学ですが、そこに若干造型ということも入ってきますから情操が判る。私が担当しているのは三〇人ぐらいですから、全部はり出して批評するのです。もちろん技術的な批評もしますが、そんなことは大したことではありません。ひと言で言うのと、情操が枯れ果てて、人間らしい心情を持っていないんですね。私はそういう自覚があるのかと言つて学生を叱るばかりです。叱るのが職務だと思つていますから。

それから第二の不満は、いやしくも知的生活をやろうとする人間が、何事もインスタントに片づけようとしていることです。自分で考えようとしなくて、すぐどこかこれについて公式でも書いてないかと探す、そんなことは一切やめて貰いたいと思うんです。私は試験の時

に、考えなければ決して答の出ないような問題を出すのです。ですから今までよくできるなどと言われた学生が、私の所にくると一挙にできなくなる。(笑い)できる訳はないですよ、考える能力がないのだから。

ともかく末端技術のごときものは日進月歩で、学校なんかでは教えておれないのです。これは社会に出たらいやでも勉強するに決まっていますから、それができるような足腰の強い人間を作るのが、学校教育なのです。

そして三つめは、エネルギーがだんだんなくなっている。四、五年前の学生に較べて年々歳々教室において学生のエネルギーが感ぜられなくなつた。以上の三つが不満ですね。

川井(鹿児島大学) 私の大学では学則に人格の完成などというキレイな謳い文句が刷られています。これは必ずしも間違いとは言いませんが、非常に抽象的な目標なのです。具体的な生きる目標としての国家というものが明示されないという感じがするのです。

だからといってこのことは条文で謳つただけで解決できる問題ではありません。こういう条文が欠けていることから、戦後の大学人の一般的な風潮を知ることができるといふ意味で言っているんです。

この間の国大協の試案にしても、私の学部で大変にもめました。現代の大学人には国家に対する嫌悪感が恐ろしく強いですから、その試案に「国家」という字を入れることに抵抗す

る。「社会」と言ったらいいだろうという調子なのです。文部省と対決することをもって大
 学人の使命と心得るといふ、中世の大学人的な理念をもっている幾人かの人たちと私は戦っ
 たのですが、なかなかうまくゆかない。まさに絶望的なものを感じました。

しかし必ずしも全部絶望ではないので、私自身はこう思います。

吉田松陰先生に習うのではありませんが、やはり我々の運命共同体としての国家と人間と
 を、体験的に密着させるような人生観を、若い諸君に体得して貰いたい。たとえ少数であつ
 ても、学生諸君と特殊な修練を続けてゆく以外に道がない。

松陰先生の松下村塾にしても、入塾した青年たちの数はたしか三、四〇名でしょう。当時
 萩の明倫館という藩校には、恐らく年に何百人という武士の子弟が学んだでしょう。明倫館出
 身の何千人よりも、松下村塾の三、四〇人の青年の方が力動的に次の時代を支えたことはご
 承知の通りです。私はこうした意気溢れる青年たちと共に、己を磨き他を磨いてゆくのみで
 あると思っています。

加藤（八代市教育長） 私はこの四月に教育長になって痛感したことですが、教育行政機関は
 教育目的を達成するための諸条件を整備することが目的となつています。それでは現代の日
 本の教育目的とは何か。ご承知のように教育基本法の第一条に書いてあります。しかしこの
 第一条は何を言っているのかよく判らない。そこには統一的な教育観というものが無いので

す。

しかし私はここで直ちに教育基本法を改正せよと言いたいのではありません。改正にはそれ相当の方法が必要であり、また相当な期間も必要でしょう。しかし現実に日々教育は行われているのです。もしも誤った、または不十分な教育が行われているとするなら、一日も早く是正しなければなりません。教育基本法は現行のままでも、そこに行われている教育を改正する道を一日も早く発見し改善しなければなりません。これだけは最低ぜひ教えるという共通した一貫性ある教育観が先生たちの間で確認されなければならないのではないかと思います。

ここで司会者は、教育の理会についてこの合宿に参加している現職の教師たちに、発言を求めた。最初に立つた熊本市黒髪小学校の香月教諭は「現在各学校とか教育行政機関などでは教育の目標は書いてある。しかしそれは皆大同小異で『民主的な社会人』という程度のものである。しかしこういう言葉はどんなにでも解釈できる。それに国語、算数、社会、理科、それぞれに皆目標がある。しかし全体的な関連がなく、中心的な目標がない。そこで現場では具体性を持たせようとして『粘り強い子』とか『仲よく力をあわせること』とかいうように、話しあいで決めているのが実情である」と紹介。

続いて鹿児島県立工業高校の押川教諭は

「我々は教師本来の姿に立ち帰って、教育の正常化を期すべく『教師会』を作った。いろいろ努力しているが、校長とか教育委員とか、教育の責任を持たねばならない人たちには、はつきりした教育観がなく、稀にあつてもそれを実践に移すことをしない。日教組に対しても正常化を叫ぶ者に対して、どちらにもいい顔をしてうまく泳げば足りるというムードが支配的である。大体が事勿れ主義で、遊泳術のうまい人が現在の教育界を動かしてゆくという根強い風潮がある」点を、自分のたたかひの体験を通して指摘した。

ここで、司会者は、問題を学生諸君の立場に移して考えてゆくために、この合宿で感じたこと、両講師の言葉に触れて行動に移してゆこうとする決意について発言を求めた。

富山大学工学部三年の岸本君は「現在大学で学生たちが、ベトナム問題とか日韓問題とかを論議をしているが、聞いていて実に空々しい感じがする。日本は今どうしなければならぬかという深い痛感を持たずに喋っているようにしか思えない。その証拠には、そういう大学生たちはひとりとして学生以外の人の心を動かすことができないではないか。果して彼らは中学や高校しか出ない人や、老人の心をとらえることができたであろうか。彼らはむしろそういった人たちから非難さえ受けているのが実情ではないか。国民の一人として国を憂え、一人一人の

心を受けとめてゆこうとする心の姿勢こそ、まず大切ではないか」と訴えたが、続いて都立大の末光君は「福田先生は教育制度の改正について、新しい提案をされた。いまアメリカでもフランスでも、世界各国の大学は皆大きな悩みを抱えている。私は教育行政官となつて、日本の制度の改革にあたりたい」と述べた。

ま と め

司会者はそのほかにも学生の発言を期待したが、時間の関係もあつて、両先生に全体の締めくくりをお願いした。

木内 このパネルで教育制度のことが問題になりました。皆さん方も制度が悪いから思うように行かないで、苦しまれる事がありませんようが、その時この制度の下でいまどうするかを考えると同時に、この制度をどうしたらよくなるかということを考えることです。制度がこうなればいいんだと考えられる人でないと、「その悪い状況下でも俺はこうする」ということが、本当に出てこないと思うのです。それだけの心の余裕がないと、悪条件下から単に逃避しようとする可能性さえ出て来るでしょう。

ともあれいまの大学のありかたのバカバカしさは、明治以来どうにも手の施しようもなく流れてきてこうなっているんですね。そこをよく知れば改革は一ぺんにできるようになる

訳です。現に明治維新の際には、大変革を一度はやってしまったじゃないですか。必要性が出てくれば、わけなくやれるのです。

どなたか教育制度は、アメリカでもフランスでも困っていると言われましたが、日本のようなタイプで困っているのは日本だけです。それでトコトンまで困ればいいのです。何年かかるか知りませんが、ゆく所まで行ってしまうでしょう。早稲田大学のようなあんな事件が起れば起るほど、改革はやさしいのです。すべて事柄は割り切ってしまうえば悲観する必要はないのです。悪くなってくれば、もうじき直るといふ証明です。

考えてご覧なさい。周囲が悪ければ悪いほど、ちよつといいことをしても、非常にいいことになるじゃないですか、非常に悪ければ、それを直してゆくために、川井先生の言われたサークル活動もいいかも知れない。あるいはそういう悪条件下に、俺はこうだったというワ－キング・イグザンブルを作ったってそれは大したものですね。だから自分がしっかりしておれば、どんな境遇にあらうと同じことなんです。順境にあらうと逆境にあらうと同じです。から、どうぞ悪いことを他人や社会や制度のせいにしないうこと、逆境であればこそ自分自身は尚さら励みも出れば、よくもなれるのです。

明治の元勳であろうが、聖徳太子だろうが、ああいう時代だから偉くなったのでしよう。だからどうぞ皆さんの中に「逆境なればこそ偉い人になった」という人が沢山でるように、

また逆境だからと言って押し流される人が少ないように、お願いしたいと思えます。ではこの逆境の時代にどう生きるか、それは銘々の工夫であつて、人に教わることではありません。

福田 いま加藤先生、上田先生、川井先生、夜久先生からいろいろお話がありました。その中の大きな問題を取りあげますと、現代の教育がマスプロ教育だということ、教育目標が失われていることの二つの問題になると思うのです。

その一つのマスプロ教育の問題ですが、これは何も戦後新制大学になつて生じたことではないのではないか。私が大学を出た当時は、大学生の数は現在の四分の一でしたが、既に、その当時の大学をマスプロ教育だと感じた訳です。それから明治二十年代であつたと思ひますが、齊藤緑雨という辛辣な批評家がやはり「近頃の大学はまるでビールを製造するようにガラガラ出てくる」という皮肉を言っています。

ですから、あらゆる時代に、過去を見ると「前はよかつたけれど、今はマスプロも甚だししい」というようになってゆく訳です。ただ今日は緑雨の当時、また私が感じた時代よりもますますひどくなつてゐるのに、それに対する抑制を考へることもしないし、その努力もされてゐないところに問題があるのです。

それでは本当の教育はいかにあるべきか。それは寺小屋教育が一番いいということになります。あるいは松下村塾のような塾教育、外国で言えばプラトンのアカデミア（これも塾教

育)これが一番理想的な教育形態です。私が英文科を出た時は三十五人でした。私は三十五人でもマスプロ教育だと感じたのは、先生とのつきあい方が本当のものではなかったからです。一週間に二時間の講義を受けて、型のごとく試験にパスしてゆけばよかつた訳であります。ですからマスプロか否かは人数の問題ではないのです。たった一人であろうと、マスプロ教育になることはあり得る訳です。

それから戦後特にやかましく言われた教育の機会均等ということですが、これは間違だということなのです。大工はたとい小学校を出ていなくても、名大工です。大学出よりも、もっと尊重される世の中にならなければならぬ。これは教育理念だけでなく、文化理念の問題にもなつてきます。

その次に教育目標についてですが、戦前は「国家」という目標がありました。それを戦後「社会」という目標にすり替えたわけです。さらにこのほかに学問のための学問、いわゆる学問の自由という考え方があります。それで皆さんに反省して頂きたいのは、ヨーロッパでは国家のための学問と学問のための学問が、同時に両立してわけです。それからアメリカでは、社会のための学問ということをおつても、一朝事ある時には、アメリカの愛国心は決して支障を来さない状態にあるということでもあります。

それが日本では、国家のための学問を社会のための学問にすり替えれば、国家がどこかに

吹っ飛んでしまうのは何故か。社会国家に有用な学問というと、学問のための学問という打ち込み方が消えてしまうのは何故か。それは日本人が劣っているからではありません。日本人が西洋流の考え方をお粗末、あるいは誤解して受け容れて、今日に至ってしまったからだと思います。それでは何故西洋ではこうなのに日本ではそうでないのだろうか、という点を反省して頂きたいのです。そうすれば国家のための学問であり、社会のための学問であり、学問のための学問であるという、三つの条件を同時に満足させるような道が発見できるに相違ないと思うのです。

それからもう一つ、もともと日本の教育というのは、過去の文化遺産を次の世代に譲り渡すことが教育の目的であつた訳です。それが戦後アメリカの教育理論を悪用して日本の左翼教育思想家たちが、教育によつて社会を変えるのだ、という考え方に、切り替えたために混乱が起つています。そういう考え方に躍らされた軽薄なる学生諸君が、ベトナムやマスプロ教育を持ち出して騒ぐ。しかし学生諸君はそういう考え方に躍らされてはならない。あくまで私が二つの命題として申しあげたことをよく考えて頂きたい。そういう事を考え抜く場所が学校です。そしてこの最も本質的な事を考えるためには、よき師を求めることが必要であります。現在の学生は恋人を求めるとは熱心ですが、師を求めることに對して不熱心であります。これは大学に入つていながら、大学生たる権利を放棄しているものと言わねば

なりません。

それから本を読むことをお勧めします。それでは本をどう読んだらいいのか。読書は二つに分けられると思うのです。事実を知るための読書と、経験としての読書であります。経験としての読書とは、自分の経験となる読書の仕方であって、木内先生が法華経を十二回読まれたような読み方もその中に入りましょう。この方法は読書そのものが行為です。それをすればたつた一冊の本を読んでも、一を聞いて十を知ることができる。一葉落ちて天下の秋を知る境地は、やはりそこから出てくるのです。やはり読書が経験にならなければ駄目です。事実を知るための読書なら、斜に読んでもいいし、木内先生のような研究所を持っていれば助手を使ってもいいし、計算機を利用してもいいのです。

ところが経験としての読書、経験としての講義に接することは大変なことです。これはよき本、良き師にめぐりあわなければ駄目なことです。その意味ではやはり自分から求めなければならぬ。独学であります。たとえ良き師にめぐり会おうと、やはりこれは独学であります。自ら求めることなき怠け者では、馬の耳に念仏というよりほかありません。(拍手)



日本
の
こ
こ
ろ

聖徳太子の御言葉と

古事記のいのち

夜
久
正
雄



捨の心——聖徳太子

捨身固国——山背大兄王

かなしきいのち——古事記

△本稿は合宿における講義を中心にして、新たに講師によって執筆されたものである▽

捨の心——聖徳太子——

聖徳太子の書かれた「勝鬘経義疏」の中に、「此捨之心即是攝取正法之心」（此の捨の心即ち是れ攝取正法の心なり）という一句があつて、強く心を打たれました。大悲大慈の攝取正法のために身、命、財を捨てる心が、とりもなおさず攝取正法の精神そのものであるというのであります。

「勝鬘経義疏」はいうまでもなく「勝鬘経」に対する聖徳太子の「義疏」すなわち註釈書であります。「勝鬘経」は、大乘仏典の一つで、波斯匿王はしおくの女むすめで、阿踰闍国王あゆせやの夫人たる勝鬘夫人ぶにんが大乗の悟りを開いて仏の現前において説いた教説を骨子としますが、その経の主旨はごくかいつまんでお話しますと次のとおりです。

勝鬘夫人が、大乘への入信をすすめる父母（波斯匿王及び末利夫人まりぶにん）の書面を得て歓喜して大乘への信をおこし、仏の眞実功徳を讚歎する「嘆仏眞実功徳章」から本論がはじまり、大乘を学んで仏の境涯に達するまでの間に必ず実行すべき十ヶ条の誓約、すなわち十の大いなる戒を受ける「十大受章」、さらに自行化他の理想を成就するための三つの大いなる願を発する「三大願章」へとすすみます。つまり帰依・誓約・発願と信が開展するわけです。ここまでは勝鬘

夫人の「自行」すなわち実践のできる信行ですが、夫人はさらに「仏の威神を受けて」――つまり仏の靈感に感応して、勝鬘夫人としては未だ到達できなかった最高の信行である撰取正法について説く「撰取正法章」、さらに「一乗章」へと進展いたします。

この「撰取正法章」と「一乗章」とが、本經の眼目であります。また分量の上でもこの二章が經の大部分を占めております。さてこの「撰取正法」とはどういうことかといえますと、太子は、

「一往撰取正法を積せば能く万行を撰するの心を撰取と為し、所修の善、理に当りて邪に非ざるが故に正と言ひ、物の軌則と為るが故に法と言ふ。」

と説かれ、さらに「而るに此の撰取正法を積すること種々不同なり」と述べられ、諸説を検討なさつて、結論として「八地以上の一念の中に備つさに万行を修するの心を撰取と為し、所修の行、理に当りて、邪に非ざるが故に正と言ひ、物の軌則と為るが故に法と言ふ。」と説かれま

す。

私は仏典についての智識が乏しいので、太子の御言葉を、いまわれわれの使っている言葉に直すのがむずかしいのですが、ここで太子のおっしゃっておられることは、八地以上という菩薩の最高の悟りの世界において、一念の中によろずの行を修め、自他の執着を脱してすべてをひ

としく観ずるのが「摂取」ということであり、その心から発する行が理に合つて邪でないから「正」といい、一切衆生の範となるので「法」というのである、ということでしょうか。これは、現世在世の勝鬘夫人としては、未だ到達できない最高のところで、太子はそれまでの、帰依・受戒・発願の「自分行」に対してこれを「他分行」として区別しておられます。このように平等大悲、真理と現実との完全な一致となる「摂取正法」はまだ勝鬘の到達し得ぬところとして厳密な段階を設けておられるあたりには、太子御自身のきびしい自省の御心があらわれていると拝察されます。こうして勝鬘は「他分行」たる最高の段階に向つて努めるのですが、その姿にこそ太子は人間の真実の姿を発見なさつたのでしよう。

さて、この「摂取正法章」の最後に、摂取正法（法）と摂取正法の人（人）と異るところがないことを述べ、法と人との不離の関連が説かれているのですが、そこで摂取正法の人とは、身、命、財を捨てることによつて、究畢の常住法身を得ると説かれています。この解釈に當つて、太子は、

「八地以上の人正法を摂取せんが為に三種の分を捨つ。此の捨の心、即ち是れ摂取正法の心なり。即ち此の心を以て既に此の行を成ずる人なり。然れば即ち此の摂取正法の心安んぞ此の三種の分を捨する人に異なるを得んや。」

と述べておられます。

私が本文の冒頭にあげた「捨の心即ち是れ攝取正法の心なり」の太子の御言葉は、ここに出て
いるのです。すなわち、「攝取正法章」の眼目であります。勿論、經典の本文も攝取正法のために
身、命、財を捨てる人によつてこそ、攝取正法が実現されることを説いているわけですけれど
も、そこには、身、命、財を捨てることによつて菩薩、大士の得る功德の方に力点がかかつて
いると思われるのに対して、太子は、この「捨の心」の一点に注意され、「捨身」と「捨命」
とを區別して「捨身とは自らほしいままに奴と為るを謂ひ、捨命とは人の為に死を取る」と解
釈する旧釈に対して、「捨命と捨身とは皆是死なり。但意を建つること異なるのみなり。若し身
を餓虎に投ずるが如きはもと捨身に在り、若し義士の危きを見て命を授くるは意捨命に在り。」
と、喝破せられるのであります。「飢えたる虎に身を投ずる」というのは、如来大悲の行で、
飢えて子を食わむとする虎に身を投ずることによつて虎を救つた、という伝説をとられたので
ありましょう。たまたま、法隆寺にのこる有名な玉虫厨子にこの「捨身飼虎の図」が残ってい
ます。私は、そのことは前から知っていたのですが、それは全く偶然のように考えていました。
しかし、いまこの一節を読みますと、それはこの勝鬘經義疏の一節によるものではないかと
さえ思われるのです。すなわち勝鬘經義疏におけるの太子の「捨の心即ち是れ攝取正法の心な

り」の御思想が伝えられて玉虫厨子の絵図として残されたのではないでしょう。太子の御思想の根本が、身を捨てて衆生を救う大悲の決意にあったことがしのばれます。

つづく、「義士の危きを見て命を授くる」という言葉の意味は、必ずしも仏教の教説を以て解釈せらるべきではないでしょう。「論語」子張篇に「士は危を見て命を致し、得を見て義を思ふ」とあるのと関連し、儒教的な用語法かと考えられますので、現実政治におけるますらをの心構えを示されたものと思われます。この「論語」の子張の言葉の意味は、角川漢和中辞典によりますと「国の危急にあたって命を投げ出し力を尽す」とあります。

そう考えてくると、「捨の心即ち是れ撰取正法」というのは、一切衆生救済の正法のために身・命・財を捨てる心であり国のために生命をすてること、——すなわち、決死の覚悟こそ撰取正法そのものであるということになりましよう。イエス・キリストの言葉にも「一粒の麦地に落ちて死なずばそのままにてあらむ、死なばあまたの実を結ぶべし」とあり、また「生命を得る者は、これを失ひ、我がために生命を失ふ者は、これを得べし」（マタイ伝）とある言葉にも通うものと感ずるのです。大慈大悲を念ぜられた太子の御言葉にこの強い捨身の御意志を感じて心の正さるるを思うのです。しかも、ここの義疏の御言葉の中には、黒上正一郎先生指摘のごとく（「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」一六七—一七〇頁）経典本文の「得一切

衆生殊勝供養」について、「語は少しく倒せり。応に殊勝の一切衆生を供養することを得と言ふべし」とされ、經典の本文が、撰取正法の人が「捨財」によつて衆生の殊勝の供養を得るとするに對して、「衆生を供養することを得」と、菩薩の捨財があくまでも衆生のためなることを明かされるのです。かくて菩薩は、自らの苦を忘れて衆生と苦を同じくし永久の努力をつづける人格であることを強調するのです。經典の本文は、撰取正法の人が身・命・財の三種の分を捨てることによつて仏の常住の功德を得るとして、正法の人の功德を得ることを強調しているの對して、太子は、捨の心そのものに力点を置かれるのですから、そこにおのずから太子の現実的実践的情意がしのばれるのであります。道のために身・命・財を捨てる心、その心こそ道であると説かれるのです。言葉をかえれば、自己が生命を託するからこそ道であるわけで、自分自身が全身をかたむけなければ、それは普通の道となることはないといふことでもありません。世に道を説く人は多いのですが、その道のために「身・命・財」を捨てる人は稀であります。

さて、私はたまたま勝鬘経義疏の「義士の危きを見て命を授くるは意捨命に在り」との太子の御言葉を読み、それが撰取正法の根本精神であることを知りましたが、その時おのずから連想せられましたのは、太子の御長子の山背大兄王が蘇我入鹿に襲撃された時、

「豈に其れ戦勝ちての後に方に丈夫と言はむ哉。夫れ身を損て国を固くせむは、亦丈夫ならざらむや。」

と仰せられたと日本書紀の伝えるそのお言葉でありました。

山背大兄王は、聖徳太子の御長子であられまして、当時皇位を継承すべきお一人でありました。日本書紀によりますと、当時の大臣蘇我蝦夷が、推古天皇の崩御によりまして当然皇位に就くべきであつた山背大兄王を圧迫し、大兄王を支持した境部摩理勢を殺して、敏達天皇系の田村皇子を皇位におつけしたとなつております。田村皇子は舒明天皇です。舒明天皇は十三年にして崩ぜられました。そこで皇后が皇位を継がれて皇極天皇と申し上げます。その皇極天皇の二年冬十月、蝦夷は子の入鹿を大臣に擬したとあり、突如として、「戊午、蘇我臣入鹿独り上宮等を廢てて、古人大兄を立てて天皇と為さむとすることを謀る」とあります。山背大兄王が蘇我蝦夷に迫害されて、皇位継承を妨害された推古天皇崩御後から既に十数年を経ておりますが、恐らく世情は、舒明天皇の崩御によつて山背大兄王の皇位継承を予想していたのでし

よう。皇后（宝皇女）が皇位を継承されたのは、先例にもあるとおり、皇位継承予定者のきまるまでの暫定的な処置とも見られます。時に東宮開別皇子ひらかすわけのみこ、すなわち後の中大兄皇子（天智天皇）は十八才になられたところでした。古人大兄は蘇我馬子の女むすめを母とする舒明天皇の皇子、山背大兄王の従兄弟にあたります。

皇位継承をめぐる、この複雑微妙な政治状勢の下で、入鹿の急襲を受けた、山背大兄王は、奴やつこみなり三成らの捨身の奮戦によつて、わずかに難を生駒山にのがれました。時に従つていた三輪文屋君みわのふむやのみきみが「（これから東国に行つて）師を興して還り戦はむ。其の勝たむこと必ず然らむ。」と申し上げたのに対して、山背大兄王が答えられたというのです。

「卿いましがいふ所の如くば、其の勝たむこと必ず然らむ。但だ吾が情に冀ねがふは、十年百姓を使はず、一身の故を以て、豈に万民を煩いたはし勞いたはらしめむや。又後世に於て、民の、吾が故に由りて、己が父母を喪うしなへりと言はむことを欲せじ。豈に其れ戦勝ちての後に方に丈夫と言はむや。夫れ身を損て国を固くせむは、亦丈夫ならざらむや」と。

当時は、今日とはちがつて「皇室典範」のようなはつきりした皇位継承の定めのない時代です。皇位をめぐる皇族、豪族間の争いがたえません。皇位継承をめぐる争いが政治的権力の争奪戦でもあったわけです。おそらく、山背大兄王は、さきに推古天皇の崩御に

際しては天皇の御遺言に従おうとして御自分の立場を主張されたと思われませんが、支持者の境部摩理勢が蝦夷に殺されたりして遂にそれが実現しなかつたので、皇位継承を断念せられていたのではないでしょうか。皇位の継承をめぐる争いが内乱となることは、皇室の眞の精神でないことを身を以て実証なさろうとされたのではないのでしょうか。

推古夫皇がおなくなりになられた時、山背大兄王は、御遺言によつて皇位の継承を強くきびしく主張せられました。その御態度の中には、強大な権力者の蝦夷を少しも恐れられた御様子はありません。ただ、事は御遺言という宮中の秘事になることですので、結局、事実不明ということ、権勢の座にあつた蝦夷の思うとおりになりました。それから十数年間の山背大兄王の御消息は日本書紀には何もありません。恐らく隠然たる道徳的な勢力として蘇我氏を索制しておられたのでありましょう。十数年を経て、舒明天皇がおなくなりになられた時、蘇我入鹿が古人大兄を皇位におつけすために山背大兄王を急襲したという記事が、山背大兄王が、当時無視できない存在であつたということを示しています。恐らく蝦夷は先の皇位継承についての専断の罪を糾弾せられるのを恐れて、山背大兄王から一種の沈黙の威圧を受けていたであらうでしょう。それが、子どもの入鹿の時代に入るやいなや、軽卒な入鹿の暴挙となつてあらわれたのでしよう。

山背大兄王の御言葉は、言わば一種の敗北主義ともとられます。しかし、それは山背大兄王の「其の勝たむこと必ず然らむ」という御言葉を信じての結果論であつて、山背大兄王の守ろうとせられたのは、「一身の故を以て豈に万民を煩はし勞はらしめむや」という御言葉にある国民同胞憶念の御情意であつたのです。皇位継承の内乱を起すことは皇室の精神ではないといふことを、山背大兄王は身を以てお示しになりました。そのために、身命を捧げられたのでしよう。

日本書紀は、この御精神をたたえて次のように記しております。

「……山背大兄王、三輪文屋君をして、軍将等に謂らしめて曰く、吾れ兵を起して入鹿を伐たば、其の勝たむことうつなし（定之）。然るに一身の故に由りて、おほみだから百姓を傷り残そこなはむことを欲せじ。是を以て、吾が一身をば入鹿に賜ふ。時に五色の幡・蓋・種々の伎楽、空に照り灼りて寺に臨み垂れり。衆人仰ぎ観て称嘆しぬ。……遂に入鹿に指示す。其の幡蓋変りて黒雲に為れり。是に由りて入鹿を見ること能はず。蘇我大臣蝦夷、山背大兄王等がすべて入鹿に亡ぼされぬと聞きて、いか嘖り罵りて曰く、噫、入鹿、極めて愚痴かたくなに、專に暴悪を行ふ。いましが身命も亦殆あやふからずや。」

右の文中の山背大兄王の御言葉、「吾が一身を入鹿に賜ふ」は、先の勝鬘經義疏の太子釈の

「身を餓虎に投ずるが如きはもと捨身に在り」の御言葉を連想せしめないでしようか。

これについて竹山道雄先生は「古都遍歴——奈良」（新潮社刊）の「玉虫厨子」に次のとおりに書いておられます。

「左側の捨身飼虎の図は絶対的な慈悲の自己犠牲の話である。釈迦が前世で薩埵王子だったとき、七匹の仔をつれた母虎が飢えて、自分の仔を食おうとしているのを見て、これを憫んで、崖から身を投じてわが身をもつて虎を養った。——このような話はわれわれにとっては空想的な説話にすぎないが、かつては内的生命をもって人の心に呼びかけていたのであったろう。『これをもつて、わが一身をば入鹿に賜ふ』とて、眷族もろともに自決した山背大兄王は、つねにこのような呼びかけをききながら、人となったのであろう。そしてまた、大化改新の理想主義には、このような心的契機が、つよくはたらいていたにちがいない。過去の歴史のすべてを現代人の気持から類推するのは、平板なことである」と。

竹山先生は、玉虫厨子の捨身飼虎の図から山背大兄王の最後のお言葉をおもいおこされたのでしよう。いま私は、勝鬘経義疏の太子の御言葉から、山背大兄王の御言葉をおもい、また玉虫厨子の絵をおもいおこしたのです。私の連想が必ずしもひとりよがりのものでないことがわかっていただけるでしょう。山背大兄王の御最期が、父太子の御精神と御言葉とに殉ずるもの

であつたことを誰が否定しえましようか。

日本書紀は、この山背大兄王の悲劇的な御最期を、菩薩の入滅・昇天にたとえて「時に五色の幡・蓋・種々の伎楽、空に照り灼りて寺に臨み垂れり。」と、かなしくも美しく描写したのです。これが大士・菩薩の最期であつたといふのです。「丈夫」——ますらを——という言葉は、例えば薬師寺にあります例の仏足石歌の一つに、応現の釈迦如来をよぶ言葉として用いられていることから察せられるように、大士、菩薩の精神を以て現実国家国民生活に苦闘努力する人物の自覚として用いられたのでしよう。父太子の御精神を実現して自決せられた山背大兄王の悲劇的な御最期の意味を入鹿は遂に理解できませんでした。

日本書紀は、この山背大兄王の記事から数行をへだてて、時間的には約一ヶ月を経て、「三年の春正月の乙亥の朔に、中臣鎌子連を以て神祇伯かむつかさのかみにめ拝す」と書かれてあります。そして、軽皇子（後の孝徳天皇）と中臣鎌子（後の藤原鎌足）と中大兄（後の天智天皇）との連絡が記され、蘇我氏討伐の謀議がすすめられています。日本書紀は、山背大兄王一族の死によって、日本の新しい政治への道が開かれたと語っているものと思われまゝ。死を以て示され、宇宙を莊嚴して、示現された大悲の皇室の精神が、大化改新の根底となつたことを日本書紀ははっきりと示しています。それは、太子から伝承された一貫した精神思想ということが言えましょ

う。歴史は人間の生活ですから、つめたい条件の必然的な組み合わせではありません。あたたかい血の通った人間のいのちをかけたいたなみによって守りつたえられてゆくものであることを山背大兄王のかなしい御最期は示しているのではないでしょうか。

かなしきいのち — 古事記 —

山背大兄王によって示された、この捨身固国の精神思想は、遡って古事記、日本書紀に描かれ、また万葉集の歌と心詞とにうけつがれております。

古事記のヤマトタケルノミコトの英雄的悲劇的御生涯の伝承が、その典型といえましょうが、その中にあるオトタチバナヒメの御最期はその心を最も美しくまたかなしく伝えるものです。

「それより入り幸いでまして、走水はしりみづの海を渡りたまひし時、その渡わたの神、浪を興むねして、船を廻めぐらして得進えみ渡りたまはざりき。ここにその後きさき、名は弟橋比売命おとたちばなひめのみこと白ましたまひしく、

『妾あは、御子かに易かりて海の中に入らむ。御子は遣つかはさえし政まつりごとを遂とげて覆奏ましたまふべし。』とまをして、海に入りたまはむとする時に、菅すが疊八重、皮き疊八重、絶きぬ疊八重を波の上に敷敷きて、その上に下りましき。ここに暴浪あらなみおのづか自ら伏なぎて、御船え得進えみき。ここにその後歌ひた

まひしく、

さねさし 相模さかむちの小野そのに 燃ゆる火ほの中なかに立ちて 問ひし君はも

とうたひたまひき。故かれ、七日の後、その後の御櫛海辺に依りき。すなはちその櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。」(岩波文庫、倉野憲司博士校註「古事記」一二三頁)
文中の「覆奏」は一般にはカヘリゴトマヲシと訓んでいます。

「それより入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷等えみしどもを言こと向け、また山河の荒ぶる神どもを平和やはして、還り上り幸さいでます時、足柄あしがらの坂本に到りて、御糧食みかれひをす処ところに、その坂の神、白き鹿かに化なりて来立ちき。ここにすなはちその咋くひ遺したまひし蒜ひるの片端をもちて、待ち打ちたまへば、その目に中あたりて、すなはち打ち殺したまひき。故、その坂に登り立ちて、三たび歎かして、『吾妻あづまはや』と詔りたまひき。故、その国を号なづけて阿豆麻あづまと謂ふ。」(同前、一二四頁)

東西遠征による国家統一という民族的使命に邁進せられる夫君のヤマトタケルノミコトのため、一身を捨てて海神のいかりをなだめられたのでありましょう。その最期の御言葉の何とおおしくもかなしいことでしょう。そして、その最後の御歌には、夫君への限りない感謝と愛情とがあふれていて、その精神は既にこの世のへだてをこえて永遠の世界にかけりゆくかに思

われます。

こうした事実と、またその事実をつたえるこの伝承とは、民族のころといのちをつちか
いそだてたにちがいありません。太子の「捨ノ心スナハチ是レ撰取正法ノ心」という御言葉さ
ながらの表現ではないでしょうか。

また日本書紀の山背大兄王の「捨身固国」の御精神と御行為に通うものとしては、既に古事
記にウヂノワキイラツコの伝承として残された伝承があります。

古事記によりますと応神天皇は御生前三人の皇子方に次のように仰せられたのです。

——「大山守命は山海の政をせよ。おほさきさぎのみことをすくにまつりこと
宇遅能和紀郎うぢのわかいらつ
子こは天津日繼あまつひつぎを知らしめせ」と。（前出「古事記」一四一頁）ところが、天皇がおなくなり
なりますと、御長子の大山守命は、「天皇の命みことに違たがひて、天の下を獲えむと欲おもひて、その弟皇子せとみこ
を殺ころさむ情こころありて、竊ひそかに兵つはものを設けて攻めむとしき」というのです。そこで大雀の命（後の
仁徳天皇）は、その兄君の戦闘準備のことをお聞きになって、使をやつてそのことを弟皇子の
宇治うけの若郎子わかいらつこにお告げになられました。若郎子は驚駭されて、謀略を設けて兄皇子を水中に墮
し入れてしまいました。その折の、若郎子の御歌というのがありますが、苦悩にみちた御歌と
思われます。

そして、その後、宇治若郎子と大雀命とは、「二柱、各天の下を護りたまひし間に海人大贄あまを貢りきたてまつ。ここに兄は辭びて弟に貢らしめ、弟は、辭びて兄に貢らしめて、相譲りたまひし間に、既に多の日を經き。云々。然るに宇遲能和紀郎子早く崩りましき。故、大雀命、天の下治らしめしき。」(前出書一四九頁)とあります。

古事記は、応神天皇の御代に、百濟国が、賢人和邇わにきし吉師という人に論語十卷千字文一卷併せて十一巻をつけて、貢上つた、と記しております。日本書紀はこの間の兩皇子の美德を儒教的の言辭で修飾し、最後に、太子すなわち菟道雅郎子うぢのわかいらつこが、「我、兄王の志を奪うべからざるを知れり。豈に久しく生きて天の下を煩はさむや、とのたまひて、乃ち自死みをほりたまひぬ。」(朝日新聞所蔵版六国史卷壹「日本書紀」上、二二三頁)となつています。

中国大陸の王室の慣習と儒教道德との流入は、当代日本の支配階層に大きな思想的動搖を与えたであります。宇治の若郎子の物語も、日本の皇室が儒教倫理を攝取して皇室の政治道德を確立してゆこうとする上におこつた事件であつたと思われれます。皇位をゆずりあうという形で、国民全体の幸福が念願されているわけです。事實は果して日本書紀のごとくであつたかどうかわかりませんが、「自死」して民族の平和を守られたという宇治の若郎子を語り伝えた伝承には、山背大兄王の「捨身固国」の思想の先駆がみとめられましょう。宇治の若郎子を神

としてまつる宇治神社が宇治川のほとりに今日まで伝えられておりますのも、国民のために命をささげるといふ、こうした皇室の御精神を仰ぐ心のあらわれでありましょう。

古事記にはさらにさかのほつて、イザナギノミコトの条でイザナギノミコトが黄泉醜女よもつしこめに追われて黄泉よみの国から逃げてこられる時に、桃子もものみに助けられて、

「汝、吾を助けしが如く、葦原中国にあらゆる現うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて思うれひ惚なやむ時、助くべし」(前出書二七頁)

と告げて、意富加牟豆美おほかづみの命みことという名をお与えになつたと伝える伝承の、ミコトの御言葉にもる切実な同胞愛は、大慈大悲の仏教思想のものと姿を示すものともいえましょう。

ヤマトタケルノミコトが、その最期を覚悟されつつ、

「命のまたけむ人は、たたみこも平群へぐりの山の、くまかしが葉をうづにさせ、その子」

と生き残るものの幸福をいのられた切実な気高い同胞愛もまた、大士、菩薩の心境に通うものがあるといえましょう。

皇室を中心とする同一国語民族としての日本民族の同胞愛は、儒教、仏教という大陸の理想にふれて、高められ浄化されて、太子の御思想として表現されたのです。そしてその理想はまず皇室の精神として形成され、やがて民族全体の思想となつたものと思われれます。天皇制国家と

いい、天皇という文化的存在は、勿論太子以前からの存在であるには違いありませんが、太子を中心とする大陸の仏教、儒教の摂取によって、本質は高められ浄化されて、大化の改新による、いわゆる天皇親政の統一国家となつて、さらに、その光輝を発するに至つたのであります。稿をおえるに当つておのずから心にかんでくるのは、三井甲之先生の遺歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

という歌であります。

(亜細亞大学教授)

自己克服

戸川尚



緑の奥に

「像」ということ

地藏菩薩

宗教、科学、芸術、道徳

有限と無限への参与

ソ連の変貌

緑の奥に

さきほど、諫早へ着きましてバスでまいる途中、あの千々石湾のあたり、窓から景色を見ていますと次第に緑がさえてきていました。山に上つて来ると、同じ緑にも随分種類の多いことが都市と異つて新しく感じられます。日本の緑も大したものだと改めて感じさせられました。実は私、去年七月頃フィンランドで、生まれて初めての緑を見ました。あんな北国へ行きますと緑というのは、五、六、七、八月しかない。八月ももう二十日を過ぎると一挙に緑のままに落葉してしまいます。従つて緑の時期は正味三ヶ月あまりしかないのです。北国では草木が自分の持ち前の一切の緑なるものを全能力をあげて、たった三ヶ月あまりの間に集中して示す。従つて想像を越えた緑の多様性ぶりです。

今こうして目前の一本の木を見ただけでも緑の濃淡五種類や十種類は言えるかもしれませんが、同じこの笹の葉の緑でも随分味わいに差はありますが、いま言ったような北国へいきますと、まるでこれでもか、これでもかといわんばかりに、持ち前の天然の緑を、底の底までわずかな時期に集中して現象させるのですから、まさに「緑の神秘さ」にうたれるのです。

そこで皆さんと共に考えたいのは、この緑、一体この自然の緑の拠つて来たる所以は如何に

ということ。緑というものを出させる本源は何処。考えて見れば不思議ですよ。生物体の素元たる葉緑素というものの正体は。生物体と密接不可分のそれ、その葉緑素があるから緑ですが、これが沢山あるのか少くあるか、要はこの葉緑素という神秘的力の営み。なぜ葉緑素が出来るのか、生物体の大もとをなすか。お互いに菜っ葉を食う、米を食う、草を食った鳥獣の肉を食う。考えてみれば、葉緑素の働きのなしたエネルギーの集積がめぐりめぐって皆自分達のエネルギーになつてゐる。生命の本源をたずねようと思つたら案外この葉緑素の研究と云ふところから入るのかも知れません。雲仙のこういふ美しい緑の中にじつと緑の本源を見直して、これを現象せしめる、その力の大もとといふものを一応考えてみて下さい。

「像」といふこと

スイスの哲学者ピカトが「顔」といふ書物を書いてゐる。その中に

——「像」とは中国でいう「道」のようなものである。像は解示し、告げ知らせながら、同時にまた「より以上のもの」——それが告げ知らせる以上の何ものか、つまり、隠されたもの、神秘的なもの、決して完全に解釈し得ないものへと沈黙する。像は地上の可視的諸事物や人間について、「より以上のもの」即ち根源の像へと報告をもたらし、また根源の像の不可視的諸事物についての告知を人間にもたらずものである——

という言葉があります。「像」、一本の木、あの窓越しに見えるむこうの山の緑、目の前の檜の木の葉、この緑は一つの像です。像だが、いま言ったように、この緑の姿を現わさせている背後の不可視的根源が宿されているに違いない。

又ここに持ってきた雲仙の山のこの石、この石にも一つのつらがある。つら構えがある。人間は表情がある如く石にも表情がある。「像」です。しかもこれは一塊の石ころにはすぎないけれども、火山の活動と無関係ではない。その火山の活動は地球の持っている力と無関係ではない。宇宙の持つている大きな力と無関係ではない。宇宙と地球が無関係でないならば、地球の深部にある岩漿がどうつと吹き出されて固まった石、当然これは宇宙の偉力のあらわれでしょう。この石の表情は、宇宙のある働きそのものと大きな関連においてある。仏教で言われる諸法無我、結びつきにおいてある。小田村先生が「つきあい」というお話をなさったさうですがこの石は宇宙とつきあっている。この我らともつき合っている。大変なつきあいです。

今度は人間の顔を思い出しましょう。お隣の人の顔を見てみる。隣の人も一つの石と同じ。像だ。つら構えに現われている以上のものをその内に隠している。その根源のもの、より以上のものを内に秘めて沈黙しております。黙ってはいるが、黙つてものを言っている。あなた方というつら構えを現わさせている根源力は黙つて背後か、内部に隠れている。あなた方も地球の上に現われた一つの石ころ。宇宙の偉大なる力のある現われ。木に緑が現われる如く、石に安山岩

の表情がある如く、あなた方も、もつと複雑な表情をなしうる人間として、宇宙とのつきあい、根源生命とのつきあい、大自然とのつきあい、地球のあらゆるものとのつきあい、目の前のノートや鉛筆とのつきあい、机を隣りあつて並んでいる人同士のつきあいの中で姿を現わしている。しかしその背後をずっとたどつていけば、まさにこれは永遠と言うより他に云いようがない。

永遠という言葉はごまかしの言葉ではない。表現できないから永遠とか無限とかいう言葉で仮りに表現されて来た。仏教で無とか空とかいうのとも同じでしょう。無というのは形がなく、しかもあるもの、良き表現ではないですか。

今度は見方を変えます。この石、さげてみると重さがある。どこかに重心がある。重心とはいずこ。物理的に調べてどこかにあるポイントです。図には書くことはできませんが目では見ることができない。目では見ることはできないが、センター、重心があることは事実です。目では絶対に把え得ぬ。針でついたぐらいかもしれないし、いやいやもつと小さいものに違くない。しかしある。明瞭に。電柱をあやつるあの電工さんが、重いコンクリートの電柱を人間の力で立てたり植え込んだりする時を見てごらん下さい。うまいものだ。あやつるのは重心のところだけだ。もしもわれわれがあやつると、重心でないと汗を出して苦しむに違くない。重心のところにピタリとひっかけて、するすると動かす。簡単に動く。

物理的な重心に例えましたが、今度はもう一つ別の例を出しましょう。君達はいま、私の話を聞いている。一分前は過去になる。一分後は未来になる。十分の一秒すぎても、もう過去になる。また百分の一秒先、これはもう未来だ。では一体現在とは何か。現在というものを切つてみようと思つてごらん下さい。万分の一に切つたら万分の一秒、億分の一秒。コチツといつたらもう過去。偉そうに過去とか未来とか分つたように言い、現在何々がと言つていけれども、本当のぎりぎりの現在というのはつかむことさえできないではないですか。

しかし、私共は、体験上、過去、現在、未来という、一つの命のつながりの中で、いま自分が体験しうる何かを或る巾を与えたり狭めたりして、現在として把握している。その現在という時の動きは、見ることはできません。つかむこともできません。把握することもできないが、時間のセンターはやはり体験的にはあります。物体には中心、重心があり、時には現在がある。先程来の像というものの背後に、つかみどころはない、実に永遠のものを感じとり、総ての物体に見えないがその重心を認め、そしてこの生きた時間の中にも、充実した今というものを感じ直して来た私達は、この眼、この心眼で世の中を今一度見直して行きましょう。仏教に「慧眼見真」といふ言葉があります。このような心眼を慧眼といふのです。

地藏菩薩

慧眼を以て一切を見直した一人が二宮尊徳翁です。尊徳はそれをたとえて、地藏菩薩、虚空藏菩薩、大日如来等をあげられている。地藏菩薩——土地の蔵している偉大なる力、これぞ土地の持つ力なりといつて、その力そのものを人の前に見せることはできません。しかし土地に種子を蒔けば、植物が生える。その大地が宿している偉大なる力は、エキスにしてとることはできないが、万物を育てるすごい力、形なくしてしかもあるもの。見えずして、しかも蔵せられている力。これを祀つて地藏菩薩という形にシンボライズされたのだそうです。

赤い前掛け姿で、道端に埃まみれに立つ地藏さん。あのお地藏さんが地藏さんの正体ではない。農村の人は、お土地さまとか、お土地のおかげでという。土地を拜んで、土地の蔵している偉大な力に感謝し、その恩恵の大本として、土地の蔵する無辺なる力をおがんでいる。これが地藏信仰なのです。

虚空藏菩薩、大空がもっている偉大なる力、これも計量することはできない。ア、ミリタ——計量不能——アミダ——無量——計算はできないが、大空のおかげで、五風十雨、雨も降らせば、風も吹く。春夏秋冬が繰り返される偉大な天空の力、満天の力、その虚空が蔵しておる力も、つかみどころはないが、しかも確実にあるものとして、その前にひれ伏したものだ。これ

が虚空蔵菩薩です。

今度道端で石の地藏さんを見た時は、二、三分間立ちどまって、これが大地の蔵する偉大な力への帰依なのか、なぜこういうあどけない童子の顔にしたのだろう、どういうわけで土地の蔵している力をこういう形で表現したのだろうと、じつと味わつてごらんなさい。まどか、な顔をしている。生命が一つに流れ合う大きな表情。まどか、円まどかです。傷つけられない、なに物にもまだよごれない、あどけない顔つきをしている。敬虔な信仰の純なる願いが、ああいう形に表わされただけだが、決して軽蔑してはなりません。地藏さんをおがんでいる農村の人々は、あの、石で作った地藏をおがんでいるのではない。像が持っている、それが告げ知らせる以上のもの、より以上のものをおがんでいるのです。

宗教、科学、芸術、道徳

おおよそ、宗教にしろ、科学にしろ、道徳にしろ、最後は共通した一つの「無限なるもの」でしょう。いろいろな現象、このガラスも、水も、電気も、音波も、いろいろの現象をたずねたずねていって、その現象の背後にある無限の道理を追っかけていますね。それが科学でしょう。科学というものは、事物、現象、そういうものの中に潜む道理を何処までも追求していくので、その相手は「無限」なのです。

宗教は、その力のはかり知れない、見ることのできない、大きな宇宙生命との結びつき、宇宙の大きな力との結びつきにおいて、自己の小さな命を見ていくのです。自分という小さなラジオ器械が宇宙生命という波長をキャッチして行く。そして大きな生命の中に小さな自己の命が帰一していく、帰依していく。その無限へ帰命帰一していく姿、反省と奉仕もここから出て来る。これが宗教です。

芸術は最も分り易いでしょう。そこらにある色んな材料をかりて、木片、石片をかりて、糸くず、竹くずをもかりて、ここに無限の美を表現していく。大理石の中に彫刻を刻んでいく。絵具を材料にして、無限の美を追求していく。糸くずを編み合せて、手芸品の素晴らしい芸術品を創り出していますね。人々は朽ち果てた根つ子を「オブジェ」といつて、その中に人間の作りえざる美の世界を追求しているでしょう。音楽は目に見えない世界で、音を組み合わせ、われわれに大へんな美的感情を起させています。芸術は相手が石ころであろうと、糸くずであろうと、音であろうと、形成、構築、組み立てることによって、そこに永遠なる美の姿を追求していく。これもその相手は無限でしょう。

道徳。一見分りにくいけれども結局は「無限なるもの」の表現です。相手は人間。君達は今まで見ず知らずの大学生だったが、偶然ここに集まって、偶然、班に入れられた。しかし、その接する人同士、人と人との間に、いま「無限なるもの」を実現している。「無限なる愛」を实

現している。たとえば好意、親切、誠実、誠意、こういう消えない力を以つて、広く横にも、時間的にも押し及んで止まない力即ち、無限なる力を、具体的な人と人との間に出し合っている。これが道徳でしょう。本当に親切を受けた人は、それで終らない。自分があの人から親切をうけたから、あの人へだけ恩返しをする。それきりで終らないのです。親切を受けた人は、そのうれしさを心の原器として必ず他人にも及ぼし、あるいは勿論自分の子孫には強く及ぼしてゆく。そういうものでしょう。人と人との間に、生きた人間同士が、無限なるものを実現していく。これが道徳なのです。

こう見て来るといわれる文化の代表であるところの、科学も、宗教も、芸術も、道徳も、われわれが価値高きものとして、あこがれゆく、すべてが「無限の世界」です。言いかえれば、形、表現、像の背後にあるものをじつと見つめ、それをわが心に深く刻み直して、あるいは取り戻して、あるいは想い起して、再びそれを發揮し、現実化していくところに、はじめて無限の中に生きているという、お互いの深い喜びが出て来るのでしょうか。

有限と無限への参与

私ども個人は、有限の命を持ち、有限の働きしか出来ない。太陽を西から上げることはいかないし、寿命を二〇〇年にすることもできない。しかし、今述べ来たつたように、私たちと言え

ども、無限に心を通わせ、無限との中に、何かかかわりあいを持って生きていくことはできる。自分の中には何か無限への通路が宿っている。空間的にも、時間的にも、そういうものを感じられるのが目覚めた私達です。従つてそこには無限をあこがれながら、実は無限でないという人間の二元的な、いわば楕円の苦しさがある。楕円には常に中心が二つあるように、一方にはその二中心の苦、しかし又一方その楕円のおもしろさが、お互いの生きる味わいにもなつてくる。円の中心が一つきりであつたら、悩みもなければ希望もない。一切分り切つたものだが、二つ目玉があるから、引つ張り合つたり、協力したり、たたき合つたり、競争させたり、いろいろな問題がそこから出てくるでしょう。即ち人間的なイトナミが。

ここで眼を転じて、フレーベルの言葉を味つて見ましよう。フレーベルによれば宗教と、労働と、節制と、この三つは絶対に不可分に、一つになつてゐるはずだということです。それを図にしてみました。じつと考えてみて下さい。一番上にあるのが宗教、宗教という言葉のかわりに、永遠の命と言ひ直してもいい。春が来れば草木に芽を出させるもの、お互いに考へたり、騒いだり、喜んだり、悲しんだりして生きてゐる、その一切の背後にあつて、われわれを生かしてゐるもの、永遠の力となるもの、それが宗教のイノチでしたね。

左側の下には、作業、勤労がある。行動、働き、実際に汗する働き、本当に考へたり努力したりする行動、そして右側に、節制がある。本能や欲望の河川にコントロールという堤防を附



しているものがある。節制とは人間を無限なるものに参じさせる道徳の世界です。この三つ、節制と作業と永遠なるものが、本来一つだと説いているのです。何故に節制が入っているのでしょうか。それは単なる人間の欲望解放は、創造ではない。形成でもありません。単に解放されたのみの本能は、却つて人々を本能の奴隷にしています。そこに節制という人生の態度の反省が出て来ます。

永遠のイノチに帰一し乍ら、その力に参じて行く作業、その力を感謝し乍らそれを形成に向けて進む節制、フレールベルの「人間教育」には「本来不可分離的に内面結合する右の三者であるが、これらが真に根本的に結合し協和して働く場合には、そこに平和あり、喜びあり、幸福あり、恩恵あり、又祝福があつて、これこそ真に地上の天国である」とありま

す。あなた方が、何か真剣に働く場合を思い出して下さい。真面目に働いている時は、永遠と無関係でしょうか。節制と無関係かしら。一つの例を上げてみましょう。

朝起きて掃除をする。それぞれ作業当番があつていろいろな任務があるでしょう。任務の中

に君達が動いている。動いている面だけを見れば、動物と同じです。ところがその動きは清潔に向つて働いているのです。なぜ美しさを願ひ、なぜ清さを求めているのか。誰がしむけたのか。不潔よりも清潔を喜ばせるのは一体何か。騒音と、清らかな韻律と、どちらが君達は好きなのか。どちらを求めるのか。誰れがそれを求めさせるのか。

そうみると、それはなにか永遠ということにも無関係とは言えません。きたないものを見れば皆顔をそむける。千々岩湾をバスで通るとき、私の前におつた、ハイキングの一団体が、あきれいだといつて湾の景色を、歓声をもらしてながめていた。そういわれてみると、こつちも一層きれいなように思う。やはり、きれいなきれいだと喜びの声を発しているではないか。その美をもとめるところの中に、人間に秘められた永遠なるものが現われてくるのです。それが無限に根ざしているというもの、そしてその力を掃除という作業に具現して行く。而も社会生活のルールにまで形成して。掃除当番というルールは責任と義務と節度を以て、人々と共に神に参与している。

ソ連の変貌

私は去年、スエーデンへの途路、現在のソ連をのぞき見することができました。そこで、驚いたことは、ソ連はソ連なりに、人間である以上、永遠なるものを求めようとしている新しい

息吹があるということでした。その証拠は、現在のソ連に「急ぎ」が見えることです。これは私の勝手な言葉ではない。日本人で右傾も左傾もしない人、本当にソ連を如実に把握している人、朝日、毎日、中日、読売、そういうような大新聞の記者、NHKの特派員等比較的ジャーナリズムでも第一線にいるような人々から直接にこの数年来のソ連の動きを聞き得ての事なのです。その時に出た言葉です。ソ連はいま多少うろたえている。ソ連人だつて人間でしょう。人間以上の永遠なるもの、絶対なるものにあこがれ、何とかして心の奥にそれらを把握しようとする熱烈な希望はあるはずで、ところがいままでのソ連の政治形態ではそれがなかなか満たされない。その不満が、社会の裏面にじりじりと出ている。それを早く見てとつたのが、いまのコスイギン。彼がフルシチョフのあとを継いでから、政治の方向がぐつと変つていった。コスイギンはスターリンとまるで一八〇度の方向へ行つた。なぜかという、大衆の心理に、常に内的満悦が欠けていて、西欧文化憧憬の色が抑え切れぬところまできているからです。生活もそうです。着るものと食べものの高価で不自由なこと、これは想像外です。給料は私どもの一倍半から二倍ですが、鶏卵一個が日本円で七〇円、ネーブル一個が二四〇円、モスクワの一流ホテル「ウクライナ・ホテル」においてさえも、特別に注文しないと、小麦の白いパンは出ない、大部分がジャガイモのパンです。大学の教授でも、粗末な服装で、疲れ切つた背広を着、品質の低い靴をはいている。東京オリンピックに來たソ連選手が皆何よりも先づ洋服を買

い込んで、多い人は十二着も持ち帰ったという。ただし、ソ連は目下住居費と医療費位は格安です。これで何とかバランスがとれる。日本のセイコー社の時計とか、携帯便利なカメラのオリンパスの如きは大評判で、いつでも五倍六倍にも売れます。赤の広場で写真をとっていると、青年が寄ってくる。カメラを売ってくれという。時計を、ライターを、万年筆を言う。

あの人工衛星を飛ばしているソ連が、まだ一般にはラジオ時代です。モスクワの市内が、唯今も十一軒に一軒しかテレビはありません。とにかく街を走るタクシーを見れば判る。私が学生時代の日本のタクシーのようなもの、そんなものがモスクワを平気で走っている。坂が来たら運転手自ら押して行く。全くその力にも驚き、その感覚にも驚く。それでいて驚くべく巨額の国防費、あの人工衛星を飛ばすため軍事費が如何程のパーセンテージか。兵器、弾薬へ、金がどンドン走る。生活はギューと切りつめられる。それでは国民は内面に鬱滞する不平をもたはずで。

その不平、勿論このような物質的な面も大いにあるが、もう一面ある。心に満たされないもの、精神生活の不満。それ故にこそコスイギンになってから教会の復活がはじまったのです。「宗教はアヘンなり」と、それを実行したソ連が、教会復活をやっている。六月上旬のある日、ちょうど午後四時半でしたが、有名なモスクワ大学のあるレーニン丘の上に立ったら、夕

日をあびて金色燦然と光る円屋根が十二ほど見える。大変な美しさです。その十二の大きなねぎぼうずは、申すまでもなく最新新しく手入れされた教会です。教会の復活、だが私はそれだけでは外見にとらわれることになると思つたので、日曜日の朝、ある教会に詣でてみた。ギリシャ正教のまじめなミサが行われています。但し九四と九五%は中年以上の人です。若い人はごくわずか。二〇代そこそこの人は百人のうち二人か三人しかまじつておりません。三十才以上の男女、ほんの最近まで宗教を禁じ、断じて教会というものに参らせなかつたのに、いまはわざわざ西欧側から、驚くなかれ西ドイツ、デンマークなどからさえ牧師を一九〇人も連れてきて教会復活をやっている、これがコスイギン政策です。

この事実は何を物語るのでしょうか。人間が、心の中に、自分達の有限を感じればこそ無限なるものへのあこがれ、無限なるものへの目ざめ、無限の中に、自己の命を発見する喜びがあるのではないのでしょうか。無限との結びつきにおいて、「われ生きてあり」という自信。そういう喜び、それがソ連人にいま求められている。半世紀にわたるあの唯物史観下の弾圧という苦しい生活から、いま人間心を取り戻しかけているかなりの動きが、特に大きな都会、レニングラード、キエフ、あるいはモスクワ、ハバロフスクなどを中心にして、胎動から漸動へとめだつて見えるようになってきているのです。あれ程、現実的な、合理的な、又科学的世界観と称して得意であつたソ連人の生活も、やはり一辺倒の非を悟りつつあるのであらうと思いま

す。日本人も、よくよく考察しなければなりません。

私どもは何も無限という空虚な夢を夢見ているのではないのです。自分自分の内部には、はつきりと無限のイノチとの一連があるのですね。さきほども申したこの石ころ一つが無限の宇宙の力との大きな関連においてあるごとく、この一個のコップが、下の水挿しとお盆とテーブルと、このステージと面前の君達と、あるいはこれを作ったガラス職工と、更にこれを買ったガラス屋さんと、いろいろなものが無限の結びつきにおいていまここに存在していますね。諸法無我、我独りポツンとは存在していないし、その関連は無限だし、その無限の奥にはイノチの通いがあるし、諸行無常、即ち関連しては変化しているでしょう。関連と変化、これが生きているということの、自覚、喜びとして心から感じられるはずです。無限に結びつく者同士が、本当に手を結びあつて、その結びあう中で喜びをわかちあうのです。それはただの寄せ集めではないのです。大きな無限の命による喜び合い、それを喜びあいながら、無限なる力に頭を下げ、前述の地藏さんではないが、無限なるものの力に敬虔の念を持ち、無限なるものの示してくる教えを、お互いの生きる指針として有ちつづけていくのです。これが小さな「我」というものをコントロールする一番大きな力、即ち自己統制、自己制御の力になるのです。それが又フレールベルのいう節制なのです。「自己克服」も「無限なるもの」に眼を開き、それを胸底に感得することなくしては、不動のものにはなりません。日本の一般教育、就中公立学校

の教育では、この「無限なるもの」への示唆が欠け過ぎています。

去る六月に、東北六県の高校三年生代表の七十名が、東京の各特色ある大学を歴訪しました。私は私の大学を見学してくれたこれらの生徒達に「無限なるもの」への教育の一端を学校の特色として話して聞かせました。ところが、有難いことに彼らは、耳新しく、目新しい話題だった為か、非常に感動してくれ、質問も素晴らしいし、その後の便りにも実に嬉しい反応が続出したのです。

日本教育に欠けたるもの——永遠なるものへの自覚——お互に心眼を開きましょう。

吉田松陰は留魂録の冒頭に

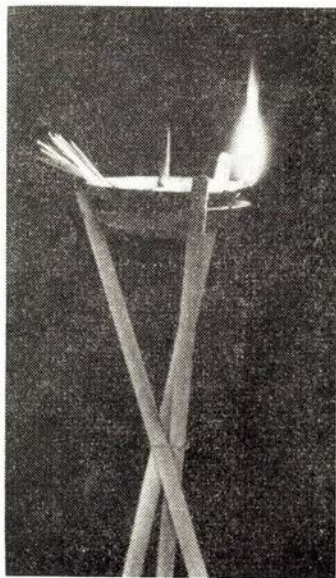
身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

と詠まれていますね。永遠に留め置かれたる大和魂。あらゆる苦難に屈せず、我欲の小我、煩悩の小我、本能の自己を克服された松陰先生の「永遠を見つめられたる心」を鑑と致しましう。

（玉川大学教授）

明
治
の
精
神

小
柳
陽
太
郎



はじめに

五ヶ条の御誓文——開かれた世界

福沢論吉のことば——自由について

同——独立について

一葉の日記——名もない庶民のこころ

はじめに

明治は偉大な時代であった。これは誰しもが一応認めているところだ。しかし偉大であるということは、ただ大きな業績を残したというだけではない。明治の時代は、その業績もさることながら、実に生き生きとした時代であった、潑刺とした時代であったというところにその最も大きな意味があるのです。従って明治という時代は日本人の生命の、一つの大きな泉として一度は是非とも、つきあつてみなければいけない時代だと思ふのです。

最近ジャーナリズムでよく話題にのぼる言葉に、「明治百年か、戦後二十年か」というのがあります。これは例によつてすべての日本人の思想内容を、対立する二つの類型にわけようとするジャーナリズムの遊戯にすぎないのですが、このような分類は問題をひどく混乱させるおそれがあります。いうまでもなく僕らが生きている現在は、戦後二十年でもあるし、明治百年でもある。そして大正の五十五年でもあるわけです。奈良時代から数えれば一、二五〇年、平安以後一、一七〇年、その無数の歴史の糸筋が、僕達の前後には複雑に入りこんで、現在が生れている。僕達はそのような無限の歴史を背負つて生きているのです。それなのに明治百年か、戦後二十年か、その二つの抽出の中に、日本人のすべての思想を分類していこうとする。なぜそんなことをするのか、その発想は一体どこから生まれてきたか。すでにお気付きだと思ひ

ますが、その発想の根底には一つの意図が働いていると見なければなりません。

すなわち明治百年というものの中には戦前の生き方を肯定する立場がある。これに対して戦後二十年の方は、いうまでもなく戦後の生き方に立つわけです。すなわちそこではこの世の思想には戦前か、戦後か、その二つしかありえないという考えがある。さらにその奥には戦前の誤った生き方の根源は明治にあるという判断が横たわっているのです。明治の生き方は昭和二十年まで一貫して続けられた。そして敗戦によって突如として新しい戦後の生き方が生まれました。戦前か戦後か、われわれの道はその二つのうち一つを選ぶ以外にはあり得ないのだという論法です。だがこれはおかしい。明治の生き方が、そのままの形で拡大されて昭和二十年を迎えたと言う前提が、何か自明のことに考えられている。だが明治と昭和は決してイコールではなかった。それは少しでも本をお読みになればすぐわかると思います。昭和の時代は、明治の発展どころか、明治の精神が極度に衰弱し変質してしまった時代なのです。その衰弱し空洞化したものが、その裏がえしとして過激な行動を呼んだ。昭和という時代は大雑把にそういう時代だったと言えると思います。

例は無数にあると思いますが、たとえば帝国憲法、これは明治の精神の政治的な面での一番大切な根幹をなすものですが、その帝国憲法は昭和十年をすぎた頃には、非常に自由主義的なものと考えられてきたのです。従って、当時の非常態勢を乗り切るためには、これを棚上げに

してしまわなければならないという動きが、活潑に行われた。

現在は明治、大正、昭和と通じて、この帝国憲法が君臨し、日本の国を破滅に導いた万惡の根源がそこにあるというような論調が風靡している。だが事實はむしろ逆で、帝国憲法の精神が正しく、健全に生かされてきたなら、日本はこれほどまでに破滅的な状況に追いこまれなくてもすんだのではなからうかと思われるのです。

明治から昭和にかけての変質、それを理解しないでは、日本の歴史はわからない。それなのに、人々はその両者を、「戦前」という一つの枠の中にあつまりほうりこんでしまうのです。そんなことで一体そこから何が生まれるか、そこには何が見えるか。

ともあれ世の中のすべての人を、戦前派と戦後派の二つにわけてしまわなければ承知しないという粗雑な思想からは何ものも生れない。従つて、そのような愚劣な分類の上に明治という時代を浮かべてみても、明治の精神は何一つわからない。そのことを先ず最初に肝に銘じていただきたいと思ひます。

もう一つここで注意していただきたいのは、明治の精神——それは何も明治に限つたことではありませんが、精神のあり方を考えていく場合には、その精神を表現している「ことば」と切りはなすことが出来ないということです。たとえば明治の時代は独立の精神が旺盛であったとか、四民平等の世界が開けたとか、自由が尊ばれたとか、そのようなことをいろいろ申しま

す。自由とか平等とか、独立とか、そのようなものが明治の精神の中核をなしている。人々は一応そのように整理する。しかしそのような概念をならべたり、操作したりするだけでは、明治の精神はわからない。勿論学問の上では、思想の動きを概念化していくという作業は避けられない。それはそれでいいのですが、それが学問のすべてであると考え、そこで安心してしまふことは許されないので。概念は、それを包み、それを生かしている一つの世界、それは情緒という言葉で呼んでもいいかと思いますが、その情緒と切りはなされた場所では、何の生命もない単なる石ころにすぎないので。私達はその情緒を理解し、その情緒の上に、概念を浮かべてみなければいけない。従つて一つの精神を理解するためには必ずそれを表現している「ことば」によつて、その精神を支えている情緒にふれなければいけません。

五ヶ条の御誓文——開かれた世界

今年の一月九日、朝日新聞の社説に「明治生れと昭和の世代」という一文が掲載されました。そこでは私をはじめに申し上げました戦前と戦後の世代の断絶というようなことがあれこれとりあげられています。その中で明治生まれの人と、昭和生れの人それぞれの尊敬する人物を比較した、次のような世論調査の結果がのせられています。六〇才以上の人、即ち明治生れの人は明治天皇、二宮尊徳、乃木希典をあげ、二〇代の人、即ち昭和生れの人には野口英世、

湯川秀樹、福沢諭吉をあげている。そして社説には「これらは生いたった教育や、時代思潮の違いから、価値観の相違ということになるが、それは絶対的なものであろうか。ある一つの統計は、われわれにさまざまな話題を提供する」と書いてあります。すなわち筆者は明治天皇と福沢諭吉とは全く違った世界の人物だという前提に立ってこの統計をながめている。だがこの社説を読んだとき、私はこの筆者は果して、明治天皇と福沢諭吉という生きた人物を見ていたのだろうかという疑問をおさえることはできませんでした。筆者が見ているのは単に君主制の頂点に立つ天皇と、四民平等を唱えた民主主義的な思想家諭吉という二つの「型」だけではないのか。たしかにその二人は一応は別の世界に生きているようです。しかしその内面をたどっていけばその両者には密接な関連があり、数多くの一致点が見出せるのです。しかもその一点に、明治の精神を解く鍵がある。その一点とは何か、ここでは五ヶ条の御誓文と福沢諭吉のことば、更に時間が許せば、樋口一葉のことばにもふれて、明治の精神を私なりにあきらかにして行きたいと思えます。

五ヶ条の御誓文とは、いうまでもなく王政復古の大号令が發布された翌年、慶応四年（明治元年）三月十四日、新政の基本政策として、明治天皇が神前に誓われた言葉です。明治時代の精神を理解するためには欠くことの出来ない文献です。はじめにその全文をかかげておきます。

『五ヶ条ノ御誓文』

一、 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

一、 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

一、 官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス

一、 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

一、 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

我國未曾有ノ変革ヲ為サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ、天地神明ニ誓ヒ大ニ斯ノ国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

一つ一つの言葉について詳しくお話する時間がございませんので、問題のところ、特に心をとめて見ていただきたいところだけ指摘しておきたいと思ひます。まず第一に「廣ク」という言葉に注意していただきたい。「廣ク會議ヲ興シ」の廣クという言葉です。第四項には「舊來ノ陋習ヲ破リ」とありますが、「陋習」の「陋」とは狭く苦しいという意味、「廣」の反対です。すなわち新しい明治の時代は江戸時代の「陋」に対して、「廣」の時代であつた。そのような受けとり方が出来るように思うのです。それに関連して、もう一つ「公」という言葉にも注目していただきたい。「萬機公論ニ決スベシ」「天地ノ公道ニ基クベシ」というように「公」という言葉がくりかえし使われている。「公」の反対はいうまでもなく「私」、そう見てくると江戸時代という時代は、私という世界に閉じこもっていた。家庭でも、部落でも、更には藩

にしても、大きくは国全体が常に他との間に垣根を設け、他の世界から自分を引きはなし、常に自分の中にめくれこもうとする。世界は外に拡がっていかうとはしないで、内にこもつていく。その一つ一つがすくみ上つたような形になっていく。そのばらばらになつた一つ一つの世界を、幕府という権力機構が巧みに操つていくのです。もしそれぞれの世界が外に広がり、伸びていくようであれば、幕府の統制はきかなくなつてしまう。幕府にとつては、国民生活は出来るだけ分断されることが望ましかつたはずで、こうして江戸時代の生活原理は「私」であつた。出来るだけ狭い場所で、自分なりのバランスをとつて生きていく、そこにその時代特有の生活原理があつたと言つていいと思います。

その閉ざされた「私」の世界、それを破つて、もつと広々と、誰の心にも通つていく潑刺とした精神の世界、それが実現されたのが、明治の時代ではなかつたか。「萬機公論ニ決スベシ」「天地ノ公道ニ基クベシ」という表現の中に、私はそのような開かれた、はればれた世界を感じるのです。自分を越えて、他と連なつていく、一筋に連つていく感慨、それがこの御誓文の「公」という言葉にこめられていると思ふのです。

そういう文脈の上で読んでいくと、第二項の「上下心ヲ一ニシテ」という言葉にも、上下それぞれがその立場の違いを越えて、同じ日本人としてむすび合つていく実感がこめられているし、「官武一途庶民ニ至ルマデ」という言葉にも同様のことを感じるので、幕末の動乱と西

歐諸国との接触を契機として、相互不信の冷たい世界が音を立てて崩れていった。明治のあけぼのというものを私はこのように感じるのです。

このことは第三項の後半、「其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス」という個所に最もよくあらわれていると思います。「倦ム」というのは、思うように志をのばすことが出来ないで、自分の世界の中に、閉鎖的な人生の中に落ちこんでしまうことです。その逆が「志ヲ遂」げることでしょう。人の心が、無限にひろがつてさえいけばそこには必ず何かが生まれるはずだ。そういうゆるぎない確信がこの五ヶ条の御誓文を一貫して流れていると思うのです。「智識ヲ世界ニ求メ」ということも、単なる旺盛な智識欲ということではなく、その根底に、このような開かれた世界への感激を読みとらなければなりません。そのような情緒の色どりの上に浮べてはじめて、五ヶ条の御誓文の精神は理解出来るのです。

福沢諭吉のことば——自由について

以上のことに心をとどめていただいた上で、福沢諭吉の言葉にふれていきたいと思えます。「学問のすすめ」に次のような言葉があります。

「怨望の人間の交際に害あること斯の如し。今其原因を尋るに、唯窮の一事にあり。但し其窮とは困窮貧窮等の窮に非ず。人の言路を塞ぎ人の業作を妨る等の如く、人類天然の働を窮せ

しむることなり」

「人類天然の働き」を活潑ならしめるためにどうしたらいいか、それが論吉の一生を貫いた課題であつた。彼が打破すべき最大の眼目として狙いをさだめた相手は「窮」の一字だつたのです。彼には「文明論之概略」という著書がありますが、ここでは文明の定義は次のような言葉で示されている。

「文明の要は唯この天然に稟け得たる身心の働きを用ひ尽して遺す所なきにあるのみ」

人々の肉体の、精神の働きをこれ以上できないほどまでに躍動せしめること、そこに文明の姿があるというのです。従つて政治の世界においては次のようなことになる。これも「文明論之概略」の中にある言葉です。

「立君の政治必ずしも良ならず。合衆の政治必ずしも便ならず。政治の名を何と名乗るも畢竟人間交際中の一箇条たるに過ぎざれば、僅かにその一箇条の体裁を見て文明の本旨を判断すべからず。（中略）人間の目的は唯文明に達するの一事あるのみ。之に達せんとするには様々の方便なかるべからず。随つて之を試み、随つて之を改め、千百の試験を経て其の際に多少の進歩をなすべきものなれば、人の思想は一方に偏すべからず。綽々然として余裕あらんことを要するなり。」

政治の形態には君主政治、共和政治、その他いくつものものがあつた。その中のどれでいこう

かと考えるところにすでに間違がある。大切なことは「天然に稟けたる身心の働きを用ひ尽す」ような政治を実現することです。そこに着眼しさえすれば、「政治の名を何と名乗るも畢竟人間交際の第一箇条たるに過ぎ」ないではないか。もつと潤達にものごとを考えなければ、政治の名にとらわれて政治の実を失うことになるのだ。その潤達さを論吉は「緯々然として余裕あり」という言葉で述べているのです。

私達はよく思想が一方に偏してはいけないという。その時一般に考えられているのは、右にも偏せず左にも偏せず中道を行くということのようです。だが右とか左とか言つても、そういう立場にいる人は自分がいま立っている場所が正しい、すなわち中道だと思つているに違いない。そう考えると一体何が中道なのか、偏しないとは何か、わからないことになってしまします。ところが福沢論吉は一方に偏らないということを、「緯々然として余裕あり」という思想態度とむすびつけて述べています。何ものにもこだわらず、誤つたと思えば直ちに改め、たじろがず、迷わず、堂々と思想生活を展開する、その心の働きの自由というものをこそ思想の中正と呼ぶべきではないか。まことに鮮やかな定義であると思ひます。

もう一つ例をあげておきましょう。これは学問についての言葉ですが、「学問のすすめ」の中に次のように書いている。「学問の要は活用にあるのみ、活用なき学問は無学に等し」活用とは生きて用（はた）らくということ、所謂「役に立つ学問」というよりも、もつと本質的

に、生氣潑刺たる学問を求めた論吉の精神に思いをいたすべきでしょう。生きた学問に対して、死せる学問は次のようなことになる。「今日都会の学校に入て、読書講論の様子を見れば之を評して学者と云はざるを得ず。されども今俄に其原書を取上げて之を田舎に放逐することあらば、親戚朋友に逢ふて我輩の学問は東京に残し置たりと云訳けする奇談もあるべし」現代の学問のあり方を考えたとき、まさに急所をついた批判であろうと思われます。さらに論吉は次のように述べている。「人間の事には内外兩様の別ありて、両ながら之を勉めざる可らず」ところが「今の学者は内の一方に身を委して外の務を知らざる者多し。之を思はざる可らず」外の務めを忘れてしまつてゐるというのです。そしてその次にくる最後の言葉が美しい。「私に沈深なるは淵の如く、人に接して活潑なるは飛鳥の如く、其の密なるや内なきが如く、其豪大なるや外なきが如くして、始めて真の学者と称す可きなり。」

「人に接して活潑なるは飛鳥の如く」そこに福沢論吉のすべてがある。福沢論吉は明治のはじめに人に先んじて「自由」の思想を説いたという。それはどの教科書にも書いてある。しかしはじめに申し上げましたように、その自由思想というものは、このような論吉の心の中に潑刺と動いている体験内容、情緒の色どりを、その言葉に則して偲ばなければ到底理解出来ないと思うのです。「人に接して活潑なるは飛鳥の如く」という、その生き方を偲び、更には我々自身がこの身に味わつてはじめて福沢論吉の「自由」ということを知ることが出来るのです。

福沢諭吉のこの潑刺とした、たくましい思想生活、それは「窮」の一字に代表された閉鎖的な世界を粉微塵に打ち砕いたのです。私は先に五ヶ条の御誓文の中に見える「広」とか「公」の言葉を通して、開かれた世界への感激について述べましたが、それとこの諭吉の言葉といかに通いあうものがあるか、改めて申し上げるまでもないと思います。この無限に拡大していく心の自由の世界、その実感が明治という時代を支えていたのです。

幕末の時代、開国と攘夷という二つの考えがはげしく対立したと申します。たしかにその二つは真反対のように見える。しかし精神の働きから見ればそれは決して真反対ではない。外から覆いかぶさってきたものに対して敏感に反応する生き生きとした魂という点においてその両者は共通している。そのいずれにおいても、その奥にあるものは、それまで眠っていた幕府時代の心が目をさましたということ、命がかよいはじめたということ。それが攘夷となり、開国となつて現われてきたのです。従つてそれまで攘夷を唱えていた人が急に開国論者になつていく、その変化を見て、いかにもオポチュニストでもあるかのように評価する人が多いけれども、決してそうではなかった。その底にこれまで述べてきたような生き生きとした精神があつたからこそ、彼らは自由自在に変化し得たのだ、これが正しいと思つたら、それまでの行きがかりを鮮かに切りすてて、思つた通りに驀進するエネルギーが蓄えられていたのだ、私はそのように思います。このように見てまいりますと、最初に引用した朝日新聞の社説、明治天

皇を支持する層と、福沢諭吉を支持する層の間に歴史の断絶をよみとろうとする態度、これがいまの世の常識になっておりますが、それがいかに粗雑な考え方の上に立っているかわかりただけだと思います。

福沢諭吉のことば——独立について

もう一つ明治の精神を代表するものとして「独立」ということにふれておきます。福沢諭吉が自由とならんでこの「独立」を強調したことはあまりにも有名です。だが彼は世の人すべてを、日本の国の独立を求める政治家になそうとはしなかつた。人各々勤めるところがあるはずだ。自らが選んだ職業に全力を傾けるのは当然望ましい姿に相違ない。ただ願うところは「其の食を忘れ、家事を忘るるの際にも、国の独立如何に係はる所の事に逢へば、忽ち之に感動して、あたかも蜂尾の刺藁(したい)に触るるが如く、——蜂にさされたように——心身共に穎敏ならんことを欲するのみ」と書いている。「蜂尾の刺藁に触るるが如く」ということばはすばらしい。外国から侮辱を受けたときには蜂に刺されたように、心身ともにビリビリと反応する、そういう精神生活を国民のすべてが常に用意していなければならぬ。その磨ぎすまされた感覚の上に、一国の独立が約束されるというのです。さらに彼は「独立とは、独立すべき勢力を指して云ふことなり。偶然に独立したる形を見ていふにあらず。」とも書いている。独立

すべき勢力とは独立への意志と言つてもいいかと思いますが、その意志の働きのないところで、偶然に保たれている独立は、独立の名に値しないと云つてゐるのです。いまの日本にとつては実に痛烈な批判です。

自由と独立、それはバラバラになつたものを一つに統一していくという精神の働きに名づけられたものです。私の世界から公の世界へ、狭い世界から広い世界へと拡がつていく。その拡がつていくものが燃え上つて一つの統一体を形づくつていく。その統一体は、当然外から来る力に対して敏感に反応する。すなわち自由と独立とは一つの生命が表現されていく盾の両面であると思います。明治という時代は、そのような生命を直接に味わいた時代であつたと言えましよう。

一葉の日記——名もない庶民のこころ

しかもそれは福沢諭吉というような高度な思想家の胸にのみ宿つたものではなかつた。それは名もない庶民の一人一人にまで多かれ少なかれ感じられた生命感情であつた。その例は無数にあります。ここでは樋口一葉の日記の一節をとりあげてみたいと思います。樋口一葉といふのは有名な文学者、名もない庶民といふのにはあたらないうです。この日記を書いた明治二十六年には一葉は二十二才、その名前もまだ世の中には全く知られていない。吉原の近

く、下谷の竜泉寺町に母と妹の三人が、ひっそりと肩をよせあつて駄菓子屋を開きながら細々とくらししていた頃です。小説を書きはじめたのはその前の年ですが、それも苦しい家計の足しになるかもしれないというような動機からはじめられたものようです。従つて次にかかげる一葉の日記は文字通りささやかな庶民の生活の中に生きている一人の女性の日記として読んでいただきたいのです。

「明治二十六年十二月二日、晴れ、議会紛々擾々。私行のあばき合ひ、隠事の摘発、さも大人げなきことよ。」これは衆議院議長の星亨に対する不信任をめぐつての紛争をさしています。このような国の政治の乱れに心をいためた一葉は次のように書いています。

「半夜眼をとちて静かに当世の有様をおもへば、あはれいかさまに成りていかさまに成らんとすらん。——一体どうなつていくのだろうか——かひなき女子の何事をおもひたりとも、なほ蟻、みみずの天を論ずるにも似て、我を知らざるの甚しと人しらばいはんなれども——自分の身をわきまえないと人は言うだろうけれども——さてもおなじ天をただだけば、風雨雷電いづれか身の上にかからざらんや。国の一隅にうまれ、一隅に育ちて我大君のみ恵に浴するは、彼の将相にも露おとらざるを、日々にせまり来る我国の有さま、川を隔てて火をみる様にあるべきかは。——祖国の運命を対岸の火災視することは許されないのだ——安きになれてはおごり来る人心の、あはれ外つ国の花やかなるをしたひ、我が国振のふるきを厭ひて、うかれうか

るる仇ごころは、なりふり、住居の末なるより、詩歌、政体のまことしきにまで移りて、流れゆく水の塵芥をのせてはしるがごとく、何処をはてとどまる処を知らず。——はなやかな西洋の風に流されて、日本の国の美しさに心をとめる人はもういないのか——」一葉は更にこの悲しむべき日本をとりかこむ外国の勢力に思いをいたすのです。

「かくてあらはれ来るものは何ぞ。外は対韓事件の処理むづかしく、千嶋艦の沈没も我に理ありて彼に勝ちがたきなど、あなどらるる処あればぞかし」。対韓事件の処理は明治以来現在に至るまで、日本の近代史に与えられた最も困難な課題でしょう。千嶋艦事件とは、この日記の前年、明治二十五年十一月、軍艦「千嶋」が伊予の堀江沖で英国の商船と衝突して沈没、乗組員七十余名が溺死したという事件がおきた。ところがこの日記が書かれる十日程前に、この事件は横浜の英国領事裁判所において日本の敗訴となったのです。

「猶条約の改正せざるべからざるなど、かく外にはさまざまに憂ひ多かるを、内には兄弟かきにせめぎて、党派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利をはかりて公益をわするものともがら、かぞふれば、猶指もたるまじくなむ。——実に数多くの人々が自己の利益を中心に判断し行動する、そのために政治の姿は乱れに乱れているではないか——にされる水は一朝にして清めがたし。かくて流れゆく我が国の末いかなるべきぞ。——日本の将来は一体どうなっていくのだらう。——外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙あり。印度、埃及エジプトの前例をひきて

も、身うちふるひ、たましひわななかるるを、いでよしや物好きの名たちて、のちの人のあざけりをうくるとも、かかる世に生まれ合はせたる身の、することなくして終らむやは。——物好きだと人から嘲けられても、このような危機に生きる日本人の一人として、無為にすごすことは許されない——なすべき道を尋ねて、なすべき道を行はんのみ——出来るだけの道を求めて自分なりに力を尽くして生きていくだけだ——」これが日記の全文です。そして最後に「さても恥かしきは女子の身なれど」という言葉をうけて

吹きかへす秋の野風にをみなへしひとりはもれぬものにぞありける

という歌を一首とどめております。野辺の隅に人知れず咲く一輪の女郎花といえども、秋の野を吹く冷たい風をのがれることは出来ない。名もない女性といえども時代の危機を避けるべきではないという決意が、実に強く、しかもつつましくうたいあげられているのです。

ここに明治という時代の精神が生きている。名もない庶民の心にまで浸透している、このきびしくも豊かな精神を私たちは「明治の精神」と呼ぶのです。

その明治に比して現代の日本がいかに精神の頹廢の中に放置されているか、いまさら申すまでもありません。国の政治も、外国との交際も、すべて自分自身の生活にとつてプラスかマイナスかというだけの、極度に私的な視点からだけとらえられている。生活は個々の会社に、あるいは個々の家庭に、さらには家族の一人一人に分断され、その分断された中での平和を、人

々は何の意味もなく享受しているにすぎない。それは無限に広がっていく生命を実感し得た明治の時代とは全く逆の現象です。明治になつて開かれた世界が、いま再びかく閉ざされてしまった。そのように思えてなりません。そこに見えるものは、悪しき意味での封建時代に見られた閉鎖的な人生観と共通した、生命のいたましい硬化現象です。

それに関連して最後に一言申し上げたい。最近「愛国心」の必要が強調されていますが愛国といつても、国を愛するといふ、その国が見えてこなければ何の意味もありません。一般に国は毅然としてそこにある、ただ問題はその国に対する愛情だけだといふ風に言われますが、心の動きに則して考えた場合はどうもそうではないようです。日本という国は、「私」の世界をのりこえて大きく拡がり、その拡がりの中で統一を求めようとするときにはじめて目に見えてくるものだ。「私」の世界に執着し、分断された生活感情の中に安住している時に国は見えない。国を愛するといふ、愛情の訓練はさほど必要ではない。大切なのは国が目に見えてくる修練なのだ。目に見えてさえくれば愛情は自らにじむように湧いてくるものです。

そう考えてくると、現代に比べて、明治という時代は、国というものが非常によく見えていた時代だつたと思うのです。一葉の日記を見てもわかるように、明治の人は、国というものはつきりと心の中に見えていた、人々はただそれを素直に表現しただけです。愛国心という言葉には或る種の感情論がある。愛情を強制するようなニュアンスがある。そこに愛国心という

言葉に反発を感じる人々が生まれる原因があると思いますが、明治時代の人には愛情の有無を論じるといふようなあいまいさはなかったように思うのです。明治の人にはもつと具体的なものがはつきりと目に見えていた。あるいは福沢諭吉の言葉にあるように、国家の危機に際しては「蜂にさされるような感覚」をもって反応するような活潑な精神生活が用意されていた。これも諭吉の言葉ですが、「人民の気力」が旺盛を極めていた、そういう時代だったように思います。

屈従にあらずして独立を、分裂にあらずして統一を、それが明治の精神であった。しかしその独立と統一の原理は国家のみならず、当然個人の精神生活にも要求される。いうまでもなく個人と国家は同一の原理によって貫かれなければなりません。これも諭吉の有名な言葉に「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」というのがある。明治はその一貫した原理が生きていた、生かそうと努力された時代であったと思います。

そういう意味で明治の時代を偲ぶということは、冒頭に申し上げましたように、私たちのいのちの泉を汲み上げる、かけがえのない大切なことなみであると思うのです。

(福岡県立修猷館高等学校教諭)

短

歌

入

門

— 導入と批評 —

山

田

輝

彦



はじめに

情意の枯渇

作歌上の注意

作品の批評

へ本稿は合宿初日の導入講義と、三日目の

講評を合わせて一篇としたものである

はじめに

短歌という呼称と、和歌という呼称はいくらかニュアンスが違えばかりでなく、その包括する内容も違います。和歌はいうまでもなく漢詩の対照語であって、その中には長歌や旋頭歌も含まれます。しかし、短歌形式が最も長い生命をもつて伝承されて来ましたので、今日では和歌と短歌は殆んど同義語として使われています。ただ和歌という言葉には、中世の二条派的な発想がつきまといまいますので、そういううしろ向きのイメージを排除するために短歌という呼称をしたいと思います。但しわれわれが短歌という場合は、万葉以降の伝統に連結した「うた」を意味するのであって、和歌と呼んでも少しも差し支えはないのです。

ところで、合宿の経験として短歌制作が強制されのは何故かという質問をよく受けます。思想を深めたり、知的な面を錬磨したりすると、短歌の創作という行為はどのようなふうになるのか、これは初めて合宿に参加した人が皆感じられる疑問です。しかし、この解答は、逆説的な言い方ですが、皆さんが合宿の全日程を完全に消化された時に自然に感得されるものだと思います。そこで、全く初心の方を対象としてのアプローチとしてお聞き下さい。

情意の枯渇

現代のわれわれをとりまいている環境をよく注意してみますと、その一番大きな特色は、人間の情意というものが枯渇している状態ではないかと思われれます。情意というのは、感情という言葉とは少し違って、豊かな感情とそれを統一する意志が一緒になったような心の状態を申します。判りやすい言葉でいえば「うるおい」と申してもいいのですが、そういう情意が枯れ果てているような気が致します。しかし、自分をもふくめて、我々はその渦中に生きているために情意の枯渇ということを意識できない。他人のいい表現に触れた時、始めて自分の情意がいかに枯れ果てているかということに気がつくのです。これは何も日本だけの問題ではなく、文明の必然的な動きであり、機械文明が次第に人間の生活を征服して行くところに原因があるように思われます。最初は人間の肉体の代用をしていた機械が、既に人間の知能の代用をするような段階に向っている。電子計算機のようなものができますと、人間の思考よりも数等正確な思考ができる。電子計算機の知能指数は一、〇〇〇だと言われていますが、人間の知能指数が一〇〇前後であるのに比べると、途方もなく正確なものが出て来たことになります。そういう時代なので、人間が機械に征服されて、すべての生活が非常にメカニカルになって来るのです。そこで、人と人とのつき合いも、機械的な、事務的なものになって来る。事務的であるという

ことは、知性の領域なので、必然的に情意というものがなくても営まれる。もつと正確に言いますと、情意のない方がかえって営まれやすいというような社会生活が現在の実態であろうと思われまゝ。

最近の論壇では、イデオロギーの終焉ということがよく言われます。一九世紀的な大思想の時代は去つたといわれます。初めに大きな前提があつて、そこから演繹してゆくような、グラント・セオリーは崩壊してしまつた。もう一度個々の人間の経験を大事にすることにかえらなると、本来の意味で、人間疎外から回復はできないという状態になつて来ております。先般、来日致しましたフランスの代表的な実存主義の哲学者マルセルなども、今のような機械文明の圧倒的な情勢の中では、人間の情意というものは遠からずして根こそぎにされてしまふということを言つて、その危機を訴えていましたが、現代はそういう時代だと思ひます。これは、イデオロギーの問題よりも、もつと重大な問題ではないかと思ひます。人間が人間として心を通わせ合うことができなくなる時代というものは、いくら文明が進んでも、不幸ではないだらうか。そういう途方もない人間疎外の時代が到来しようとしているわけです。だから、われわれが情意というものを洗練し、それを表現し、人と人の心をつないでいくことをしなければ、今までの一切の文明の営みというものが、全くむなしくなつてしまふような、恐ろしい時代が来ているのではないかという感じがするわけです。

私どもが「うた」を合宿教室で作りますのは、そういう情意の枯渇という状態から人間を回復する一番良い、一番根本的な方法であるという確信に立つておるからです。われわれが歌を作るということを皆さま方に強制するというのは、実に僭越の沙汰でございますが、それによつて人間の疎外というものの克服が必ずできる、少くとも現在のような人間疎外を克服する非常に有力な一つの方法であることを確信しておりますので、どうぞ虚心にわれわれの意図を受け取つて頂きたいと思つてあります。

さて、われわれが情意の重大さを強調いたしますと、論理と情意を対立概念と考へて、国文研は情意を強調することによつて、論理を軽蔑するののかという疑問を提出される方がありますが、決してそうではないのです。情意というものは、人間として不可欠のものでございますから、情意の欠落した人の組み立てた論理は必ず欠陥が出てくる。従つて、人間に関する科学の場合には、正しい情意というものに裏うちされなければ、人間の生活に密着した本当の正確な論理は出てこないであろうと思われまゝ。われわれは決して論理を軽蔑するわけではなく、正しい論理が駆使されるためには、正しい情意がなければならぬ。ところがその情意の錬磨ということは、現在どこの社会においても行われていないのです。家庭生活というものが、強いて言えば家庭生活の暖かさというものが、かろうじて現在の情意の生活を支えている。しかし一度社会に出たり、学園に帰られると、殆んど情意というものは無い状態であります。

ただ、情意というものと、感傷というものは違うのです。情意というものは非常に説明しにくいのですが、例えて申しますならば、心の中に溢れている泉のようなものだと思えます。そして、正しい情意というものは必ず結晶し、統一されていくものだという意味で非常に創造的なものだと考えられます。

現在の社会というものは、あるいは学園の風潮と申しますのは、非常に知的な面にウエイトが置かれまして、情意の生活というものが枯れている。この事実を是非直視していただきたい。皆さん方一人一人が、幸福になられるため、そして一人一人の幸福の上に日本人全体の幸福が築かれるために、本当の意味で心の中に溢れるような情意の泉がたたえられなくてはならない。センチメンタリズムというのは、流れて、そして消えてしまうものです。流行歌に歌われているような感情は、非生産的なもので、決して形にならない。流れて崩れてしまうものだという意味で、情意と感傷とは違います。歌を作れというのは、何かセンチメンタリズムで論理をごまかすのだからという風に考えられては困ります。絶対にそういうものではないのです。

作歌上の注意

時間の関係で、はしよって重点だけ申し上げますが、短歌は純粋な抒情詩で、焦点が一つに絞られていなければなりません。一首一文と申しまして、原則として一つの文章で一つの歌が

できるといふふうに言われています。例えば万葉の防人の歌に

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

というのがあります。この歌のポイントは「わが父母」というところにあります。優れた歌というものは、皆焦点が一つであつて、二つも三つも焦点があると、統一感のある、印象鮮明な歌になりません。だから、焦点が三つあるならば、その三つの一つ一つを中心にして、三つの連作ができなければいけないのです。とにかくポイントは一つであつてその他は、そのポイントの修飾とか、それを導き出すためのイントロダクションとか、そういうものであるべきで、ポイントが二つに分裂することは絶対に避けるべきです。

これは短歌と俳句の最大の相違点で、俳句は原則として焦点が二つあります。二句一章と申しまして、二つの句が一つの文章を成しています。例えば秀れた俳句を読んでみますと

荒海や佐渡によこたふ天の河

という句には、「荒海」という一つ概念と、「天の河」という一つ概念がある。その二つの概念の間には飛躍があるわけです。その飛躍が俳句の面白さなのです。だから俳句の面白さはその中に知的な面白さ、着想の面白さ、論理の飛躍の面白さをふくんでいると言えます。

俳句では論理の飛躍はむしろプラスなのですが、短歌では論理が一貫していなければいけないのです。

それから、自分の経験したこと、体験したことを詠むことが大切です。ところが、体験したことを詠めば、何でも歌になるかというところ、そうではないのです。そこにはやはり選択の行為というものが残ります。深く自分の心に残ったことを詠まなくてはいけない。しかし必ずしも深く心に残る体験ばかりがあるわけではない。選択に値するような経験がないという方があるかも知れません。しかし、歌を詠もうという気になつて物を見れば、今まで見えなかつたような自然が見えて来ることもあります。最初は強制によつて詠まなくてはならないという気持ちで詠んで下さい。エンジンがかかり出すと、あとは自然に回転して、すばらしい歌が出来る契機ともなりましょう。最初から感動的な経験だけを詠めといつても無理ですが、出来るだけ自分の経験を正確にみつめてゆくという姿勢が必要です。

それから、理屈を詠んだら歌にならないということとは正岡子規が言っています。例えば物理的な事実というものは歌にはなりません。「わが持ちし鞆は下に落ちにけり万有引力のある故ならん」というのは歌ではありません。萩原朔太郎が「大学は卒業したが社会では食えないといふ事実を知つた」というのが詩であり得ないことを長い論文に書いています。日記の一行ならそれでもいいのですが、人に訴えるものがありません。そういう社会的現象とか単なる事実とかいうものでは歌になりません。自分の心が本当に動いたなら、俺は大学は卒業したのだ、が、職が得られなくて悲しいとか、あるいは自分に職を与えてくれない社会が憎いとかいう風

な表現になれば歌になるわけです。

とにかく、何か心に触れたことがありますと、それを言葉にしなくてはならないのです。だから、言葉の選択があるわけです。まず経験の選択があり、次に言葉の選択がある。豊富な語彙を持つている人は、今の自分の感情は、この言葉によつて一番正確に表現できる。同じような言葉が幾つかある中で、この言葉が一番いいのだというふうに変換ができませんが、初心の方にはそういうことができない。ある一つの感情を表わす言葉がない、或いは持ち合せが一つしかないという方もあると思います。そこに表現の苦しみとか難しさがあつて、もどかしいなという気持ちになるわけです。自分の考えていることが正確に表現されれば、そこにある解放感があります。何かもどかしいという気持ちがある間は、やはり自分の本当の歌になつていないわけです。もどかしさがなくなるまで推敲するということが大切です。初心の方には難しいと思いますが、感動の波がそのまま言葉のリズムになつて来るようになれば、その歌は必ず人に伝わって行くと思います。

それから、先程も一寸申しましたように、沢山の経験を一首の中に詠みこんでしまおうと思つて詠めません。ポイントが沢山できて、分裂症的な歌になりますから、その時はその経験を分けて、連作形式によつて、全体で自分の経験を表現するというようにしていただきたいと思つています。

短歌は大体文語の定型詩ですから、文語の語法によつて作るのが原則です。しかし、最初から余り語法にこだわつたりしますと、かえつて難しくなりますから、最初は口語的発想でも、現代仮名づかいでも結構ですから、自分の思ったことを卒直に歌つて下さい。自分の本当の心を詠めば、必ず不思議に人が感動してくれるものです。そして、嘘や偽りを詠むと手にとるように判るものです。自分が思いもしないことを詠んでいると、相互批評の時に必ず班員の人からうそでしょうといわれます。だから、どうも素朴なことでもいいから正直に詠めばいいのです。合宿に来たからには、主催者の喜ぶように歌を作ろうなどと考えていただく、われわれの意図するところと全く違つたことになりまからご注意申し上げます。正岡子規は人を感動させる歌はまごころの表現だと言っています。まごころなどという言葉は現代という時代からずれてきているなどは言えないと思います。やはり、人間を本当に動かすのです。技巧は貧しいものであつても、真実の表現というものは必ず人の心を打つ。そういう経験を一度この合宿教室の中で皆さんがおもちになるとすれば皆さんの精神生活というものはきつと違つた次元になると思うのです。そういう一種の飛躍をこの合宿では非経験していただきたいと思うのです。今上陛下が雲仙にいらつしやいました時に、雲仙でお作りになつたみ歌があります。現在歌碑が立つておりますが、そのみ歌を紹介して置きます。

高原にみやまきりしま美しく群がり咲きて小鳥飛ぶなり

これは非常に素直なみ歌でございまして、天皇が人間であるなどとわざわざ言わなくても、国家生活における地位の相違を越えて、歌は心というものをつなぐ機能を持っていることを何よりも雄弁に語っておると思います。ともあれ、日本語を操り得る人で、人間らしい心を持っている人なら、必ず歌を作り得るはずです。どうぞためらわずに作ってみて下さい。

作品の批評

一昨日、短歌創作の手びきのような話を致しましたが、本日は皆様方の作品の二、三について、具体的に、少し緻密に言葉を直してみたいと思います。いずれ、班別の相互批評の時間もございまして、その時の注意を申し上げます。自分が高い立場に立って、相手の未熟な歌を笑ったり茶化したりするという態度は絶対に避けていただきたいと思えます。ここにプリントにしましたものは、ともかく作者の心の表現であるから、その表現を大切にするという態度、作者の言葉を大切にして、どういう気持でこの人はこういう歌を作ったのだろうか、その人の心になる修煉が必要だろうと思えます。全体的に言って、スマートにまとまった歌が多いという感じですが。ともかく歌の形はなしているというのが一番添削がしにくいのです。歌はもつと荒々しいもの、激しいもの、純粋なものが表現されている方が人の心を打つものです。田舎の土

俗品のような、ごつごつとした感じの歌がかえって人の心を打つので、なめらかな、スマートな歌というのは、案外人の心を打たないのです。それから、全般として社会人に比べて、学生諸君の方が見劣りがする。これは決して技術上の問題ではなく、真剣に社会に真向っているという姿勢において差が出て来ているのです。だから学生諸君も真剣になつていただければ、必ずいい歌ができて来るのではないかと思ひます。ではこれから具体的に作品の批評に入りたいと思ひます。

山の中ゆひとすじの煙ほのほのと青空のもとのぼりゆくなり

これは強いて直さなくても意味は通じます。「ひとすじ」の「じ」は「ぢ」でなければなりません。問題は「ほのほのと」という言葉なのです。朝起きて見ると、山の谷間のようなところから、朝餉の仕度をする煙が立ちのぼつていたという意味だろうと思ひますし、歌の体はなしておられます。「山の中ゆ」の「ゆ」は「から」という意味ですから、これを作った方は多少は歌の心得のある方でしょう。初心の方は作れませんから、あるいは「ゆ」という言葉を使いたくて作られたとも考えられますが、それは余りに邪推でしょう。それはそれとして、「ほのほのと」という言葉は煙の時には使ひません。新古今集の一番始めのところに、後鳥羽院の御歌として「ほのほのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく」というのがありますが、

「ほのぼのと」というのは、ほんのりと霞がかかっている状態に使ってあります。従って煙がほのぼのと空にのぼるといふのは間違いなのです。だから、風がない時に一筋の煙が青空にのぼっていくというならば、もつと素直に「山の中ゆひとすぢの煙まつすぐに青空をさしてのぼりゆくなり」というように詠む方がよいのではないでしょうか。少し文学的にしてやろうというので、お作りになった方は「ほのぼのと」にポイントを置かれたと思いますが、実際はそういう邪心をお出しになったところに、歌が素直でなくなつて、おかしくなつたのだと思います。私は見ていないので判りませんが、もつと正確な、实景に即した言葉、子規のいう「写生」が必要なのではないかと思われまゝ。次にまいります。

はるかなる想いをこめて雲仙の宿に今我はせ着きにけり

これも「はるかなる想いをこめて」というような言葉が、ムードの言葉なのです。「はるかなる想いをこめて」恋人に手紙を書くとか、そういう場合なら判るのですが、ここではそういう気持ではないと思うのです。ここでは、遠い雲仙のことを想っていた。その雲仙にいま私はやつて来たのだということ詠もうとしているのだ解釈します。すなわち遠くの地から、はるかに雲仙のことを想つて、早く合宿に行きたいと思つていた、その目的地にいま私は着いたのだという意味に間違いないと思います。ここで一番ひっかかりますのは「はるかなる想いをこ

めて」という表現が世間でありきたりの類型的な一種の感傷句であり、それに寄りかかっている点にあります。正確に言うなら「はるかにも想ひてゐたる雲仙の」というべきだろうと思ひます。次に「宿に今我はせ着きにけり」にも問題があります。「はせ着きにけり」というところの表現がオーバーなのです。「はせ着く」と申しますのは、たとえば飛脚が汗だくになつて着いたり、伝令が戦線の急を告げるために、息をきらしてやつて来たとか、あるいは肉親が今まさに死なんとする時に、かろうじて息せききつて帰つて来たというような場合に使うものです。気持はよく判るのですが、第三者の立場から見るとやはりオーバーなのです。オーバーだから人の心を打たないのです。だから、これはやはり「たどりつきけり」と言へばいいのです。「はるかにも想ひてゐたる雲仙の宿に今我たどりつきけり」と詠みますと、正確に詠んでいるので、オーバーでない方がかえつて人の心を打つでしょう。正確だから感動が出て来るのです。だから、できるだけ感動的に詠んでやろう、感動的に詠むためには激しい言葉を使わなければいけないというのは間違ひです。やはり自分の心を見つめて、それを一番正しい言葉で表現していくことが大切だと思います。

暗緑の大雲仙の山あひに朝日上りて足音しげし

「暗緑」というのがよく判らないのですが、これは暗いほどに木が繁つているという意味な

のだと思います。「朝日上りて」という表現から考えると必らずしも暗緑色の意味ではなくて暗いという意味を表現したいのだろうと推測しました。それから「大雲仙」という言葉ですが、「大阿蘇」とは言いますけれども「大雲仙」とは言わないのではないのでしょうか。一番最後の「足音しげし」というのは意味がよく判りませんが、夜が明けて廊下を行き来する合宿に集つた人達の足音なのか、外を通っている人達の足音なのか、よく判らないのです。「朝日上りて足音しげし」を、廊下をゆく足音であると考えるのは無理です。上の方が全部自然描写なのですから、そこで急に廊下に転換せよというのは無理な話なので、ここは廊下ですよという説明つきにならないと判らない。芸術というものは、それだけで完結していなければいけないのですから、この足音は廊下の足音とは言えないのです。そこで、上の方を少し生かしてみますと、「暗かりし雲仙岳の山あひも朝日上りて人の声する」とでもすれば一応よく判るでしょう。ともかく、外の描写としてならば「足音しげし」はオーバーです。銀座通りか何かなら別として、雲仙のユース・ホステルの側を通っている足音がしげしというのは不正確です。だから「人の声する」とか「人影の見ゆ」とか詠むべきで、廊下の足音なら、それがはつきりわかるように詠まねばいけないのです。そこがはつきりしていないので、何となく歌にはなっていないけれども、どうもよく判らないということになるのです。

我と彼友情のきずな強けれどしのびくる不安はらえどはなれず

この歌には詞書きがありません、自分と思想的に全く違うが、しかし非常に仲のよい友達が自分を送ってくれた時の連作短歌の中の三首目にあります。問題は「しのびくる不安」というのが概括的なのです。概念的といってもいい。漠然としてよく判らないでしょう。「しのびくる不安」というのはどういう不安なのでしょう。これを詠んでみますと、思想的な違いによつて、あるいは友情が破れるのではないかという不安としかうけとれません。そうでないと、あるいは友情が破れるのではないかという不安としかうけとれません。そうでないと、あるいは友情が破れるのではないかという不安としかうけとれません。従つて、その事実を詠めばいいわけです。「きづな」という言葉があるのですから、その縁語として「絶える」という言葉を使うのが自然でしょう。こういう風に直してみました。「我と彼の友情のきづな強けれど絶ゆる日あらばいかにわがせん」私はどうしよう。本当に不安だ、何とかして友情を守りたいという気持はやはり届くのではないでしょう。そうして、その友情の強さは、やがて思想的な差異というものを越えて、本当に心の通い合いができるようになると思います。この歌を作られた方は、本当に歌の修練をして、友情の世界を守つていただきたいと思います。

雲仙の山の姿の雄々しきにわれの姿は圧倒さるる

これも一応歌の体をなしておりますが、問題は「山の姿」という言葉と「私の姿」という言葉が、意識的に対照されているところにあります。そこに理屈が入ってくるわけです。雲仙の

山の姿と、自分の姿を対照してみると、自分の姿が小さいのは、物理的な法則ですから、そういうものは歌にならないわけでしょう。従つて「圧倒される」のではなくて、されるような気持がするというのが本当なのでしようから、「雲仙の雄々しき姿仰ぎ見れば圧倒さるる如き思ひす」といへば、多少はよくなります。圧倒というような言葉が、歌の言葉としては一寸未熟ですけれども、こういうように直せば、自然の偉大さに打たれている自分の感動が出てきます。原歌のままでは、物理的法則にしかすぎなくて、感動が全く出て来ないところに欠陥があります。

かなかなと入日をつぐる蟬の声きよりの疲れもうすれゆるくなり

これは大体まとまつておりますけれども、問題は「入日をつぐる」という言葉です。「入日を告ぐる鐘」とは言いますが、これも、「入日をつぐる蟬」とはいわないでしょう。偶然に日が入っている時に蟬が鳴いていたということなのですから、「かなかなとひぐらし鳴きて日暮るれば」というように上の句を直せばよいと思います。あるいは「日暮るれば」の代りに「夕されば」としてもよいと思います。ともかく「入日をつぐる」というような言葉を古典のどこかで読んだようなのが心に残つていて、面倒くさいからあれにして置けというような、安易な、なげやりの表現に思えるのです。だから訴えてくる力が弱いのです。

あどけなく笑ふひとみも清かりし旅の乙女に心ひかれぬ

これは形の整った歌になっているわけでしょう。どうしてこの歌が問題になるかといいますと、こういう発想のしかたは、本当の自分の痛切な経験がないのです。なんとなくムードを表わしている。だから、やはり非常に型にはまった発想です。「清いひとみ」があり、「旅」があり、「乙女」があると流行歌ができるのです。例えば少女雑誌などのさし絵か何かを思い出させるようなイメージを喚び起されますが、そこに本当に生きた、生命のある年頃の娘さんの姿は浮んで来ないでしょう。何となくすらすらとよまれていて、「近代的」なのです。そのスマートさが欠点なのです。それから、もう一つ言葉の使い方の間違があります。「あどけない」という言葉は、少女とか、童子とか、小さい子供を形容する言葉なので、「あどけない乙女」というのは少し頭が足りないかと解釈されても文句はいえない。言葉の約束というものは恐ろしいものです。この歌をお作りになった方は、既に歌というものの作り方はご存知だと思いますから、もう少し切実に、痛切にお詠みになることが大切だと思います。そうすれば、あなたが歌というものについて持つておられる一種の固定した概念を打破して、真実の表現を獲得することが、きつとおおできになると信じます。

汽車に船バスに乗り継ぎて今やはや合宿の地へ胸は高鳴る

自分の乗った物を全部書くというのは、私の言う「正確さ」ではありません。小説とか記録とか言うものは、その性質から言つて、全部書いた方がいいのかも知れません。しかし、歌の場合は「乗り継ぐ」という言葉によつて暗示される筈ですから、「汽車に船に乗り継ぎてはや合宿の地へ着きにけり胸は高鳴る」とすればいい歌になると思います。

時間の関係で、批評はこの程度にして、少しいい歌を読んでみようと思います。四首の連作の歌です。

梅田さんのオリエンテーションを聞きて

ひたひたと寄せる波のそのままに君のおもひのひたに迫り来ぬ

きびしくも生きてありしかみ言葉の静かにはあれどその力強さよ

聞くうちにおのが心の統べられてあらたなる力の湧き来る覚ゆ

生きた言葉を聞いた時の感動が、そのまま波打っているような歌です。次は国文研の徳永正巳さんの歌、お役所の忙しい仕事の寸暇をさいて来ていただいている方の歌です。

はげましつはげまされつつ道を求め求めつづけし十まり一とせ
年ごとに若きいのちのあらたなる友のまなざしかがやきて見ゆ

同じく国文研の長内俊平さんの歌です。

山の端に陽の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく
はかなかる命のゆゑか息をつくとまなきがに鳴きつづくるも
病める友集ひえぬ友のねむごろにたのむとのりしことばうかびく

ここに参加していない多くの人々のまごころによって、この合宿が支えられているのです、この短い合宿教室で、ここに三百人足らずの方がお集りの中でも、既に第二班の班長福島君の弟さんが水死されるとか、十三班の方のお母さんが危篤とかで帰られた方もあります。人生というものは本当にはかないものです。はかないものであるから、そのはかない命を、何を目的にして燃やすのかということが問題です。そのはかない命を、何か永遠のものにつなぎたいというのが、すべての人の心にある本然の欲求であらうと思います。そういう気持が短歌という形式に生命を吹きこむのだと思います。

私は、歌というものは、言葉によるコミュニケーションが絶望的である、不可能であるという認識に対する、一つの果敢な闘いであろうと思います。本当にまごころを詠んだ歌は、今のいくつかの例でもわかるように、必ず人の心に響いて来るものである。緊張した生命からは、必ず緊張したしらが生れて来るものです。そういう確信をもつて、合宿の残りの日程ととり組んでいただきたいと思えます。

(福岡県立若松高等学校教諭)

年
間
活
動
報
告

この一年の歩み

—城島合宿より雲仙合宿まで—

中央大学商学部四年

磯貝保博



私達の学問と生きかた

——昭和四十年八月城島合宿——

読書会の始まり

十人委員会結成

地区別小合宿

比叡山、西教寺合宿

——春季「結集合宿」——

薬師寺女子合宿

学内活動から雲仙合宿へ

私達の学問と生き方

——昭和四十年八月城島合宿——

私達の大学には数多くの学友がいる。ある人は政治学を専攻し、ある人は法律を修めている。しかし、こうした数多くの学友の中に私達は本当に心から打解け、語り合うことのできる友を、一体何人持っているだろうか。尊敬し、信頼しうる師を持つている人がはたして何人いるだろうか。学問を志して大学に入った以上、自ら求めようとする学問を深めてゆこうとするのはいうまでもないが、さらにそこで生涯の友を見出し、師にめぐりあいたいと願うのは、誰しも同じところである。だが学園の中では、そのような願いをどこかにおきわすれてきたように、多くの人は自己の殻に閉じこもって、友とのつながり、師とのつながりをほとんど諦めたように毎日を送っている。他から犯されまいとするあまり、友との語り合いも、その場かぎりのとりとめのない会話で終わっている。一方こうした中で、尖鋭化された学生運動家達は過激な闘争的な言葉をまきちらしているが、私達の多くはそれに対しても何らの反応を示すこともなく無感覚に流されているのだ。

たしかに、大学はマスプロ化されている。しかし、罪は単にそうした制度機構のみにあるのではない。それ以前に、まず私達が取組まなければならぬ問題があるはずだ。私達が学問に

取り組む姿勢はいかにあるべきなのか。青年として学生として、いかに生きべきなのか。それを真剣に自らに問う以外に、この無気力な、惰性の中で動いている大学生生活の頹廃を救う道はないのである。

私達が参加した国民文化研究会主催の「合宿教室」はまさにそうした問題に触れようとするものであった。我々はそれまで理論体系を追求するのが学問であると考えてきた。だがこの合宿教室では、真実の学問は私達青年の生き方、心の正しいあり方をぬきにしてはあり得ないと教えられた。心の正しいあり方とは、友の言葉に耳を傾け、友の心を正しくくみとることであり、さらに自分の心を開いて、思うことを卒直にありのままに言葉にして伝えてゆくという姿勢を確立することであった。だがこうしたいわば心の作業ともいべきものを、日常の大学生活の中で経験したこともなかった私達にとって、合宿生活の日々は極度の緊張感と苦痛とをもたらした。自分がいままで心の底に隠していたものが一つ一つはがされてゆくように恐ろしくもなった。しかし何とかして自分の思いを言葉にし、拙いながらも率直に友に語りかけてゆこうと努力する時、そのひたむきな言葉は友の心を動かしていった。私達は「生きた言葉」というものを実感した。自分のかたくなな心を打ち破ろうとする苦しさに打勝った時、そこにはお互いに心と心とが通じ合えるのだというほのぼのとした気持が湧きあがってきた。真心に裏打ちされた言葉は力強い感動を人々の心に呼び起していった。一昨年昭和四十年八月、別府

温泉の裏手にあたる城島高原で行われた合宿教室の一コマ一コマが、いま鮮やかに私達の胸によみがえってくるのだ。世界的な数学者として有名な岡潔先生はそのご講話「日本の情緒について」の中で、私達に日本人としての生き方を指し示してくださった。先生は「いま日本で行われていることは端的にいうと、日本人という魚にとつてかかせない日本の情緒という水を、他の水にとりかえようとしているのだ」と語られた。その言葉は、日本という祖国を忘れ、あまりにも自己中心的となつてしまつた私達の心に鋭く迫つてきた。岡先生の言葉を借りていえば、「どうしても許せないものに対しては命をも断とうとする、みずみずしい情感」を私達は失つてゐるのだ。富山大学の岸本君は「私はこれまで岡先生のいわれる『日本の心情』に触れるたびに、心の一方で感激しながらも、他方ではそのような自分を何て封建的な奴だろうと軽蔑し、そうすることがいかにも人間らしいことのように思いこんできた。それは寂しいことでした。しかし今日からは誇りをもつて日本の情緒に接し、素直に感激できる自分をとりもどすことができず。」と合宿の終つた後の感想文に述べている。日本人としての自覚を根底にもたないで、私達は何を語り何を行うことができようか。

この心は古人が心をこめて記した書物に真剣に取組んでゆく時、さらに深まつてゆく。合宿教室で体験した古典輪読の場は、私達に読書姿勢の根本を教えてくれた。単に、知識的なものを吸収するのではなく、著者の言葉にこめられた精神的、情緒的な内容をこまやかに辿るので

なければ、古人の心を心とすることはできないことを身をもって体験したのである。

この岡先生のお言葉をはじめ諸先生方の言葉は参加者すべての人の心にはげしく迫ってきた。

「生きてゆくことの支えになる素晴らしい言葉を先生方からお聞きしたのは最大の喜びです。この言葉を真に自分のものにするのが今の私のすべきことです。何だか自分の進むべき道がぼんやりではありますが、わかってきたようです。又自信も出てきました。」（京都大学、福島義治）私達は現在の学園で忘れていたものをこの合宿で体験的に知ることができた。その体験は私達一人のものとしておくのではなく、一人でも多くの友に伝え、学園の姿を一日も早く正してゆかねばならない。城島高原を下っていった一人一人の心の中にはそうした決意が秘められていた。

（以上の城島合宿についての詳細は「日本への回帰」第一集を参照されたい）

読書会の始まり

大学の授業が始まると同時は、大合宿に参加した友は大学別、あるいは地区別に集り、読書会が始められていった。東京地区にはすでに三年前から行われている読書会があった。月三回、八の字のつく日に開かれるところから「東京八日会」と呼ばれ、その趣意書には、「私達

は『合宿教室』の体験を活かしながら、日本の思想の正しい系譜を求める。そのために、できるだけ原典に直接触れ、併せて敷島の道としての和歌創作の実習に励む。」と書かれている。この趣意にもとづき月二回の古典輪読と、一回の和歌創作とそれをお互いに批評しあう場所をもつことになった。輪読テキストには吉田松陰の「講孟余話」が選定された。このテキストは城島合宿で玖村、小柳両先生の講議に深い感銘をうけ、吉田松陰の生き方、学問の姿勢をもっと深く勉強したいということで、八日会出席者全員で選んだものであった。こうして私達の活動は合宿で得た体験をもとに、一冊の書物を皆で心を一つにして読み合おうとする努力から始められた。こうした活動は時を同じくして、九州福岡でも始まった。九州大学の学生を中心とした読書会「九大信和会」は、昨年引続き「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（黒上正一郎著）を輪読することになった。著者が命をこめて書き残していた言葉は、くりかえし味わっていくうちに、前にはそれほどまでに感じていなかった言葉が思いがけなく私達の生き方に新たな指針を与えてくれる時がある。著者の命に深く触れてゆくためには本当にすぐれた書物を持続して読み続けてゆくことが必要なのだ。

京都大学、神戸大学、岡山大学、鹿児島大学、長崎大学においても合宿に参加した友らは、膝をつきあわせながら読書会を行っていった。大合宿で体験した緊張した精神生活はこうした各地の読書会に引き継がれ、友とのきずなが堅く結ばれていった。

十人委員会結成

十月に入つて各地の読書会が軌道に乗り始めるとともに、お互いに活動状況を交換しあつて、横の連絡が深められていった。各地から寄せられる手紙の中で、合宿で知った友の言葉を見出したとき、そこに友とのつながりが感じられ、心強い励ましとなった。遠く離れた友らの友情はそうした励ましに支えられて逞ましく育つていった。

十月十九日、各地の読書会の代表十名は、四十一年度の夏季大合宿にかけて、私達の全体的な活動を具体化するために東京に参集し、ここに磯貝保博（中大）、原正昭（玉川大）、岩越豊雄（亜細亜大）、井上慎一（京都大）、福島義治（京都大）、寺川真知夫（神戸大）、古川修（九州大）、稲津利比古（九州大）、森重忠正（長崎大）、北島照明（鹿児島大）、の十名によつて、「十人委員会」が結成された。この十名は向う一年間、学生活動の中核体として新しい同信の友を求むべく活動してゆくのだ。先に述べたような頹廃した学生生活と、政治主義に偏した自治活動の中で、一人から一人へと粘り強く、我々の活動を拡げてゆかねばならない。それは必然的に思想的な対決にぶつかり、時には打ちのめされるような苦しみを味わう。だがそれ故にこそこの「十人委員会」は十人のゆるぎない団結と信頼感を確立するための意志確認と交流を強く要請されたのである。

一泊の真剣な討議の結果、次のような点が確認された。

一、十一月下旬を期して、東京・京都・福岡の三ヶ所で二泊三日の地区別小合宿を行う。合宿参加学生にかぎらず広く新しい友にも参加を呼びかける。合宿後はレポートを作成し、相互に交換する。

二、地区別小合宿の成果を持ち寄って、来年三月に春季「結集合宿」を開く、場所は関西、運営の一切を学生自身の手によって行う。

三、来年五月、合宿予定地雲仙で「十人委員会」をもち、大合宿に備え、勧誘、大学巡訪を展開する。

以上三点が特に確認され、さらに「十人委員会」の充実した活動を期するために、文集を二回発行することになった。文集の名は「雄叫（おたけび）」とし、私達十人の内心のおもいを余すところなく相互に表現しあうものとした。現代日本の混迷を打破し、清新な魂を鍛えあげようとする私達のおもいが「雄叫」という言葉にはこめられている。ここに十人の結末はなされた。十人の心の一つにして、来年の大合宿にむけ、全国の学友に呼びかけてゆく体制ができた。あがった。

十人委員会が結成された十月二十日の夜は東京霞ヶ関の国立教育会館において「社団法人国民文化研究会」の結成十周年記念式典が行われ、十人委員会会員及び在京の学生の多くが参列

学生代表として九州大学の西元寺紘毅君が挨拶した。合宿の講師としておいでいただいた木内信胤先生、花見達二先生をはじめ各界において日本の運命を背負っておられる数多くの顧問、来賓の方々が祖国の運命をおもい、若い学生に寄せられる切々たるお言葉に接して、身のひきしまるおもいの一夜であった。

地区別小合宿

「十人委員会」で確認されたように、十一月に入ると関東・関西・九州の三地区でそれぞれ合宿計画が立案された。三地区の合宿案内には「合宿教室」参加者のみならず学園の新しい友にも参加の呼びかけがなされていた。九州大学の古川君は九州地区小合宿に参加の知らせを寄せた友ら一人一人に次のような返事を書き送っている。「個人の独立なくして、国家の自立、人類の安寧を望むことはできません。永久の生命を、感得する『ますらを』がふえてこなければ、今日の混迷を打ち破ることはできません。諸兄の奮闘を祈念する所以です。」こうして十一月二十日から三日間の「九州地区合宿」を始めとして、次々に合宿が行われていった。

福岡の太宰府で開かれた「九州地区合宿」は九州大学・鹿児島大学・佐賀大学・宮崎大学・福岡大学・鹿児島経済大学の学友十九名の参加のもとに行われた。合宿の内容は先に「読書会の始まり」の中でふれたように、九月から「九大信和会」の輪読会で使われていた「聖徳太子

の信仰思想と日本文化創業」を三日間にわたって読み通すというものであった。この本は「国民文化研究会」の会員の方々が心の拠り所として、戦前から今日まで何回となく読み続けてこられたものである。著者黒上正一郎先生は、大陸文化の渡来と閩族の専横の下に国民的帰一の大道を念じて国政を担われた聖徳太子に深く心を動かされ、三十年の短い生涯に全身心を傾けてこの本を書き残されたのである。

合宿で各自が担当して記録した文集の中で、友らは次のようなおもいを綴って友に伝えようとしている。

福岡大学の江口君は「何となれば則ち若し天下の道理を論ぜば、悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む」という維摩経義疏の太子のお言葉にふれ、「なんとはなしに生活していることがなんと愚かなことか、社会を国家をまさに己れのみが悟ったように批判し、攻撃し、ますますなるものを歪めて見ていた己がなんと恥ずべきことか、こう考えれば考えるほど、ますますひざまづかれずにおられないような心地がしてくる。」と述べた。江口君の体験にてらして吐露した言葉は聞くものの胸に直接響いてくる。九大の原田君はそうした友の真摯な姿に感動して次のように歌った。

みづからの思ひのたけをのべむとする友のおもわはかがやきてをり
一句一句思ひをこむる言の葉のたかきひびきはわが胸をうつ

翌、二十一日からは「関西地区合宿」が燃えるように色づいた紅葉に包まれた京都日向大神宮で始まった。前日には九州太宰府に集った友らから次のうたが電報で寄せられた。「ミトモラノイノチノカギリハゲミヨルスガタシノベバチカラワキイヅ」参加者は京都大、岡山大、神戸大の諸友及び先輩十七名、それに滋賀大学の吉田靖彦先生、大谷大学の山本榮吾先生、さらに九州の若松から国文研の山田輝彦先生もはるばるとおいでいただいた。日程には先生方のお話のほか古典論読、和歌創作、数名の学友による研究発表が組み込まれていた。研究発表は、いづれも専攻を異にするとはいえ、学園生活の中で共通する問題が提示された。

神戸大学文学部の寺川君は、「古典を読む」と題して、日ごろ目にする多くの歴史書の中で、歴史家が史実を自分のハカリにのせ、都合のよい部分しか取り上げていないことを指摘し、さらに日本書紀の山背大兄王の言葉に触れながら、史実の底に流れる古人の心に直接触れようとしなければ歴史は生きてこないと結んだ。又、京都大学美学専攻の釜本君は美術作品を鑑賞するときの姿勢を次のように述べた。「物は脆弱な精神では立ちむかうことのできない確かな存在である。それゆえ、物につきあうためには自己は裸にならなければならない。そのとき始めて、物は私達の心を豊かにしてくれるのである。」既製の観念やイデオロギーを通してではなく、まず私達はありのままに物を見、直接物に接してゆかねばならない。しかしそのためには私たちは自分を裸にするだけの勇気が必要なのだ。

地区別小合宿の最後は「関東地区合宿」であった。十一月二十七日から二泊三日、都心とは思えぬ静かな明治神宮で行われた。参加者は早大・中大・亜大・東京工業大・東京外語大・明大・玉川大・明治学院大それに国民文化研究会会員の方々を含め二十名であった。亜細亜大学の夜久正雄先生をお迎えし、「明治天皇御製について」と題するご講義をお聞きした。先生は明治天皇御製を学生時代から毎日かかさず拝誦してこられていた。御製は先生の長い精神生活の抛り所となつてきた。そうした長い御製との触れあいを通して、明治天皇に対する真摯な姿勢が言葉の端々ににじみでてくるご講義であった。

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり（明治四十一年のお歌）

「歌は私達が直接体験したことを三十一文字の中にまとめあげたものです。したがって作者の心持ち、呼吸というものが歌の調子の中にこめられている。だから人の歌を読むということはその歌を作った人の心持ちをもう一ぺん味わってみるということです。明治天皇の御製を私達が拝誦することは、明治天皇がお歌をお作りになられたお気持ちを我々が直接自分の心の中で再現するということです。と同時にその精神を自分より高い段階のものとして仰いでゆくことです。」と先生は述べられた。歌は会うことのできない人、亡くなられた人の精神を一番直接に味わうことのできる方法なのだ。私達の精神生活は具体的にはすぐれた人々、すなわち人生を本当に価値あるように生きぬいた人々の言葉を心に浮べながら、正しい道をもとめて進んで

ゆかなければならない。「朝早く、明治神宮拝殿に参拝して、御製を拝誦し心すがすがしい気持ちであつた。御製を拝誦するという意義が体験的にも理解できたように思います。」亜細亜大学の岩越君の言葉は合宿に参加した全員にかやうものであつた。かくして、三地区の小合宿は終り、合宿後それぞれ合宿レポートを作成した。来年の大合宿を目指して、ここに三地区力を合わせての前進が始まつた。年の瀬も押し迫つた十二月二十六日、「十人委員会」の学友は、各地の小合宿の成果をもちよつて、翌年三月に予定されている春季「結集合宿」の計画を進めるために福岡市郊外の太宰府に集まつた。すでに京大の井上君を中心とした関西グループによつて、大津市坂本の名刹「西教寺」が合宿地として選ばれていた。

比叡山、西教寺合宿——春季「結集合宿」

期末試験も終わつた三月十五日、三泊四日の日程で地区別小合宿に参加した学友を一堂に会して、比叡山合宿は挙行された。参加学生は三十九名、早稲田大、中央大、亜細亜大、玉川大、東京工業大、明治学院大、京都大、神戸大、岡山大、富山大、九州大、福岡大、長崎大、宮崎大、鹿児島大、鹿児島経済大の諸友であつた。昭和四十年夏季大合宿も雲仙ユースホステルとすでに決定されていたが、この三十九名は雲仙合宿の幹部学生と目される人達であつた。合宿地西教寺は比叡山を背にし、琵琶湖を一望のもとにみわたせる名勝の地であつた。長い

歴史のあいだ幾多の苦難にもめげず仏教に命をかけた数々の僧が修業したこの地は、われわれの研鑽の場所としては申し分のないところであつた。又この場所は奇しくも昭和十七年に国民文化研究会の先生方が学生時代、日本の行く末を案じて合宿を営まれたところでもあつた。

合宿の始まる前日まで京都で合宿地との交渉にあたつていた京大の井上、溝江両君が御家族の不幸のため突然参加できなくなつた。合宿の前途に一抹のさびしさを感じさせたが、思いがけないことが次々におこる人の世のただならぬ姿が参加者の胸を強くひきしめた。合宿は目前に迫つていた。春とはいえ湖から吹いてくる冷い風の中を次々と友らが集まつてきた。開会式は一時からの予定であつたが、遠く九州から来た友は午前中に到着し、すでに班分けされた部屋で荷物をおろして待つていた。

鹿児島大学の川井修治先生が次のように挨拶され合宿は始まつた。「我々が日頃経験している教師と学生という立場でなく、同じ日本人同胞として共に考えてゆこう」教師という立場を離れて一人の日本人として語ろうとされる先生の言葉の中に、我々はしみじみとした心のつながりを感じて、勇気が心の底から湧いてくるのであつた。続いて参加学生一人一人の自己紹介と所懐表明に入った。

夜に入り、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を全員で輪読した。一人の友が本の一節を読んだあと感想を発表し、それをもとに四十人全体でさらに深めてゆこうとするものだった。



(てに宿合寺教西)

た。四十人全員の心が一字一句もおろそかにせず投入されていった。輪読は班にかえつても続けられ「大学生でありながら国家のことを真剣に考えたことのない自分が恥しい」、「自分は今まで自己完成ということのみに力を注いできたが果してこれでよいのだろうか。」というような真率な意見がかわされた。

二日目の午前中は学生三名による研究発表が行われた。最初に、長崎大の森重君は「日本の労働運動」と題して、専攻の分野から労働運動の歴史、政治との関係など整然と説明してくれた。続いて立った九州大の古川君は「中共の対日政策」と題して、「人民日報」「紅旗」などの資料を中心に中共の世界革命戦略、特に中間地帯論の本質を述べた。暴力革命を公然と表明し、武力闘争を正当化する中国共産党の政治姿勢がはつきりうちだされている限り、隣国としての日本はいかにこれと対処してゆかねばならないのか。当然日本

の国防問題と関連して議論が進められた。最後に立つた鹿児島大北島君の研究発表は「日本人の国防に対するエゴイズム」と題するものであった。北島君は現在一般に行われているさかな国防論に対して「大部分の日本人は外国の青年の血と汗で日本の安全が保たれているという厳粛な事実を無視したところで言葉を操っているにすぎないではないか。」と指摘した。そして、国防を単に軍備問題として論ずる前に、国防意志を統一するという基盤がまず叫ばねばならないと訴えた。つづいてこの合宿に御出席いただいた神戸大学の黒岩先生からはげましの言葉をいただいた。先生は比叡山の僧兵の動きと現代の政治運動を対比しつつ、時代の危機を上げしく訴えられた。午後に入り、福岡県若松高校の山田輝彦先生から和歌創作と和歌の相互批評についての御指導をいただき、つづいて全員比叡山に登山、根本中堂に詣でてうっそうと繁る杉木立の中で歴史の重みをしみじみと味わった。

夜に入り、国民文化研究会理事長の小田村先生のご講義は参加学生全員の心に深い感動と勇氣を与えてくれるものであった。先生は特に個人と国家の問題にふれられ、「個人と国家は文化における補足概念を構成しているものである。文化の根底は個人にあると同時に、風俗習慣を共にする伝統的な同一国語民族国家においては、国家も又文化の具体的な基底をなすものである」と説かれた。国家といえは国家権力を意味し、個人とは矛盾する概念であるというような思考方法に慣れてきた私達にとって、先生のご講義はこうした思考方法そのものの間違いを

指摘するものであった。さらに先生は国家主義と天皇の問題にもふれ、「天皇は国家主義に通じ、危険なものという思考方法のもとに、日本人が長い歴史と伝統を通して一つの文化価値として認めてきた事実を否定し去ろうとしている。」と強く述べられた。最後に「一誠兆人を感じしむ」という吉田松陰の言葉をひきながら、「正しい道と思ったら勇氣をもつて一人でもやっけてもらいたい。」と結ばれた。

先生のご講義のあと、慰霊祭が行われた。慰霊祭は我々を守りはぐくんできた先人の御霊に對し、我々の心をつなぎ、祈りを捧げることなのだ。慰霊祭という我々にとって始めての体験は、さまざまな感慨を呼び起し、赤々と燃えさかるかがり火の中で、我々はこの美しい日本がただ存在するのではなく、幾多の先人により守りはぐくまれて来たのだということを痛切に実感した。友はそうした感動を格調高く、献進歌に歌いあげていた。

我がいのちかりそめならず日本をうけつぎ守りしみ祖思へば
亜細亜大 岩越豊雄

国のため世々につくせし人々の御魂しのびつつ静かに祈らむ
岡山大 伊藤三樹夫

三日目は、川井先生のご講義から始まった。大学で西洋史を講義されている先生は、マルクス・エンゲルスの「共産党宣言」をとりあげて、共産主義の根本的批判をされた。一字一句の

言葉づかいを厳しくとらえ、階級闘争の内容を一つ一つ歴史事実にもとめてこまかに論述され、階級史観の曖昧さを指摘された。歴史を圧制者と被圧制者というような対立物を通してみてゆく時、歴史は固定化されてしまう。歴史を学ぶ時、我々は生きた人間の歴史事実というものを見落してはならないのだ。続いて伊勢神宮の幡掛正治先生が日本における神道のもつ深い意義について醇々と話された。

昼からは、学生運動について話し合う時間を持った。先ず早大の今林君から、一月二十日以後授業料値上げ問題に端を発し、学園封鎖、警官導入という異常な事態を引起し、未だ収拾のつかない早大紛争について説明があった。彼は早大の一学生として一日も早く、学園を正常な状態に戻そうと他の学友と共に立ちあがっていたが、その間において学内サークル、自治会内部の動きなどを苦心して調べ、「この度の事件は単なる学費値上げ反対運動ではなく、日共が革命の前哨戦として学内の混乱を利用して、反日共系の失脚を図り、自治会を一挙に民青が独占できるように紛争を拡大したものである。」と報告した。学問の場である学園が、学生運動家の暴力的な行為によって破壊されている様子を伝える彼の顔には、激しい憤りがありありとうかがわれた。今日、自分の大学では何も問題が起きていないから学生運動に無関心でいてよいなどとはいえなくなって来ている。今後ますますこうした大学紛争が起ることが予想される中で、私達は自分の大学の自治会活動の実体を正確にみきわめ、これと対処してゆかねばな

らない。二時間にわたる討議のすえ、私達は本当に現在の学園の空気を正そうと思つたら、たとえ相手が何人であろうと勇氣をもつて立ち向かつてゆくべきだ、と確認した。その夕刻小田村理事長は帰京されたが、帰京の車中よまれた次の六首のうたがその夜おそく東京から打電された。合宿に寄せられる先生のあついおもいは参加者全員の胸深くしみて、この道につながることのきびしさが、今さらのようにひしひしと感じられたのである。

心豊かに元気に合宿を終えられるを祈りつつ

近江の海琵琶湖のかたに我が思ひの馳せゆき止まらずさかり来ぬれば
きびしかることのみ多く笑みひとつ見せず去りしを許したまへや

一夜なれどあひ見しわがみ友らのま光るまなざし今もうつつに

我が思ひのたけをつたへし言の葉は足らはぬなれど聞きてたばりし

夕闇のこめしみ寺のきざはしに見送りにける友らなつかし

み国守るみおやのみ靈祭りにしきのふの夜半のことも著けくしる

最終日は、福岡県立修猷館高校の小柳陽太郎先生が黒上正一郎先生の「教育思想家としての伝教大師」という著作のおことばにふれながら講義をされた。「凡そいかなる教育理念が説かれ、その内容が学問的に精緻であつても、これを人間生活即ち具体的には国民生活の上を実現すべき体験的基礎を欠く場合には個人的思想になつてしまふ。」私達が学問する上で先ず始め

に考えねばならぬ根本的な問いかけであった。

三泊四日の合宿は瞬時のごとく過ぎ去ってしまった。合宿に参加した四十名は、これから学園に帰って、新学期から新たに入学してくる新入生にむけてまず最初に我々の思いを伝えてゆくのだ。「日本の命脈を断とうとする者に対しては身を挺してでも戦え、という言葉の実感がますますつよくなる。足らぬ点は多々あるけれども、我々も一日本人、志を同じくする友らと雄々しく生きてゆきたい。」と述べる早大の今林君の感想文の言葉は「学生運動は自治会の如き運動しかないと思ったり、自治会に反対しながらも沈黙している友らに対し、我々が活発に運動することによって手を差しのべたい。」という九州大学の島津君の学園へ帰ってからの積極的な姿勢と呼応して、参加者全員の気持を表わすものであった。閉会式後、梅の咲きにおう境内で友らは雲仙での再会を約し、新学期を間近にひかえた学園にもどっていった。

薬師寺女子合宿

第十回の桜島合宿以来、参加女子学生の間で続けられていた「和歌通信」は、城島合宿以後「きづな」という題で装いを新たにしつつ、お互いの心の交流が深められていた。城島合宿に参加した女子学生達は、岡潔先生の「日本の情緒について」のお話に特に深い感銘を受けていた。「特に女性の方は日本の情緒の中に住んで下さることをお願いしておきます。」といわれた

岡先生の言葉が一人一人の胸に深くきざまれていた。

合宿も終り、毎月一回発刊されていた「きづな」によって交流が深まってゆくうちに、いつしかもう一度女子学生だけで、合宿を開き、女性の生き方について話し合ってみたいという声が始まっていった。そしてここに男子学生中心に行われてきた小合宿に加え、女子学生として始めての小合宿が開かれることになった。東大の脇山さん、武蔵野女子短大の田川さんの二名を中心として合宿計画が立案され、三月二十八日から二泊三日の予定で、奈良薬師寺に集った。参加者は先の二名の他、梅田（東京女子大）、小田村（学習院大）、水野（新潟大）、勝山（玉川大）、長内（女子栄養短大）それに国民文化研究会の先生方を交え計十二名であった。

白鳳文化を代表する薬師寺養徳院僧房の一室で日程は進められていった。女子合宿であるだけに、女性の生き方ということが問題になった。

一日目、脇山さんは「松陰にゆかり深き婦人」と題して研究発表を行った。生母杉滝子の女として、母としての生き方を中心として話した。母の無言の感化がのちの松陰を育てていったことを知ることが出来た。翌日は前の夜からの雨もあがり、薬師寺境内の緑はことに美しかった。午前中は夜久先生から明治天皇御製並びに、防人の歌に関するご講義をお聞きした。万葉集におさめられた防人の歌には万葉時代に生きた、名もない人々の真心があふれている。先生のご講義は任地におもむく兵士として、父母を慕い恋人をなつかしむ防人のおおらかな心情の



(岡 潔先生をかこんで)

躍動をさながら今の世に伝えてくれるものであった。

午後は和歌創作をかねて奈良市内に出、その途中岡
 潔先生のお宅を訪問し、胃の手術をなさって静養中の
 先生をお見舞した。すでに城島合宿の班別討論の時間
 に、岡先生御夫妻の御警咳に接していた友らは、ご静
 養中にもかかわらず、わざわざ玄関先に出てこられた
 先生のお姿に接して皆感激して思うように言葉もでな
 かった。合宿の時と同じように先生のお側に付き添っ
 て出てこられた奥様を見て、お宅にあるときの奥様の
 姿を、合宿の時より一層身近に感ずることができた。

病おし玄関先にいでたまふ師のまなざしはやさしか

りけり

学習院大 小田村静代

簡素なる師のお住居の片隅に群がりさける三色すみ

れ

玉川大 勝山啓子

最終日は共同通信社の島田先生はゆれ動く国際情勢
 について詳細な解説を加えつつ、日本人の生きてゆく

道にふれられ、更に小柳先生は現代の人々が国家ということを考えなくなつてしまつた風潮を、明治以降の文学にあらわれた人間観と国家観、さらには幕末の思想運動にも触れながら説かれた。

その夜は折しも薬師寺で行われていた花会式に参列した。薬師三尊の前に飾られた色とりどりの造花、春とはいえ身もひきしまる寒さの中に流れてゆく読経の声、すべてが遠い昔に私達をさそうような厳肅なひとときであつた。

東京大学の脇山さんは合宿の終了間際に書いた感想文の中で「国家意識の薄い女性の育てる子供は大きくなつても、ますます国家意識がなくなるばかりである。これでは日本の国はどうなるだらうか。身をもつて育児の際に示す手本をどのように身につければよいか、これから学んでゆきたいと思う。」と述べている。

母となることを思へばこの身さへおろそかならじと友は語りぬ

武蔵野女子短大 田川美代子

人として生きることのみを強調し、女性として生きることの厳肅さをさけて通ろうとする現代の風潮の中で、日本の女性として生きていこうと心をととのえることは決して安易な道ではない。ささやかなつどいではあつたが女子合宿のもつ意義はかりそめではないといえよう。

学内活動から雲仙合宿へ

新学期が始まるとともに、私達は地区別合宿、西教寺合宿を通して学んできた思いを学園の中で一人一人の友に伝えてゆく活動を起していった。その活動はイデオロギー的なスローガンをかけ、数をもつて事足りれりとするようなものではない。学園に横たわる政治主義とニヒリズムによつて、一人一人分断された友の心に、人を信ずる素直な心情を呼び起し、まごころの通いあうみずみずしい友情の世界を築きあげようとするものであった。

一月末から続いていた早大紛争は五ヶ月余の長きにわたりようやく終りをつげた。その間、学費値上げ反対運動は次第に学生会館問題、その他の政治闘争にすりかえられていった。そして、紛争が長期化してくるにつれ、学友のみならず師友間にも堪え難い不信感が漂つていった。このままではたとえ紛争が解決し、学園が正常に戻つたとしても、残された禍根は癒し難い。早大の今林君はこうした思いにやむにやまれず、数名の学友と共に学園をみだす極端な政治主義を克服し、学生同士、虚飾を排した真の友情と正しい学問を求めべく立ちあがり、「早稲田大学信和会」を結成した。

会の所信と趣旨を次のようにガリにきり、学友に呼びかけた。「我々はこの会を運営するにあたって、人間はみな欠点の多いものであるという自己把握に立つ。我々はイデオロギーの殻を打ち破つて、学園内の友らに対して心の底からわが心を開き、又人の心にとびこんでゆこうと努める。まごころに根ざした人間相互の信頼感、機構制度の効用限界をはるかにこえた、

なんらかの道を拓いてゆくに違いなからう」ここにこめられた言葉は、まずクラスの者から、次に新入生の心を動かしていた。

こうした友への呼びかけは他の大学においても行われていた。九大でも、鹿大でも友らは積極的に各学部をまわり、新入生に対して活発にオリエンテーションを開いていた。こうして各大学の読書会は新しい友らの参加のもとに新学期を迎えたのである。

五月の初めに今夏の合宿地雲仙で第三回目の「十人委員会」が開かれた。そこでは来る大合宿をつらぬく基本姿勢が打ち出され、大合宿開催にむかつて具体的な活動が取り決められた。

大合宿参加申し込みの始まる七月も間近に迫るころ、私達は合宿案内文をたずさえ各地区別に、近隣の大学へ未知の友を求めて巡訪活動を展開していった。思えば、この一年間私達はいくたびか合宿を経験し、相互のきびしい研鑽を重ね、友との友情をはぐくみ正しい学問の道を求めて歩み続けてきた。ともすれば挫折しようとする心を鍛えつつ、自らの思いを学園の一人一人に伝えてゆくことは苦しいことであつた。だがそうした中で新しい友と心の通う一瞬を体験し得たとき、私達の喜びはなにもまして大きなものであつた。一年間のこうした、一人から一人への地道な活動が結集され、まさに開かれようとする雲仙における大合宿に、私達は期待をふくらませながら、その日がくるのを身にしみるおもいで待ち望んでいた。

第十一回「合宿教室」のあらまし

京都大学法学部三年

井上慎一



講義

パネル・ディスカッション

短歌創作・相互批評

班別討論・班別輪読

慰霊祭

この一年間、早稲田大学をはじめとして各地で大学問題が連続し、あらためて、現在の学生運動の思想的動向が世人の注目を集めてきた。このような激動の中で、我々が合宿教室で教えられつつ求め続けてきた学問探求の基本的姿勢は、現代のわれわれ学生生活にとつて最も重大な問題であることが証明されつつあるのだ。われわれは日常の読書会や数回にわたる地方小合宿の中で、さらに現代に生きる青年学生の姿勢を問い続けて来たのである。

こういうつみあげの上に第十一回「合宿教室」が行なわれたのである。期間は昭和四十一年八月五日より九日まで、場所は雲仙小地獄の雲仙ユースホステル、研修テーマは、次の二つであつた。

- A、世界の動向と日本の進路
- B、基本的な人生観の探求

会場の雲仙ユースホステルは、標高七百米の地にあるとはいえ、今年の酷暑を反映して、かなりの暑さである。幹部学生の友ら三十余名はすでに二日前より会場に集合し、部室の割当てや名札作り等諸準備に忙殺されている。

八月五日、いよいよ第十一回「合宿教室」開始の日である。予定の二百名をはるかに超えた三百名に近い参加者が全国各地からつぎつぎに到着してくる。受付係の学生が、テキパキとさばっている。あちこちにはお互に肩をたたきあつて再会を喜んでいるグループも見られる。会場

の正面には、「全国の友らよ共に学び共に語ろうこの五日間を!!」と書いた垂れ幕も見える。参加者の内訳は次の通りであった。

◇参加学生（男子） Ⅱ早稲田大学、慶応大学、中央大学、明治大学、一橋大学、東京工業大学、東京外国語大学、日本大学、政法大学、立正大学、上智大学、明治学院大学、亜細亜大学、学習院大学、東京都立大学、国学院大学、玉川大学、国士館大学、順天堂大学、横浜国立大学、神奈川大学、富山大学、皇学館大学、京都大学、同志社大学、大阪大学、神戸大学、関西大学、岡山大学、島根大学、広島大学、広島商科大学、四国学院大学、下関市立大学、九州大学、福岡大学、福岡教育大学、福岡工業大学、長崎大学、大分大学、佐賀大学、熊本大学、鹿児島大学、鹿児島経済大学、鹿児島工業短大、その他高校生

（女子） Ⅱ東京女子大学、お茶の水大学、学習院大学、津田塾大学、早稲田大学、玉川大学、共立女子短期大学、青山女子短大、同志社大学、神戸女学院大学、西南学院大学、福岡大学、第一薬科大学、長崎大学、熊本女子短大、 計 学生一七三名（男子一五三、女子二〇）

◇社会人 Ⅱ福岡県高校教諭、福岡県小中学校教諭、熊本県教育庁、熊本市教育委員会、熊本市小中学校教諭、長崎県高校教諭、長崎県小中学校教諭、協栄管理株式会社（東京）、株式会社浜田組、株式会社高田工業所、吉川工業株式会社（以上、八幡）、皆川経営研究所（小倉）、株式会社岩田屋（福岡）、増田商店（長崎）、長崎相互銀行、宮崎トヨタ自動車株式会社、株式会社白屋（熊本）、鹿児島興業信用組合、鹿児島県経営者協会、 計五二名



◇ 招聘講師二名、来賓聴講者八名
主催者側

◇ 大学教官有志協議会四名、国民文化研究会四一名、会友五名、事務局九名

総計二九四名

参加男子学生は十五、六名を単位として、十班を編成し、春、比叡山西教寺において行われた、幹部学生合宿を経験した学生が、各班毎に班長一名、副班長二名として配属された。また数名の国民文化研究会々員が助言者として各班についた。オブザーバー参加の女子学生は二十名を一班とし、社会人参加者はこれを四班に分け、会員が二名ずつ世話役としてついた。日程は、別表のとうりであるが、就寝の時間以後、各班の班長、副班長は集合して、その日の各班の問題点を出しあい、各班の運営の万全を期したのであった。さらに特記しておきたいのは、この合宿教室を経て社会人となった若い先輩達をも

第十一回「合宿教室」日程表

8月6日(土) (第二日)	8月5日(金) (第一日)	
起 床		6.00
洗面・清掃		7.00
朝の集い (国旗掲揚・体操)		8.00
朝食		9.00
第一回短歌創作提出		9.00
講義 「近代化」の意味とその克服 (福田恆存講師)		10.00
休憩		11.00
班別研修 (福田講師のご講義について)		12.00
昼食 レクリエーション		1.00
質疑応答 (福田講師)	開 会 式	2.00
班 別 討 論	オリエンテーション	3.00
講義 「聖徳太子・古事記について」(夜久)	班長所懐表明 班員相互交流	4.00
同 右	短歌創作導入講義 (山田)	5.00
	夕入散 食浴歩	6.00
班 別 討 論	講義 「マルクス主義の超克」 (川井)	7.00
	班 別 討 論	8.00
班別輪読 (木内信胤講師の文章)	班別輪読 (福田恆存講師の文章)	9.00
同 右	就 寝	10.00

第十一回「合宿教室」のあらまし

8月9日(火) (第五日)	8月8日(月) (第四日)	8月7日(日) (第三日)
同 右	同 右	同 右
同 右	同 右	同 右
講義 「明治の精神」 (小柳)	講義 「われわれ人間は 自分一人で生きて いるのではない」 (小田村)	講義 「私の経済哲学」 (木内信胤講師)
全体意見発表		質問書提出
全体意見の集約 (川井)	班別討論	質疑応答 (木内信胤講師)
感想文執筆		
閉会式	昼 食 レクリエーション	昼 食
昼 食 解 散	講義 「自己克服」 (戸川尚講師)	短歌講評 (山田)
	班別輪読 「日本への回帰」	仁田峠・野岳登山
	同 右	同 右
	地区別懇談会	第二回短歌提出
	班別短歌相互批評	パネル・ディスカ ッション 「学生生活はどう あるべきか」 (木内、福田講 師ほか)
	慰 霊 祭	
	最後の夜の集い	班別討論
	同 右	同 右

つて「運営委員会」が構成されたことであつた。これ等の人々は、班長の会議終了後、日程表の検討等、運営に全力をそそぎ、毎日睡眠時間は、三時間足らずという状態であつた。

午後二時より開会式、開会宣言につづいて国歌斉唱二回、続いて「われらの祖国を守るために命を捧げられたすべての祖先のみたまに對して、一分間の黙禱を捧げます」という言葉で黙禱。大学教官有志協議会の重細亜大学教授夜久正雄先生、国民文化研究会理事長小田村寅二郎先生、長崎大学経済学部四年森重忠正君が開会挨拶を行った。

それぞれの要旨は次のごとくである。

夜久教授は次のように述べられた。

「現在の混乱は、明治以降の教育、文化、思想等の永年の禍根が積み重なってきた所から出ている。我々は将来の日本を死力を傾けてたて直していききたい。この合宿は、講義を聞いて、ただ帰るといふような合宿とは違う。友と納得のゆくまで語りあいその激しい交流の中に心の姿勢をうちたてるのが目的である。それ故、参加者一人一人の努力に合宿の成否がかかっている。我々も教える者という立場で参加しているのではなく、ここに於て、新しい道を真剣に求めていきたいという気持で参加している。自己の思想が展開していくのは、私の経験から言つても、欠陥の多い自分に目ざめ、それを痛感する時である。自分を正当化している間は、心の展開はない。自己に固執する心を捨てた時始めて新しい世界に開かれていくのである」

小田村理事長は次のように述べられた。

△参加された人の中には素直に受講出来る人もあろうし、反撥を感じる人もあろうが、どうか最後まで努力して欲しい。永い歴史を背負った日本の国の特質は、歴史の中に心を尽して生きてきた祖先の思いを除外しては考えられない。きのうの中に閉じこもらず、しかもきのうまでの生きたものを伝えていく、これが本当の進歩ではなからうか。右翼とか左翼とか分類する前に、同じ国土に住み、同じ言葉を語って歴史を積み重ねてきたという事実をみつめよう。新しいものを取り入れることと、そのとりこになることとは全く違う。国旗を掲げたり、国歌を歌ったりすることは、朝「お早う」ということと同じだ。こういう分りきったことをあげつらうために貴重なエネルギーをつかうことなく、もつと自由に世界の進運に努力して欲しい。そのような理想を具体化する道を求める場がこの合宿教室である。ここでは、学校差、年令差など、一切の社会的ランクは通用しない。そういう場を離れてつながり得る人間の生き方を学んで欲しい。「心が通う」というのは、感情に溺れることではない。魂の展開ということである。そういう経験をもとにして始めて正しい理論も生れてくる。どうかお互に協力してこの合宿教室に日本の国民生活の縮図を実現して欲しい▽

小田村理事長の挨拶の後、ひき続いて、班長並びに国民文化研究会員の紹介が簡単に行われたが、最後に立った学生代表の森重君は地元の学生を代表して次のように述べた。

△我々は人と話をする時、ややもすると自分が傷つくことを恐れ、適当な所で妥協するようなことがある。この合宿教室ではまずそのような気持を捨てていきたい。恥ずかしいという気持や不安にとらわれず、心を尽して話し合う状態を作ろう▽

こうして、合宿教室への期待と、緊張の内に開会式は終わった。

オリエンテーションの時間には三人の学生の所懐表明が行なわれた。

先づ京都大学法学部三年井上慎一は次のように述べた。

△現在の学生生活には全人格的な心のふれあいを通しての人間的な接触、共通の話題がないような気がする。これを可能にするためには、まず徹底的にいろいろな人と話し合うことが必要であるが、それは最高学府に学ぶ者としての最低の義務ではなからうか。班別討論はあくまでもそのような目的の為にあるので、知識のやりとりや論争の場ではない。講師の先生の話を聞くのも一対一の関係で聞いていきたい。真剣に聞くということは、自分の態度の決定、覚悟をうながされることのような気がする。自分の覚悟の表現が大切であつて、観念的な態度は慎んで欲しい。班長は、合宿経験があるという外は、全く班員と平等である。雲仙に来て良かったという気持で別れよう▽

中央大学商学部四年磯貝保博君は次のように述べた。

△この合宿の成果は参加する人の心の姿勢によつてどうにでもなる。参加申込書のアンケート

トを書いた時の気持をもう一度ふりかえつてみよう。諸君は他の人との交流がしたい、何か本物を求めたいと思つて来られたに違いない。私も数回この合宿教室に参加したが、初参加の時はそうだった。この初参加の時の気持を忘れずに、この数日を過したい。人生や学問の姿勢を正すには、自分の心を率直に出して話しあう外に道はないと思う。自分の心を閉ざして人に接するのでなく、班の人達と心一つにしてゆけるかどうか、それが一番大切なことである。この合宿で本当に心に残る言葉を一つでも二つでも胸に刻んで帰りたいと思う。

女子学生を代表して東京女子大文理学部三年梅田咲子さんは次のように述べた。

△昨年の合宿教室の参加によつて私は「心が開かれた」という気がした。この合宿は、人間の姿を正す場であり、真剣に学ぶ友の姿にふれる場である。又和歌を作る喜びも教えられた。それは感動すべきものに素直に感動することであり、物を見る目が一変した感がある。歌を作ることにより心が緊張し統一されるし、歌はその時の精神状態をそのまま恐ろしいほどに表わす。適当に遊び適当に勉強するという学生が現在非常に多いが、私達の若い日々は二度とかえつてはこない。自分の身の回りに、自分の情熱をささげられるものを見つけていきたい。お互に思いやり、うるおいをもつて生きるといふことを、知識としてではなく、体験として学びたい。私は昨年の合宿教室で得たものを大切にしていこの一年間を生きてきた。これからも人と人の心を結ぶべきなを求めするために努力していきたい。

三人共に、それぞれの学生々活をどう生きてきたか、この合宿教室にどう取り組むかを語つたが、緊張の中にもすがすがしいものを感じさせた。続いて生活上の規律について注意があり、オリエンテーションを終つた。会場には張りつめたような緊張感がただよい、いよいよ第十一回「合宿教室」は始まつたのである。

講 義

招聘の二講師は文芸評論家福田恆存先生、経済評論家木内信胤先生である。両先生共に日頃より我々がその御著作に親み、深い感銘を受けてきた先生方であり、日本の良識を代表される方である。ご多忙の中を両先生とも三泊四日の間雲仙に滞在され、質疑応答を含めた四時間にわたるご講義の外、パネル・ディスカッション、さらには、学生の班別討論にまで時間をさいて出席され、学問の姿勢を心をこめて話して下さつた。又木内先生は福田先生のご講義を、福田先生は木内先生のご講義を全部聞かれて、両先生揃つてパネル・ディスカッションに出席して下さつた。それはここで語られる講義が世間でいう、いわゆる講義、講話とは全く違ったものであることを示しているし、我々は両先生の話される中に現状を憂えての祈りにも似た訴えを聞いた。福田先生が、帰られる時間もせまつている時に、わざわざ質問に答えるために学生に会いに来られて、身を以て「師の道」を我々に示していただいたのもその一端を物語るものであ



(班別討論・木内講師をかこんで)

る。両先生に心から感謝したいと思う。

二日目、福田先生は「近代化の意味とその克服」と題して講義をされた。先生は、まず言葉の問題を取り上げられて、 \wedge 言葉による真の伝達は不可能に近い。この「絶望」から全てが始まる。それを乗り越える者が始めてよく伝達を理解し得るのだ \vee と前置きされた後、近代化の問題について話され、最後に \wedge 近代化の克服への道と目として別々に解決の道があるわけではない。現在の混乱を混乱として自覚することが唯一の道である \vee と、結ばれた。

三日目、木内先生は、「私の経済哲学」と題して講義をされた。先生は御自身の思想体験をしみじみと話され、その方法論の基礎として「仏教的哲学による解明」という言葉が使われた。 \wedge 社会科学に属する事柄の理解については「一葉落ちて天下の秋を知る」という言葉を現実に実践する以外、よるべき方法はない \vee \wedge 経済現象は人間

心理の作用を抜きにしては考えることが出来ない。だから人間社会の全般的な理解によって理解すべきで経済だけを取り出しては駄目である。等々の数々のお言葉が強く印象に残った。過去連続七回の合宿教室に於ける講義のまとめとして話されたもので、先生の鋭い洞察力の基となつてゐる緻密な学問的方法に今さらながら驚嘆させられた。

順序が前後するが、第一日目の冒頭講義は、国文研副理事長、鹿児島大学助教授川井修治先生による「マルクス主義の超克」であつた。先生は

△現在の日本は、二十年間安泰を保つてきたようにみえるが、第一に、大量の無関心層の問題、第二に左翼革命勢力の問題が深刻な事態を現出している。特に社会の矛盾を指摘し、敵を明確に設定し、一挙革命をおこすというがごときマルクス主義の魅力は正義感、行動力を持つ学生をとりこにしている。我々は、マルクス主義をはつきりと見詰め、左翼革命勢力の実体を見きわめる必要がある。と強く訴えられた。

第二日目の午後には亜細亜大学教授夜久正雄先生によつて「聖徳太子の信仰思想と古事記のいのち」と題して講義が行なわれた。この講義は本会の思想の源流である黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の抜刷をテキストとして読みつつ行なわれた。推古朝という大陸の文明流入の時代に△動乱の生のかなしき緊張△ともいふべき生涯を終えられた聖徳太子の時代精神を説かれ、さらに太子の御著作に取り組まれた黒上正一郎先生のことばを通し

て、古典に取り組む態度を示されつつ古事記の問題にまで論及された。

第四日目午前の講義は、国文研理事長小田村寅二郎先生により「われわれ人間は自分一人で生きているのではない」と題して行なわれた。

△自分が経験できる社会生活における具体的な「つき合い」を本当に人間らしく出来得る人が歴史ともつきあうことが出来る。われわれは「つき合い」という時、「つき合う心がけ」がどうあるべきかと真剣にみつめなければならぬ」と述べられ、赤ん坊が母親の目をじつと見る、そのまなざしの中に「つきあい」の原型を求めて、話は師弟の間、友人の間さらには建国記念日、天皇の問題にまで及んだ。

第四日目午後は「自己克服」と題する、玉川大学教授、戸川尚先生の講義であった。

先生はスイスのマックス・ピカート、二宮尊徳等の思想を紹介されながら、先年フィンランドに旅行された経験をふまえて△我々人間は自分が有限であればあるほど無限との結びつきを求め、宗教は阿片であるといったソヴェエトで宗教復活がなされている。無限の中にあるものを畏敬し、無限の命のつながりを我に於て自覚することこそ大切なことではなからうか△と結ばれた。又先生は最終日、特に発言を求められ、先生が見聞された、民青同全国大会の模様をつぶさに報告された。

最終講義は福岡県立修猷館高等学校教諭小柳陽太郎先生によって「明治の精神」と題されて

行なわれた。先生は明治時代は生きた時代であり、その時代の人の心の働きは、自由であったが、その時代精神は、その時代を生きた人の言葉に直接触れることによつてのみ感ずることが出来る▽と前置きして「五ヶ条ノ御誓文」福沢論吉の「学問ノススメ」「文明論之概略」樋口一葉の「塵中日記」等に触れられ、最後に日本とはそこに存在するものではなく、統一への意志と独立の精神によつてのみ見えてくるものである▽と力強く結ばれた。

パネル・ディスカッション

今年のテーマは「学生生活はどうあるべきか」である。木内、福田両先生を中心に、大学教官有志協議会の上田、夜久、川井の三先生並びに八代市教育長の加藤先生が壇上に並び、参加者はそれを扇形に囲んでその討論を聞くという形式である。

まず司会の小田村理事長が、昨年のパネル・ディスカッションで問題になつた国語国字問題のその後の経過の報告を木内先生に要請した。木内先生は、表意派の「国語問題協議会」の活動も活発になり、国語問題に関する限り事態は好転しつつあると報告された。福田先生も、木内先生等と協力して表音派と戦うと発言され、満場の拍手を浴びた。

続いて本論に入り、まず、福田先生は、「生キテ之ヲ知ルハ上ナリ、学ンデ之ヲ知ルハ次ナ

リ」という古語をひいて、学生生活の基本的態度について説明された。木内先生も同じことを「行動することにより対象を認識する以外にはない」と強く訴えられた。

次に「大学のイメージ」について論じてほしいとの司会者の要望に対して、木内先生は、現在の大学生活の目的意識の混乱を指摘され、福田先生は以前「潮」に発表された論文を中心に新しい学校制度のあり方を、卓抜した見解のもとに展開され、教育の理念をはつきりさせてから教育にとりかかる以外に道はない、と結ばれた。

次に教育理念の問題が提起された。大学教官の諸先生方から、現代学生の通弊として、情操の涸渇、インスタントな知識の過剰、エネルギーの衰弱などが指摘され、国立大学における国家目的の喪失や、私立大学におけるマスプロ教育の弊害が論じられた。

これに対し木内先生は、「たしかに教育界は、混乱しているが自分自身がすっかりしていれば、どんな逆境であろうと良くすることが出来る。逆境であればこそ出来るのだ」と述べられた。また、福田先生は、人格的接触がなければ、一対一であってもマスプロ教育といふべきであつて、要は学生の求める心の問題だ。西洋では、「国家の為の学問」と「学問の為の学問」とは一致しているのに何故日本では両立しないか、この点を良く考えてみることに、等の問題点を指摘された。最後に、読書には単なる事実を知る読書と、経験としての読書があり、後者が特に大切であること、及び良き師を求めること、この二つを真剣に実行して始めて学生の名に

価値することを強調された。

パネル・ディスカッションは、最初の予定時間を超えて二時間余に及んだが、学生として、現在最も考えねばならない問題だけに、会場には、真剣な雰囲気のみなぎっていた。そして、これを契機として、班別討論の内容が深まってきたことは特記すべきことであった。

短歌創作・相互批評

合宿教室における短歌の創作は非常に重いウェイトをしめている。それは技巧的にすぐれた短歌の創作を目的としているのではない。われわれは歌を通して、人の真情の表現に感動し、自分の心が人の心に伝わっていくことを確認することができる。また歌は自分の真情を正確に人に伝える言葉の訓練の場でもある。

第一日目、福岡県立若松高校教諭山田輝彦先生によって短歌創作の導入講義が行なわれた。

△現在は学生生活のみならず社会全般を通じて情意の涸渇が著しい。生活もビジネスライクになり、情意のない方がかえって生きやすいという状況さえ見られる。このことはイデオロギーの問題よりも、もつと恐ろしいことである。途方もない人間疎外の状態なのだ。豊かな情意は何としても取り返さねばならぬ。歌を作るのはそのためである。情意と感傷は違うし、情意と論理は対立するものではない。正しい論理をおし進めるのは正しい情意の裏づけが必要である。▽

以上のような前提に基づいて、歌は経験したことを正確に詠むこと、その際経験の選択が必要なこと、俳句と違って歌は主題が一つに絞られるべきことなど、作歌上の技術指導が行なわれた。

第二日目の朝、短歌が提出され、一人一首以上が選択され約三五〇首がプリントにされた。生まれて初めて歌を作った人が大部分で、表現も幼く問題も多い。

第三日目の午後山田先生によつて講評が行なわれた。体験を素直に正確に伝えるという基準で、数首の歌が訂正されていく。参加者が心を一つにして何とか作者の気持を汲みとろうとする。時には、爆笑もわいて一時間の時間はまたたくまに過ぎてゆく。最後に先生は次のような言葉で結ばれた。〈言葉によるコミュニケーションは不可能に近いが、和歌はそれに対する一つの果敢な戦いである〉

その夜第二回目の短歌創作が行なわれ、約五百五十首の歌稿が刷り上った。

この短稿をもとにして第四日目の夜、班別の相互批評が行なわれた。班員の全てが作者の気持になることにより、心の交流という体験を実際に感ずることが出来、言葉の選択がいかに難しいか、又、いかに短歌というものが自分の感情を恐ろしいほどに表わすものであるかを実感し得たのであった。

班別討論・班別輪読

班別討論には毎日二時間程度の時間がとられた。あるいは、その日の講義で感じたことをぶつつけあい、あるいは日頃の自分の悩みを打ちあける。ここではあらゆる問題を常に自分の問題として考える態度が厳しく要求される。果して合宿教室に於て、初めて相知つた者同士が、四泊の間に本当に、素直に自分の悩みまで打ちあけられるような仲になれるのか、始めは不安だった。しかしここに集つた者の真摯な態度が、個々の殻を打ち破つていった。二日、三日とたつに従つて、始めの頃のこだわりもとれ、夜を徹して話しあつた人達もいた。又ある班では、しばらくの間沈黙が支配した。しかしこの沈黙が、一人の友の切実な言葉によつて打ち破られた時、本当に心が通じあい、話しあえるという体験を持ち得たのであつた。十四、五名の間ではあつても、真剣に語り、真剣に聞くと、いう態度さえ持てば、心が通じあえるのだという体験を持つたことは、非常に大きな意味を持つものであつた。

班別輪読も又、心一つにして同じ文章の言葉に触れる経験を与えてくれる。

今回は、福田恆存先生の講義の前夜に、その予備知識を得る目的もあつて「現代の思想的課題」(「新しい学風を興すために」第一集)を、木内信胤先生の講義の前夜に同じ目的で「私の構想する世界の新秩序」(「日本への回帰」第一集)を輪読した。

又、第四日目は午後の二時間をとつて、山田輝彦先生の「天皇と天皇のみ歌」(「日本への回帰」第一集)の輪読をした。歌に嘘を詠むとすぐ分るといふ経験をした後だけに、天皇のお氣持が素直に心のなかにはいつてくるのを感じ、天皇への理解の糸口がつかめたような氣がした。

慰 靈 祭

今年の合宿教室初めての試みとして、慰靈祭が行なわれた。ここに祭られる祭神は、「平時戦時をとわず日本の国を守る為に尊い命をささげられたすべての祖先のみ霊」である。

第四日目の夜、宿舎の横の広場に簡素な祭壇が設けられた。宿舎の人達と、近所の人達のあたたかい協力によつて、まわりの全ての電灯は消され、燃えるかがり火の炎だけが赤い。おごそかなうちに式は始まった。お祓いに代えて国文研の三宅先生による三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌朗詠。静寂の中に一きわ高い朗詠の聲が近くの山々にこだまする。続いて、全員黙禱をささげて、降神の儀を行ない、祭壇に神饌をささげる。ついで夜久正雄先生による明治天皇御製拝誦。祖先をしのばれ、戦争に倒れた人々を思われるみ歌が、心にしみいる。小田村理事長による祭文奏上、献詠に代えての全員による「進めこの道」斉唱に続き拝礼に移る。班毎に祭壇の前に整列して、二拝二

拍手一拝の古来よりの作法に従い、祈りをささげる。続いて、全員黙禱による昇神の儀によつて、厳肅な雰囲気の内にて慰霊祭は終つた。祖先を祭るといふことは理屈ではない。我々は民族の伝統的儀式を通じて祖先を祭ることの尊さを身を以て体験したのであつた。

空をおくと、都会では見られない星くずがひとときわ美しくまたいたっていた。

儀式は午後八時三十分よりちょうど一時間を要した。

その際拝誦した明治天皇御製と、奏上の祭文を左に記して置く。

△明治天皇御製拝誦▽

折にふれて

石だたみかたきとりでも軍人みをすててこそうち砕きけれ
たたかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして
はからずも夜をふかしけりくのため命をすてし人をかぞへて
戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ
よとともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを
くのため心も身をもくだきつる人のいさををたずねもらすな
思ふことつらぬきはてて国民の心やすめむときぞまたるる

述懐

千早ぶる神のかためしわが国を民と共に守らざらめや

思往事

をりをりにおもひぞいづる国のため心くだきし人の昔を

△祭 文▽

雲ゆくや、天そそりたつ雲仙岳の、常磐の松の緑色濃きこれの丘べを、祭りの庭と定め、心を籠めて喚ばひまつれるみ祖達のみ霊のみ前に、第十一回全国学生青年合宿教室参加者一同を代表して、小田村寅二郎謹み敬ひも申さく、今日此の時を撰び、種々の物を献げまつり、み霊なごめのみ祭り仕へまつりて告げまつらくは、日の本のみ国をひらきたまひし神々祖先のみたま、とこしへのみくにのいのちを身をすててまもりたまひしちよろづのみ祖達のみ霊をはじめ、み心を傾けてみ国のいのちをつちかひ育てわれら子孫につたへたまひしちよろづのみ祖達のみ霊を、よばひまつりをろがみまつりて、もろともに心つくしてみ国のいのち守り育て、いやかたく後の世につたへまつらむと、ここに集へるわれらもろともにつつしみてちかひまつらむ。この心を天がけりつつみちびきたまへと謹み敬ひも申す。

×

×

最終講義のあとに全体意見発表。最初はやや硬い雰囲気だったが、やがて心がほぐれるに従い、次々に登壇者が出てきた。ある者はこみあげてくるものをおさえてか一口しかしゃべらなかつた。又ある者は来年も是非参加したいと力強く言いきる。合宿の真剣な雰囲気そのままあふれているような感じであった。

感想文執筆に引き続き、正午より閉会式。国歌斉唱に続いて代表挨拶が行われた。

大学教官有志協議会を代表して、鹿児島大学教授上田通夫先生が、**△**諸君は全て大乘の菩薩としてその道を行ぜよ**▽**と激励された。

国民文化研究会を代表して、山田輝彦先生は、**△**イデオロギーの組織ではなく、われわれは生命の組織を広げよう。スローガンではない本当の平和を実現しよう**▽**と結ばれた。

学生代表の早稲田大学政経学部三年今林賢郁君は**△**この合宿での体験を学



園生活の中に生かして本当の学問を興こそう」と決意を訴えた。例年通り、壇上に並んだ主催者側と参加者が向きあって、こみ上げてくるものをかみしめつつ「螢の光」を斉唱する中で、今年の合宿もその全ての行事を終了した。

×

×

宿舎の前では、帰りのバスに乗りこむ者と、整理に残る者とは、かたく手を握り交わしていた。お互いにこの五日間で得たものを大切にし、又来年の夏に会おうと誓いあいながら。

歌

集

— 学生・青年の作品より —



カット
雲仙仁田峠への道

太宰府合宿 (四〇・一一・二〇と二二)

九州大 島津正数

鮮やかに陽に照り映ゆる日の本の御旗仰げば血潮おどりぬ

ああ吾は太子の御教へ偲ばむと心一つに友と語らふ

九州大 脇坂佳秀

うつそうと茂れる木立の影のびて神さぶる社に夕やみせまる

鹿経大 若松三郎

朝明けの冷たき風に吹かれつつ友と語りぬ日の本の道

九州大 片岡健

聖徳の皇子みこの示しし和の道を心を尽して求めゆきなむ

窓の外ははやくも夕日にかがやけりひねもす御文にひたりをりしとき

九州大 古川修

「日の本のまことの道を求めむ」と墨鮮やかに白紙に大書す

次々に友の集へばこころほそき心は晴れて楽しかりけり

日の丸に向ひて国歌を唱和する声は自づと高まりてゆく

縛を棄て個我を断ててふ聖徳のその御言葉は忘れじと思ふ

鹿兒島大 田淵勝次

九州大 稲津利比古

遠くより太子みこの文読まむとはせきたる友あまたありがたきかな
いまはただもてる力を出しつくし友の心にそはむとぞ思ふ
わが心統ぶるがごとき言の葉はみ文のなかに満ちあふれをり

江口君の話を聞く

鹿兒島大 徳田浩士

とつとつと語りたまへる言の葉の胸うつびびき我は忘れじ

聖徳太子の「忿を絶ち瞋を棄てて人の違ふを怒らざれ」

との御言葉にふれて

宮崎大 行武 潔

荒みたる世を治めんと努めたまひし尊き御姿ただに偲ばる

今の世もまた乱れをり理におぼれ人の心もわからずなりて

遠つ世に説かれし太子の御教へにそひて生きなむ力たらずとも

鹿兒島大 北島照明

肌をさす夜明けの冷氣に震へつつ御製をよめば身のひきしまる

明治天皇御製拝誦

九州大 西元寺 紘毅

朗々と声響かせて友達と明治のみかどのみ歌誦せり
国民を思ひ給ひし御心は溢れいでたりこれのみ歌に
こまやかに四方の小さき生命にも思ひはせられしみ歌もありき

京都（日向大神宮）合宿（四〇・一一・二一〜二三）

岡山大 伊藤 三樹夫

あざやかにみち葉映ゆる御社に会ひ見る友の顔はなつかし

京都大 井上 慎一

いそがしきなりはひをさき遠きよりはせ来たたまへる師の君尊し
紅にもみぢする木々を故郷の師の君友等に見せたしと思ふ

一年前集ひし時も木々はみな燃ゆるがごとく色づきをりしを

京都大 福島 義治

わがつかれいやすがごとくもみぢ葉のあたり静かに色づきてをり

美しき紅葉の谷に山鳥の声ぞきこゆるしじま破りて

紅の夕焼空にもみぢ葉のもゆるが如くゆれ動きをり

神戸大 寺川真知夫

去年の秋つどひし宮に今年また新しき友得て集ふはうれし

燃えあがるごとく映えたるもみぢ見しよるこび今も心に残れり

ゆふぐれのあはき光にほの赤き色ましにけり境内にはのもみぢば

伊藤君の研究発表を聞きて

京都大 溝江 優

「共にこれ凡夫」と心をこめて語りゆく友の言葉を聞きてうたるる

我が友となりにし去年こその奇しかる縁を我はありがたく思ふ

東京（明治神宮）合宿

（四〇・一一・二七～二九）

亜細亜大 山路忠重

ひよどりのさへづる朝けみ友らとともに社に向ふすがしき

東京工大 内田 巖彦

静けさを破る小鳥のさへずりのそのかはゆきに耳傾けぬ

東京工大 天川 東作

神々のいますのごとくしのぼるる明治の森に学びつつあれば

朝の掃除にて

高崎経済大 広田耕一

友どちと掃き清めたる玉砂利は朝けのもやに美しく見ゆ
玉砂利に落ちし木の葉を集めむと箒を握る指はつめたき

明治学院大 井上佳彦

ごまかすなといましましたまひし先輩のそのみ言葉の胸にしみいる

亜細亜大 岩越豊雄

早朝にはききよめしがいつのまに庭一面に落葉ふりしく

比叡山、西教寺合宿 (四一・三・一五〜一八)

合宿地西教寺につく

中央大 磯貝保博

静かなる境内にゐて友待てば笑みうかべつつ走り来りぬ
重き荷を手にとり先きに立つ友のうしろ姿に力わくなり

九州大 島津正教

たらちねの母と二人でこまごまと合宿の仕度に夜もふけてけり
ともすれば合宿の仕度なほざりに想ひは滋賀の都へとびぬ

早朝のおつとめ

長崎大森重忠正

腰まがり片足病みし老婆の来て仏に向ひ手を合はせ給ふ
苦しきは消えぬものかな年老いてなほも仏にむかへる姿
御魂をば祭りし後に空見上げ星美しと友はいふなり

火をかこみ酒くみかはし師の君と語りて歌ふ一夜なりけり

比叡山にて

鹿見島大黒木清亜

みごとなる杉の林を見下しつつ比叡の山にわれら登りぬ
深緑にかこまれ流るる谷川の清き流れに見入りけるかも
みわたせばはるかに広がる近江の湖いしへ古人の歌のしのばゆ
ゆたかなる近江平野に広がりし町の白壁かがやきてをり

三月十四日合宿地に着くに井上慎一君父上急死し給ひてすでに

郷里に帰りしと聞く

早稲田大今林賢郁

父上のかむさりまして帰り給ふ君をし思へば胸ふさがりぬ

このたびの集ひのためにこの日まで心つくして来ませしものを

合宿を明日にひかへて帰り給ふ君の心はいかにありけむ

ひさびさにまみゆることのうれしさに集ひきたるに君はいまさず

比叡山根本中堂にて

亜細亜大 岩越豊雄

うすぐらき御堂の中に燃えつづく消えずのともしびほのかにゆらくも

慰霊祭献進歌

我がいのちかりそめならず日本をうけつぎ守りしみ祖思へば

慰霊祭終りて

鹿児島大 土岐直彦

師の君は手をさしあげて高らかにますらをの歌うたひたまひし

小田村先生の御講義をききて

九州大 宮崎義美

正しいと信ずることを行へと力をこめて師はのたまへり

家庭までは愛するをなぜに国を思はずやといふ御言葉に我身はづかし

鹿児島大 徳田浩士

友達はまだ眠りをりわれ一人早きめざめにねがへりをうつ

うぐひすのすがしき声の聞えきぬ朝まだ早き西教寺の庭に

根本中堂にて僧の話聞く

鹿児島経済大 横手満雄

一隅を照らす人たれとの言の葉に今さらながら心動きぬ

叡山を訪ひしかたみと胸に刻む伝教大師のその御言葉を

慰靈祭献進歌

岡山大 伊藤三樹夫

国のため世々につくせし人々の御魂しのびつつ静かに祈らむ

慰靈祭

九州大 古川修

空は冴え星の光は美しく御靈祭りの夜にふさはし

式終へてかがり火囲み友どちとますらをの歌高らかに歌ふ

事務室に班別討論の声をきく

長崎大(事務担当) 内田英賢

ふすま越しに耳に入りくる友達のまごころこめし言葉うれしも

たまたまに激しき議論の聞えくればふすまをあけて語りあひたし

語りたき心ひとしほつのれども事務の終りて告げむとぞ思ふ

薬師寺女子合宿

(四一・三・二八〜三〇)

新潟大 水野雅子

戸を開けてみやれば雨のふるなかにけぶりて立てり薬師寺の塔

友どちと胸はずませて佐保の道をたどり行きけり師のお住居に

学習院大 小田村静代

連れだちて友どちと行く大和路はあしびの花の今さかりなり

病をおして玄関先にいでたまふ師のまなざしはやさしかりけり

岡先生を訪ぬ

東京大 脇山 早久良

病床の日々の長さぞしのぼるる御師の顔のいたくやつれて

病身の師につきそひていたはり給ふ奥様の面は慈母のごとしも

女子栄養短大 長内 美穂子

ともすればこころの狭くなりゆくをくやしと思ひて涙おちけり

法華寺の土塀のかたの天空のあさぎの色の美しきかな

東京女子大 梅田 咲子

朝早く人もまばらなる境内を友とめぐりぬ塔みあげつつ

うすぐらき御堂の中の御仏を心静めておろがみにけり

玉川大 勝山 啓子

装ひは質素なりともいつの日も心豊かに生きたしと思ふ

武蔵野女子短大 田川 美代子

葉のさやぎ日の光さへみやびたる古き都路あゆむたのしさ

友どちと語りあひつつ木の間よりもれくる日さしうけてあゆみぬ

今ここに語らひゐるも尊しとひとみかがやかせ友は語りぬ

母となることを思へばこの身さへおろそかならじと友は語りぬ
言絶えてただ美しと見上げたり朝日たださす薬師寺の塔

「きづな」(女子学生通信誌)より

東京女子大 梅田咲子

便りなき我が家のことの案じられ電話かけむと外にかけいづ
吹きつくる冷たき夜の風の中を心せかれてひたすらに歩む
受話機よりやさしくひびくなつかしの母の声聞き涙いでむとす

東京大 脇山早久良

幼き日ままごとをしてあそびたる赤き実の草生ひ茂りたり
利根川の土堤の薄の丈高く白き穂波の風にゆらぎぬ

元日明治神宮に参る 武蔵野女子短大 田川美代子

ほぐとあまたの人に交りつつ歩みゆくなり宮の参り路
まへうしろゆづりあひつつ神前にいのるは国の榮なりけり
ゆきずりの人も親しきこの御代をともに生きゆく人とおもへば

ひさびさに姉と二人してぬひものの針持つ夜はうれしかりけり

何となく忙しき日頃二人して衣ぬふこともすくなくなりぬ

ほつれやすきゆるき織り目の衣重ねいとしむごとく裁ちてゆく姉

鉄運ぶ手をやすめては父母のこと語りあふ秋の夜長に

合宿より帰る折に

西南学院大 大村圭子

歌を詠むことだけなりと覚え来よといひて送られし母をいま思ふ

新たなる心を持ちて帰り来る吾を母上は何と迎ふらむ

ヘリゲル著「弓と禅」を読みて

新鴻大 水野雅子

幾度か弓をやめんと思いつつなほ進みたり外つ国のひと

かくまでも精神こころの弓を求めたる日々を記せし書の貴き

ヘリゲルの書きし言の葉分らねどとらへてはなさぬひびきありけり

もろもろの弱き心をふりすてて弓をひかむと我が身励ます

雲仙大合宿（四一・八・五〜九）

鹿児島大 横田喜弘

雲仙の下に開けたる天草のいにしへ人をしのびつつ行く

亜細亜大 小山田 清光

静かなる夜もふけゆきて友みなの眠りははやし高原の夜は

鹿児島大 中西 勝義

友どちとところを尽して語りあふその厳しさを我は忘れじ

福田恆存先生の御言葉を聞きて 明治大 繁永正博

師をさがせかく言はれたる先生の御言葉いまも心に残れり

福島君、弟急死の報をうけて合宿地を去る 富山大 岸本 弘

言ひかはず言葉も少なく去りゆきし君が胸内いかがあるらん
何一つなぐさむる言葉も口にいはず君を送りて心むなしも

鹿児島大 溝口 忠文

幾年も風雨きびしき山頂に耐へて根をはるみやまきりしま

下山の途中にて 亜細亜大 坂本 民雄

何げなく語りし人は同郷とわかりてさらに心なごみぬ

長崎大 田村 潔

しみじみと友と心の通ひたる集ひの喜び消ゆることなし

美はしき景色を眺めてしみじみとうれしと思ふ日本人なりしを
神戸大 野口豊太

九州大 蒲牟田高雄

真青に晴れわたりたる朝空に静かに昇る日本の旗

鹿児島大 藤崎義之

はるかなる故郷の母のいまいかにあるかとせつに偲ばるるなり

九州大 稲津利比古

A 君に贈る歌

合宿の名簿にたまさか君が名を見つけし時はうれしかりけり
去年の夏友らと語らふこともなく黙せし君を思ひ起しぬ

慶応義塾大 安田稔

合宿の開会式に臨みゐて君が代の声胸にしみ入る

合宿中途より帰りたる友に
京都大 井上慎一

私のいふ言葉も聞かずただ君は手をふりきりて外に出でにき
おのがじし素直になりて人の言ふこと聞くほかに道なしと思ふ
君に言ひし私の言葉に嘘なきかとただただ深く省みらるる

九州大 島津正数

おのが身の心の奥まで響きけり良き師もてとの師の御言葉は

木内先生の御講義を聞きて

修猷館高 小森秀人

しみじみとしみこむごとき言の葉になやみぬかれし跡を感ずる

川井先生の御講義を聞きて

鹿児島大 工藤一巳

きびしかる師の言の葉にしのはるる長き努力の心のつよさを

「苦い経験の深い悲しみは話さぬ」

といふ木内先生の御言葉を聞きて

鹿児島大 北島照明

人間のまことの深き悲しみに耐へて生きます御姿尊し

玉川大 二井康雄

えにし得て初めて会ひし友どちの言の葉すべてに耳傾けむ

鹿児島大 曾木国智

目をとちて静かに床にふしをれば心に友の声ぞ残れる

鹿児島を発つにあたって

鹿児島大 土岐直彦

朝まだき星の残れる街中を父は車で吾を見送りし

鹿児島大 嶋村宗広

たくましく空にそびゆる木々のごと我も生きたし世の荒波を

洗濯さるる先生の姿を見て 中央大 樋泉克夫

我々とともにあゆまんと生活をともにしたまふ姿尊し

大阪大 上村佐紀夫

膝交へ語らふ友の顔見ればあらたなる闘志ひたにわきくる

長崎大 椀島有三

真心を尽して人に話さむと思へど何故か心ふさがる

横浜国大 深田肇

夜更けてかがやく星を眺むれば友とかたりし喜び迫る

亜細亜大 宝辺幸盛

友どちと声高らかにますらをの歌詠みゆけば涙こみ上ぐ

九州大 山下光明

若人の競ふ歌声はつらつと林の道にこだま残しつ

梅田さんのオリエンテーションを聞きて 早稲田大 今林賢郁

ひたひたとよせくる波のそのままに君のおもひのひたに迫り来ぬ

きびしくも生きてありしかみ言葉の静かにはあれどその力強さよ

聞くうちにのが心の統べられてあらたな力の湧き来る覚ゆ

東京工大 内田 敏彦

紳士的態度は捨てようと言ふ友の真摯な言葉胸にせまりく

下関市大 梅谷 道明

班員と歌をうたひてすごせしはしばしと言へども安らぎ覚ゆ

早稲田大 伊賀 義昭

合宿の思ひを長くとどめんと友と肩くみカメラに向ふ

鹿児島大 福岡 利裕

班別討論の際に

先輩の言葉にはつと人生を生きゆく事の厳しさを思ふ

東京女子大 梅田 咲子

オリエンテーションにて

大勢の友等の前で語りゆく拙なきことばに心をこめて

語りゆく拙きことばをいつしんに聞く友達のまなざしうれし

玉川大 畑野 純子

我は今何を求めて進まんと覚えざれども友ありてうれし

友どちのつくりし歌は我が歌になきまごころありいたく胸うつ
共立女子大 山田苑枝

津田塾大 友清蓉子

なつかしき友の手をとり語りあふその口もとに喜びあふれをり

第一薬科大 平下博子

木内先生の御講義を聞きて

御講義をすべて理解はできねども心はすがし終りし時に

株式会社増田商店 重松憲一

なきしきる蟬の声ききふるさとの病弱の母思へば苦し

皆川経営研究所 荒巻哲朗

雲仙の緑に映えて日の丸はををしくあがり身もひきしまる

熊本市立託麻原小学校教諭 宮本忠昭

若者の集ひに入りて我もまた日本の未来築かむと思ふ

友の母「キトク」の電報ありて

合宿地を去る 熊本市立藤園中学校教諭 宮永高昭

友の母危篤の報に胸つまりよくなれかしと神にいのるも

かの友は母をおもひついまごころは汽車やおそしと駅にまつらん

雲仙小地獄にて

長崎県立島原高校教諭

永田徳穂

たらちねの母に負はれて来し里に我は来にけり齡かさねて

山なみの胸に抱かれし雲仙の合宿にゐて亡き母を憶ふ

熊本市立碩台小学校教諭

本庄茂道

合宿の体験語る学生の光る涙に心うたるる

オリエンテーションにて

熊本市立竜南中学校教諭

野水一郎

をとめごが切々述ぶる言の葉の一語一語は胸にせまりつ

福岡市 筑紫女学園中学校教諭

田村常武

道を説く師の一言ももらさじと聞く若人の瞳かがやく

熊本市立城東小学校教諭

木多繁男

あとおひて振る吾子の手をしのびつつ一人まどろむ合宿の夜

熊本市立健軍小学校教諭

相良正典

語りても語りてもまだつきせぬを燈消して今日を終りぬ

福岡県糸田町立糸田小学校教諭

大森俊輔

すめろぎのみゆきし給へる高原の歌碑の前は去りがてぬかも

この国の行くべき道を語らむと吾子の頭をなでて旅立つ

熊本県教育庁

後藤

包

亡き道友を偲びて

福岡県川崎町立川崎中学校教諭

向山

正

癌と知る友を残して旅立ちしこぞの合宿よみがへりくる
せまりくる友の死おもひすべもなき歎きに耐へし高原の夜半
亡き友の生きてしあらば雲仙のこの合宿に來たりしものを

あ と が き

編集にとりかかつてから、半歳に近い月日が流れた。校正の筆をにおいて窓の外を見ればすでに新緑、今年八月、阿蘇国立公園で開かれる第十三回の合宿教室まで三ヶ月の日数を余すのみとなった。東京から関西から或は九州各地から、新しい年度を迎えて活発な運動をつづけている学生の便りが日々寄せられているが、この小冊子が未だ見ぬ全国の友らの机上に置かれる日も遠くはないことを思えば、感慨新たなものがある。

ともあれ、こうして編集の筆をおけば、全国に散っている数多くの師友の力がさまざまな形で一つの流れに注ぎこみ、それが次第に激しさを増していくすがたをひしひしと感ずる。あとがきにしたためたいことは、ただかかる師友の厚いおもいに対する謝念以外にはない。

昭和四十二年五月九日

編集委員

(北九州)	山
(下関)	宝
(岡山)	名
(福岡)	小
(福岡)	小
	柳
	陽
	太
	郎
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦
	輝
	正
	田
	辺
	林
	越
	二
	荒
	之
	助
	久
	彦

■ 国民文化研究会
出版図書目録

A 6 版 88頁 定価 150円 千40円



青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ—国民文化研究会—は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人たちであるから。次代を背負うものは諸君である。

混迷に沈淪しつつある祖国の命運を開く鍵を托されたものは、諸君を置いて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心そのままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれでたこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたなどとは、味あうべき問題をもっていると思う。

—「はしがき」から—

講義

経済学の考え方と日本経済への

適用および政策の方向：石村暢五郎

平和革命論の検討：川井修治

世界史の発展：広田洋二

日米開戦の真相：渡辺 明

ソビエト第二十回大会における

「スターリン批判」を中心に：日下 藤吾

マルクス資本主義崩壊必然論

について：吉田 靖彦

共産治下国民生活の実態：名越二荒之助

昭和史をめぐって：森 裕三

社会主義文学理論の検討：山田 輝彦

民族的抒情の回復を阻むもの小柳陽太郎

抒情詩論：夜久 正雄

日本政治の再建のために—特に天皇制の

問題について—：小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等—写真

A6版 定価 50円 ㊦20円



民族自立のために

—ぼくらはかく祈り かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に

この書を捧げる—

国民文化研究会

目次

- 民族復興の根底をつちかうもの
- 合宿にいたる経過
- 合宿人員の構成
- 経過報告
- 班別編成
- 班別討論
- 全体討論
- 講師別討論

合宿感想集

- 参加者からの手紙
- 参加学生、青年に訴う
- 写 真—

講義

- 現代日本の盲点……………名越二荒之助
- 現代思想の根本課題……………川井修治
- 歴史観の諸問題……………浅野晃
- 世界経済の基本的動向……………伊部政一
- 日本経済の特質と
- 経済計画の方向……………石村暢五郎
- 日本文化の位置……………竹山道雄
- 現代哲学の窮極の問題……………高山岩男
- 日本文化の源流—聖徳太子の
- 信仰思想を中心として……………高木尚一
- 日本文化の血脈……………南波恕一
- 学生生活と国民生活……………小田村寅二郎

新書版 113頁 定価 100円 ㊦30円

民族復興の根柢を培うもの



—写 真—
刊行した。

……わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念じながらこの書を

- 感想発表会
- 班別討論会

○パネル式座談会「共産社会に住んでみて」
—在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏
同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏
○参加者全員に和歌創作の手ほどきをなし、
全員創作を行なう。

講 義

- 合宿教室の意図するもの……川井 修治
現代日本の盲点……名越二荒之助
所謂、資本主義社会と
・社会主義社会について……石坂 豊明
共産主義対策への私見……木 下 彪
経済学の日本の思考……石村 暢五郎
古典のいのち……南波 恕一
聖徳太子研究と現代……高木 尚一
日教組は現状から
脱却すべし……浜田 収二郎
人間性に立脚する政治……小田村寅二郎
分裂を統一に導くもの……南波 恕一

新書版 250頁 定価 200円 40円

民族の明日を求めて

民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまう
っていたり、「あたりまえのこと」が、かえってもの
めずらしげに見られたりしている。

国を愛することも、民族の道統を求めめることも、なに
か、かたくなな人たちだけのものにされてしまって、現
代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、
はれものにさわるような、こわいしろものにされたまま
になってしまった。

目次

- 第一日 友らの邂逅(かいこう)
 - 第二日 民族の意志回復のために
 - 第三日 思想の流れをみつめて
 - 第四日 よろこびと前進のために
- 附 合宿感想集、外
- 写真 —

講義

- 共通の広場の形成するもの：瀬上安正
- 人間性・解放の道
- 国民共同体の現実—基盤 小田村寅二郎
- 天皇制の本質：………森 三十郎
- 日中関係の過去・
- 現在・将来：………木下 彪
- 道徳の周囲：………山田 輝彦
- バイブルを統綜する
- 日本文化の遺法：………名越二荒之助
- 生理学・医学の流れ：………小川 幸男
- 階級史観と民族の問題：………川井 修治
- 日本における社会主義の運命
- 革新陣営の発生と
- 現状および将来：………菊池 紳隆
- 戦後意識の論理
- 現代教育刷新の基本課題：勝部真長
- 詩的精神興隆に
- 期待するもの：………小田村寅二郎

B 6 版 365頁 定価 500円 90円

(三部作その一) — 理想社 刊行 —

国民同胞感の探求



目次

はしがき

「合宿教室」誕生の背景

一、現代の国民思想について

二、全学連の動きについて

三、全学連にどう対処すべきか

四、時代の断層と取り組んで

「合宿教室」運営のあらまし

一、講義と班別討論の関連性

二、チューターシップ

三、人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇「合宿教室」の記録

一、未知の者ここに集う(第一日)

二、緊張する心を講義と討論に(第二日)

三、心の揺らぎと青春の欣喜と(第三日)

四、「時代の断層」をふみ越えて(第四日)

五、国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から
あとがき

— 写真 —

講義

人生・学問・祖国……………川井修治

学生生活に対する要望……………宝辺正久

現代と心理戦……………今立鉄雄

学生運動への疑問点……………植木九州男

社会思想の構造と

マルクス主義……………長野敏一

学問論……………戸川尚

陶淵明の詩における

東洋的人間像……………津下正章

わが国固有の人間観の特徴……………野口恒樹

日本人のころ……………花田大五郎

マルクス経済学の生成と

近代経済学……………石村暢五郎

畏と敬と恥……………水野武夫

第二次大戦論……………中山優

歴史なき現代に思う……………木下彪

マッカーサー憲法と

国民主権……………森三十郎

平和国家建設の

基本的課題……………小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6版 433頁 定価 560円 100円

(三部作その二) 一理想社 刊行一

続 国民同胞の探求

目次

はしがき
現代の問題点

一、初の宇宙人・ガガーリン少佐

二、ソ連の教育と日本の教育

三、全学連と大学自治会

付、自治会活動への所感

「雲仙合宿教室」の目ざしたもの

「雲仙合宿教室」の記録

一、学生による全体討議(第一日)

二、講義から班別討論へ(第二日)

三、唯物史観の横行を許さず(第三日)

四、経済の諸問題とその研究方法論(第四日)

五、「開かれた日本人」へ(第五日)

はしがきの感想文から

十日後に書かれた感想文から

あとがき

—写 真—

講義

体験と思想……………夜久 正雄

現代の思想的課題……………齊藤 知正

新中国建設の原動力……………佐藤慎一郎

日本文化の伝統と

現代の意義……………黒岩 一郎

現代政治の批判と

新しい指標……………羽田 重房

世界の経済と

日本経済(一)……………木内 信胤

良識について……………花田 大五郎

五日間の生活を

ともにして……………小田村寅二郎

思いのままに訴う……………

木下 彪・野口恒樹

水野 武夫・峯 辰次

植木九州男・津下 正章

班別討論・意見発表会・検討会等



B6版 325頁 定価 500円 780円

(三部作その三) 一理想社 刊行一

続々 国民同胞感の探求

続々 国民同胞感の探求

目次

はしがき

国民同胞感………小泉 信三

—毎日新聞より転載—

学問の興隆のために

正しい研究方法を求めて

………小田村寅二郎

第二次雲仙「合宿教室」のあらまし

「合宿教室」における講義(下記)

「合宿教室」運営の焦点

一、「班別討論」と「夜の検討会」

二、大教協・国文研会員の所見発表

三、合宿教室の総括的所見

はしがきの感想文から(77通)

あとがき

—写真—

講義

国民同胞感の育成への

努力と指向………小田村寅二郎

学問と人生………津下 正章

EECをめぐる世界の経済と

日本の経済………木内 信胤

学生時代を回顧しつつ

現代の学生諸君に………花田 大五郎

吉田松陰を中心とした

幕末日本の文化精神………川井 修治

小林秀雄先生のご講義

「現代の思想」………国武 忠彦記
(所見発表)

大学教官有志協議会………

水野武夫・黒岩一郎・末吉 哲

植木九州男・吉田靖彦

国民文化研究会………

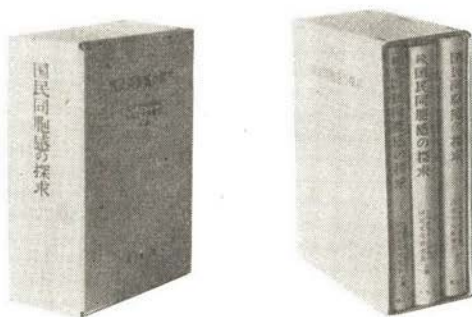
小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之

宝辺正久・加藤善之・徳永正己

坪井保国・加藤敏治・関根康弘
瀬上安正

“合宿教室” レポート { No. 5 国民同胞感の探求
 No. 6 続国民同胞感の探求
 No. 7 続々国民同胞感の探求
 大学教官有志協議会 } 共編
 国民文化研究会 }
 一理想社 刊行一

国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 ㊦ 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この三部セットは、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

＊合宿教室＊レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

……お申込みは国民文化研究会へ……

新書版 248頁 定価 200円 50円

新しい学風を興すために

第一集

(附) 合宿教室における短歌創作の記録



「いまここに第七回目の合宿教室を迎えるにあたって、私たち主催者は今回からは「国民同胞感」を「探求」するという心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とはやや心組みを交えております。すなわちこれからは「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拡がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿を踏み出したと考えているのです。」

「この合宿教室のめざすもの」から
― 巻末には参加者全員の短歌作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、二五八首の短歌を収録した―

目次

- 一、国民同胞感樹立のために
第七回「合宿教室のあらまし」
この合宿教室のめざすもの
- 二、合宿教室における講義
現代の思想的課題……福田 恆存
世界の見方……木内 信胤
- 三、合宿教室における短歌創作
短歌の哲学と技術……夜久 正雄
第一回短歌創作と批評
第二回短歌創作の記録

新書版 298頁 定価 300円 ㊦ 50円

新しい学風を興すために

第二集

「合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破って、友情の世界に開眼する場でないばならない。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失われつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がなぎ合わされてゆくならば、それは国の根底を培う大きな力となるであろう」

—「はしがき」から—

目次

一、合宿教室の意義

「戦後」二十年の日本とわれら同人の祈り

第八回「合宿教室」のあらまし

二、合宿教室における講義

物の考え方………竹山 道雄

最近の世界と日本………木内 信胤

(附：パネル・ディスカッション)

現代の政治的危機………木下 広居

三、合宿教室における論読と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化

創業」の論読………小田村寅二郎

短歌創作について………
山田 輝彦
夜久 正雄

雲仙合宿歌集

新書版 299頁 定価 300円 50円

新しい学風を興すために

目次



新しい学風を興すために

第三集

“この合宿ではお互いに思想を鍛えて行くわけですが、こゝで注意しておきたいのは、思想とは生活の根本を支える心の姿勢そのものだということです。普通、思想というと、思想大系と殆んど同義語とみなされておりますが、本来思想とは体系化された複雑なものではなく、単純素朴なものでなければならぬと思います。他人の思想体系にすがってしか、もの言えない人が多い今日の風潮において、特にこの点を強調しておきたいと思います”

——「思想の形成」から——

目次

一、新しい学生運動の展開

雲仙合宿から桜島合宿へ

第九回「合宿教室」のあらまし

思想の形成……………夜久 正雄

二、合宿教室における講義（その一）

日本の政治と外交……………広田 洋二

日本の政治と経済……………木内 信胤

（附：パネル・ディスカッション）

常識について……………小林 秀雄

三、合宿教室における講義（その二）

歴史と人生観……………川井 修治

現代日本の二つの問題点……………

小田村寅二郎

歌集——この一年の学生短歌作品より

新書版 295頁 定価 300円 50円

日本への回帰

第一集

日本青年の心に魂と魂が響き合うよ
ろこびが実感された時、思想の低迷は必ず
打ち破られるであろう。意志は指標を見
出し、視野は世界へ開かれるであろう。
人の心が正確に働かねば一切の組織や制
度は空しい。

雄々しい意志と、みずみずしい情感を
もって果敢に現実に向かえる青年、
そういう一人の「人物」の養成にわれわ
れの希いはかけられている。このメカニ
カルな時代に、野暮とも愚直ともいわれ
ながら一人から一人への「志」の伝達に
心血をそそいできた。この冊子は、そう
いうわれわれの苦闘のささやかな記録で
ある。

—「はしがき」から—

目次

- 一、学問・人生・祖国
私達の学生運動
第十回「合宿教室」のあらまし
二、合宿教室における講義
私の構想する世界の新秩序
……木内信胤
日本的情緒について
……岡 潔
日本政治の憂うべき動向
……花見達三
バナール・デイスカッション
三、古典入門
吉田松陰「士規七則」
……玖村敏雄
山鹿素行について
……筒井清彦
聖徳太子「勝鬘経義疏」
……夜久正雄
天皇と天皇のみ歌……山田輝彦
吉田松陰「講孟餘話」
……小柳陽太郎
- 合宿歌集



新書版 246頁 定価 280円 円 50円

〈国文研叢書 1〉

古事記のいのち

夜久正雄 著

古事記のいのち

夜久正雄 著



遠い古代の異つた生活の表現の中にも、遠い異国の見知らぬ生活の表現の中にも、現代のわれわれ自身のすがたと変らぬ姿を見るとき、われわれは、そこに永遠の中の自己を見るのです。いま皆さんとこれから「古事記」を読まうとするのも結局は、かういふ心持からであります。世間でいふやうな意味での学術的研究作業としてはありません。「古事記」というものから、自分の心の支へ、自分の心の、生きてゆく上の力を得ようといふ態度で読まうとします。

―本書三〇頁―

目次

- 一、古事記への道
- 二、古事記の魅力
- 三、国作りの叙事詩
- 四、古事記の主題
- 五、愛の歌
- 六、古事記のあらすぢ

(附)

日本古代史略年表

新書版 279頁 非売品

<国文研叢書 2>

日本精神史鈔

—親鸞と実朝の系譜—

桑原 暁 一 著



この小著は親鸞と実朝とが前面に出ているが、いずれも聖徳太子とのかかわりを心に止めてとらえられているのである。その太子の精神とは何か。一言にして云えばそれは「和」である。仏教語で、忍辱であり慈悲である。云いかえれば目に角を立てぬことであり、思いやりあることである。さらに「云いかえれば、是非・善悪の名によって、にわか人間を裁断せぬことであり、自他をわかつたず悲喜を共にすることである。

—「はしがき」より—

目次

第一編

親鸞とその系譜

第二編

源実朝覚書

第三編

塔と橋と

新書版 241頁 非売品

〈国文研叢書 3〉

弁証法批判の歴史

高木尚一 著

弁証法批判の歴史
高木尚一著

人生の学、人生のロジックというものがいかに大切であるか。たとえば今の世には進歩派と保守派の二つしかなく、前者は善で、後者は悪であるとの、簡単な色分けの上に立って考えたりするのは人生のロジックとしての厳密さを全く欠いているからに外ならない。

本書はヘーゲル・マルクスの弁証法がベルグソン、ヴント等によって批判され地についた論となる過程を説明し、日本の思想の開展すべき方向を明らかにしようとするのが第一の目標である。

—第一章より—

目次

一、弁証法とは何か

二、弁証法批判の歴史

ギリシヤ弁証法とアリストテレス

カントよりヘーゲルへ

ヴァインデルバントのヘーゲル批判

ゲーテとヘーゲル

マルクスのヘーゲル批判

ショーペンハウエルのヘーゲル酷評

ニーチェの超人思想と弁証法

キェルケゴールのヘーゲル批判

ベルグソンの弁証法批判

ヴントの思想と弁証法批判

(以下略)

三、日本思想と弁証法

日本思想の動向

道元と山鹿素行

A 6 版上製 294頁 650円 790円



聖徳太子の信仰思想 と日本文化創業

著 者

黒 上 正 一 郎 著

原著は昭和十年七月二十一日、第一高等学校昭信会によって世に出たものであるが、昭和四十一年に至って原著を完全に復元し、更に憲法拾七条をはじめ太子関係の資料をそえて出版されたものである。

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さで死去した。明治三十三年、徳島市の素封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮の経文から、聖徳太子の研究に進み、特に本書の述作には、一語一句に心血を注いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一高に昭信会、高師に信和会という研究グループが生まれたが、共産主義運動の渦巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生を指導し、太子のご精神を若い次代の青年に伝えたのである。

目 次

—復刊のことば—

序 説

序 説 附 聖徳太子の体験過程

序 説 附 二 聖徳太子御著

第一編 「三経義疏」の内容

第二編 聖徳太子の人生観と政治生活

第三編 聖徳太子の信仰思想と国民精神

第四編 聖徳太子の大乗仏教批判
総合と国民教化

第五編 聖徳太子の御思想表現法
と法華義疏の独創的な内容

参考資料

聖徳太子の憲法拾七条

聖徳太子を中心とする系図、年譜、
聖徳太子の時代についての解説

その他

新書版 121頁 頒価 150円 千 20円

— 国民文化研究会発行 —

歌よみに与ふる書

(他 四 編)

「子規の文章は難解だが、まさかこれを現代語訳して読ませるわけにもゆくまい。それでは子規の語調が消えてしまうからである。

語調が消えるというのは、筆者の情意がなくなってしまうということである。この情意をともしない灰色の理屈、実行意志のない観念——つまりイデオロギーを排したのが子規の歌論だ。その歌論から情意を抜きにするわけにはゆくまい。子規のものは、どうしても原文のまま読むよりほかに方法はない。

— 「あとがき」より —

目 次

歌よみに与ふる書

..... 明治三十一年

あきまろに答ふ

..... 明治三十一年

人々に答ふ

..... 明治三十一年

「歌話」

..... 明治三十二年

「墨汁一滴」抄

..... 明治三十四年

あとがき・解説

..... 夜久 正雄

新書版 157頁 頒価 230円 ㊦ 45円

今上天皇御歌解説

附・万葉集論

三井 甲之著 斑鳩会発行



三井甲之氏は正岡子規の遺業、根岸短歌会を継承し、雑誌「アカネ」を編集、その後「人生と表現」「原理日本」を発売、大正、昭和の思想界に独自の地位を築いた。

「天皇御歌解説」は昭和二十七年二月、同氏が病床において一切の不自由に耐えつつ「永訣の書」として執筆、自費をもって騰写印刷の上頒布されたものである。

附載の「万葉集論」は明治四十一年から二年にわたって根岸短歌会発行の「アカネ」誌上に発表された論文を集めたもの、六十二年の長い月日をへだてて、ここにはじめて復刻された記念すべき論集である。

目次

天皇御歌解説

万葉集論

万葉集の研究に就て

詩歌製作の衝動と其表現法を論ず

和歌俳句の形式比較論及現代歌俳

墮落の原因

万葉集の女詩人・額田王

柿本人麿の生活と作歌

大伴旅人の生活と作歌

山上憶良

沙弥満誓の歌

山部赤人の歌を論ず

大伴家持

万葉集中の民謡

万葉集中第十六巻に就て

解題……………夜久正雄

刊行のことは……………亀井孝之

B5版(8頁) 毎月1回発行
昭和36年11月創刊
発行所 **国民文化研究会**



— 月 刊 —

国 民 同 胞

定価 1部 20円 年間 360円(送料共)

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情をあまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにささやかな機関紙であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに、是非とも耳をかたむけていただきたいと思う。

申込先

下関市南部町3 宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部 (振替 下関 1100)

東京都中央区銀座7丁目3 柳瀬ビル

国民文化研究会 (振替 東京 60507)

— 日本への回帰 —
(第二集)

昭和四十二年五月二十日発行

定価 三〇〇円

〒 50 円

編 者 大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小 田 村 寅 二 郎

発 行 所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座七ノ三

柳瀬ビル 三階

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします

